商法ノ施行ヲ延期セラレ、其結果遂ニ特別委員ヲ設ケ民法商法ヲ併セテ審査修正セシメントノ建議ヲ爲スモノアルニ至レリ。其說ニ曰ク、該法ノ規定スル所往々民情ニ違ヒ習慣ニ背キ、且其法文難澁ニシテ意義明晰ヲ缺ク云々ト、夫レ或ハ然ラン、然リト雖ドモ人定ノ法律ハ初メヨリ其完全無缺ヲ期シ難シ。宜ク數年經驗ノ後實際ノ利害得失ヲ考究シ、改正修補シテ以テ其完全ヲ望ムベシ。故ニ民法商法ノ如キモ之ヲ實施シテ多少ノ歲月ヲ經過スルトキハ、人々各自ラ善ク該法ノ意義ヲ了知スルヲ得ベシ。既ニ善ク之ヲ了知スレバ始メテ其果シテ民情ニ違フヤ否、習慣ニ背クヤ否ヲ論議スルコトヲ得ベシ。若シ夫レ實際ノ經驗ニ據ラズ徒ラニ其利害得失ヲ評論シ、甲ノ編纂ニ係ルモノハ乙之ヲ不可ナリト爲シ、丙ノ修正ニ出ルモノハ丁之ヲ不當ナリトシ、修正又修正空論更ニ空論ヲ加フルトキハ到底窮極スル所ナカルベシ。果シテ然レバ其修正シタルモノハ必ズ皆民情ニ違ハズ習慣ニ背カザルコトヲ得ルヤ甚ダ疑ナキ能ハズ。何トナレバ則チ其修正ノ根據トスル所ハ未ダ曾テ之ヲ實際ノ經驗ニ徵シ其利害得失ヲ考究セザルモノナルヲ以テナリ。加之民法商法中假リニ修正スベキ所アリト爲スモ其施行期限前餘ス所僅ニ半年餘ニ過ギズ。半年餘ノ日子ヲ以テ浩瀚ナル兩法典ヲ修正スルハ決シテ爲シ得ベキコトニアラザルナリ。夫ノ法文ノ難易ニ至テハ則該法ノ編纂者ト雖モ故ラニ其難澁ナルモノヲ用ヒタルニアラズ。唯其法意ノ含蓄スル所從來慣用ノ文字能ク之ヲ盡スベカラザルガ故ニ已ムヲ得ズシテ新造シタルモノナルベシ。今若シ之ヲ修正セバ則或ハ幾分ノ簡易明晰ヲ得ルモノアルベシト雖モ、苟クモ其趣旨ニシテ異ナラザル以上ハ未ダ以テ既定ノ法律ヲ變更スルノ理由ト爲スニ足ラズ。然ルヲ尙民法商法ハ直チニ實施ス可ラザルモノト爲シ、更ニ之ヲ審査修正セシメン乎、政府十餘年幾多ノ心力ト幾多ノ國財トヲ費シ立法院ノ議決ヲ經既ニ相當ノ法式ヲ以テ發布セラレタル成典ハ忽チ變ジテ未定ノ草案トナリ、法律裁可ノ效力ハ之ガ爲メニ消滅シ、公布執行ノ命令ハ之レガ爲メニ破毀セラレントス。抑々民法商法ハ未ダ之ヲ施行セザルモ政府ハ既ニ之ヲ執行スルノ責任ヲ負ヒ、人民ハ之ヲ遵守スルノ義務ヲ負フタルモノニシテ、固ヨリ他ノ法律ト擇ブ所ナシ。然ルニ民法商法ヲ見ルコト恰モ未定ノ草案ニ對スルガ如ク、直ニ之ヲ審査修正セントスルハ法律ヲ蔑視スルノ所爲ニシテ、實ニ法律歷史上ノ一大汚點タルヲ免レズ。故ニ今政府ハ唯當サニ銳意專心其已レニ命ゼラレタル法律執行ノ責ニ任ジ、民法商法ヲ施行シテ沮碍ナカラシムルコトヲ務ムベシ。然ル後之ヲ實驗ニ徵シ果シテ修正ヲ要スルモノアルヲ見出スコトアラバ直チニ相當ノ委員ヲ撰定シテ十分ノ審査修正ヲ爲サシムルコソ至當ノ順序ナルベシ。苟モ其然ラザルニ先ンジ政府自ラ修正ヲ唱ヘ、委員ヲ設置センコトスルガ如キハ不二麻呂ノ斷ジテ同意スル能ハザル所ナリ。

明治廿五年四月廿一日

司法大臣子爵　田中不二麻呂

二十五年五月十六日貴族院議員村田保ハ百十五名ノ賛成ヲ得テ民法商法施行延期法律案ヲ提出セリ、其法律案ハ左ノ如シ。

民法、商法施行延期法律案

明治廿三年三月法律第二十八號民法財産編財産取得編債權擔保編證據編同年三月法律第三十二號商法同年八月法律第五十九號商法施行條例同年十月法律第九十七號法例及第九十八號民法財産取得編人事編ハ其修正ヲ行フガ爲メ明治二十九年十二月三十一日マデ其施行ヲ延期ス

二十五年五月二十日内閣會議ヲ松方邸ニ開クニ方リ、不二麻呂發言シテ曰ク、今ヤ民法商法施行延期法律案ノ議會ノ議ニ上ルハ正ニ兩三日中ニ在ルベシ。故ニ該延期案ニ對スル閣議ヲ確定スルハ寔ニ緊急ノ事タルヲ信ズ云々、是ニ於テ各大臣ハ討論ヲ竭シ遂ニ該延期案ハ縱令兩院ヲ通過スルモ政府ハ從來ノ方針ヲ執リ斷然施行スベキ旨ニ一決セリ。依テ不二麻呂ハ政府ヲ代表シテ該延期案ニ對シ不同意ヲ議場ニ明言スベキヲ約シタリ。此日列席ノ閣員ハ松方總理大臣大木文部大臣榎本外務大臣後藤遞信大臣樺山海軍大臣副島内務大臣河野農商務大臣ナリ（高島陸軍大臣ハ病ニ依リ缺席）

二十五年五月中舊法律取調委員長山田顯義外取調委員及報告委員三十八名ヨリ法典實施ニ關スル建議書ヲ松方内閣總理大臣ヘ呈出セリ。

二十五年五月二十一日大審院長外同院判事二十九名ハ、法典實施ノ儀ニ付建議書ヲ呈出シ、其他大阪控訴院ヲ始メ各地ノ裁判所ノ判事檢事ヨリ實施意見書ヲ呈出スルモノ枚擧スルニ遑アラズ。又大阪商業會議所會頭磯野小右衞門ハ商法實施ニ關スル意見書、法治協會員ハ法典實施ニ關スル建言書、和歌山組合代言人會長森懋ハ法典施行ノ建言書ヲ呈出セリ。大阪市平民法橋善作外九十一名ハ商法實施建議書、京都市朝尾春直ハ法典實施意見書ヲ呈出セリ。其他之ヲ略ス。

二十五年五月二十六日該法律案同院ノ議事ニ上ルニ際シ、不二麻呂竝ニ榎本外務大臣、大木文部大臣ハ各一場ノ演說ヲナシタリ。不二麻呂ノ演說ハ左ノ如シ。

諸君、本案ハ民法商法ハ其條項中穩當ナラザル規定アルヲ以テ、其修正ヲ行フ爲メ明治二十九年十二月三十一日マデ其施行ヲ延期セントスルモノナリ。政府ハ此延期案ニハ斷ジテ同意スルコトヲ得ザルナリ。夫レ人定ノ法律ハ初メヨリ其完全ナルヲ期シ難シ。殊ニ民法商法ノ如ク其規定ノ關係スル所極メテ廣大ナルモノニ至テハ、其瑕瑾ハ常ニ立法者意想ノ及ハザル所ニ潛伏スルモノナルヲ以テ、其瑕瑾ヲ發見スルニ隨ヒ之ヲ改正スベキハ言ヲ俟タザル所ナリ。然レドモ法律ノ當否ハ一ニ實際ノ利害得失ニ因テ決定スベキモノナルヲ以テ、之ヲ施行シタル後ニ至リ始テ其當否ヲ評論スルコトヲ得ベシ。然ルニ民法商法ハ未ダ之ヲ施行セザルニ拘ラズ、此規

定ハ不穩ナリ、彼規定ハ不當ナリトシ、各自ノ見ル所ヲ以テ其當否ヲ評論シ、之ヲ修正センカ甲乙其是非ヲ異ニシ、丙丁亦其取捨ヲ同フセズ、修正又修正空論更ニ空論ヲ加フルハ勢ノ免レザル所ナルヲ以テ、僅々四年間ニ於テ其修正ヲ遂ゲ兩院ノ通過ヲ經ルノ難キハ勿論、七年十年ヲ費スモ尙之ヲ施行スルコトヲ得ザルベシ。故ニ本案ハ其名ハ法律ノ修正ナルモ其實ハ法律ノ廢止トイフモ敢テ過言ニアラザルヲ信ズ。加之法律施行前ノ意見ハ必シモ實際ノ利害得失ト吻合スルモノニ非ズ。施行前ニ於テ可ナリ或ハ不可ナリトシタルモノ、施行後ニ至リ却テ反對ノ結果ヲ見ルコトアルハ既ニ刑法治罪法其他ノ法律ニ於テ往々實驗シタル所ナレバ、民法商法ニ於テモ亦安ンゾ如斯結果ヲ見ザルコトナキヲ保センヤ。

然レバ民法商法ノ規定ハ假令穩當ナラザルノ所アリトナスモ、未ダ之ヲ施行セザル今日ニ於テ其修正ヲ議スルハ決シテ其宜シキヲ得タルモノニアラザルナリ。之ヲ要スルニ政府ハ民法商法ノ改正ヲ以テ不可ナリトスルニアラズ。然レドモ民法商法ヲ修正スル爲メ其施行ヲ延期セントスルニ至テハ斷ジテ同意スルコトヲ得ザルナリ。故ニ本官ハ本案ニ反對スルト同時ニ民法商法ヲ施行シ、實際ノ利害得失ヲ考究シ、必要ナル時期ニ至リ徐ロニ其改正ヲ議スルハ固ヨリ政府ノ反對スル所ニアラザルコトヲ明言スルニ躊躇セザルモノナリ。

諸君ノ民法商法ヲ施行前ニ於テ修正ヲ議スルノ不可ナルコトハ略々之ヲ開陳セリ。茲ニ本案ニ付テ尙ホ同意シ難キ理由ノ存在スルモノアリ。夫レ民法商法ハ既定ノ法律ナルヲ以テ、之ヲ改正セントスルニハ必ズ相當ノ改正案ヲ提出セザルベカラズ。然ルニ本案ハ改正案ヲ具ヘテ其議決ヲ求ムルニアラズ、又單ニ其施行ノミヲ延期セントスルモノナリ。故ニ若シ本案ヲシテ誤テ法律ト爲サシメンカ、民法商法ハ忽チ其性質ヲ變ジテ未定ノ草案ト爲ルベク、他日ノ議會ハ此法律ニ依リ必ズ其修正ヲ四年間ニ議定セザルベカラザルノ議務ヲ負ハシメラレタルモノナリ。

既定ノ法律ヲシテ未定ノ草案タラシメ、今日ノ議會ノ發論ヲ以テ他日ノ議會ノ意思ヲ束縛スルガ如キハ縱令立法ノ最大能力ヲ以テスルモ決シテ爲シ得ベキコトニアラザルナリ。論ジテ此ニ至レバ本案ノ謬妄ナル復タ多辯ヲ要セザルベシ。是レ政府ガ此延期案ニハ斷々乎トシテ不同意ヲ主張スル所以ナリ。

廿五年五月二十八日貴族院ニ於テ民法商法施行延期法律案ヲ修正可決セリ。

廿五年六月一日貴族院議員小畑美稻ヨリ民法商法修正審査委員ヲ設クルノ建議案ヲ提出セリ。

廿五年六月三日衆議院ニ於テハ貴族院ノ提出ニ係ル民法商法施行延期法律案ノ第一讀會ヲ開キ之ヲ特別委員ノ審査ニ付託シタリ。

是ヨリ先キ衆議院ニハ議員鳩山和夫外六名ヨリ民法商法施行條例及法例施行期限延期法律案、議員矢島八郎外二名ヨリ商法審査ニ關スル動議、議員島田三郎外一名ヨリ民法中一部延期ニ關スル法律案ヲ提出セリ。右法律案及動議ハ左ノ如シ。

民法商法施行條例及法例施行期限延期法律案、

明治二十三年三月法律第二十八號民法財産編財産取得編債權擔保編證據編明治廿三年十月法律第九十八號民法財産取得編人事編明治廿三年三月法律第三十二號商法明治廿三年八月法律第五十九號商法施行條例及明治二十三年十月法律第九十七號法例ハ修正ヲ行フタメ明治三十年マデ其施行ヲ延期ス。其修正着手ノ方法手續修正委員ノ組織等ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル。

但シ商法中第一編第六章竝ニ第三編及商法施行條例中商事會社及ビ破産ニ關スル規定ハ明治二十六年四月一日ヨリ施行ス。

商法審査ニ關スル動議。

一　商法ヲ審査スル爲メ審査委員會ヲ設クルノ建議案ヲ可決セリ。

一　審査委員ノ組織權限ヲ規定スル爲メ取調委員九名ヲ選擧スル事。

民法中一部延期ニ關スル法律案。

明治廿三年法律第九十八號民法中人事編竝ニ財産取得編中第十三章及第十四章ノ實施ハ來ル明

治二十七年十二月三十一日マデ之ヲ延期ス。

二十五年六月六日東京商業會議所會頭澁澤榮一ハ商法修正ニ付キ建議ヲ爲シ、卽チ商法及商法施行條例修正案ヲ司法省ヘ呈出セリ。依テ不二麻呂ハ直ニ僚員ニ命ジ該修正案ニ對スル意見書ヲ起草セシメタリ。

二十五年六月八日貴族院ニ於テ民法商法修正審査委員ヲ設クルノ建議案ヲ可決セリ。

二十五年六月十日前記法律案ノ審査ヲ付託セラレタル特別委員ノ報告アリ。委員ノ說ハ二派ニ分レ其多數ハ貴族院ノ法律案ヲ適當ト認メ、少數ノ一派ハ民法ノ一部延期說ヲ主張セリ。不二麻呂ハ卽其議事ノ初メニ於テ左ノ如ク演說セリ。

諸君本案卽チ貴族院ノ提出ニ係ル民法商法施行延期法律案ノ第一讀會ニ際シ此ニ陳述スル所アラントス。

我帝國憲法ハ其第五十七條ニ明書シテ曰ク「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム」ト、然ルニ裁判所構成法ハ旣ニ明治廿三年十一月一日ヨリ施行セラレタリ。而シテ刑事ニ就テハ刑法アリ刑事訴訟法アリ、依テ司法權ヲ行フニ足レリト雖モ、民事ニ就テハ昨廿四年一月一日ヨリ民事訴訟法ヲ施行セラレタルノミニシテ、未ダ判決ノ基礎タル民法商法ノ施行アラザルガ爲メ、司法機關ノ運用完全ナラザルハ目下一般ノ情

況ナリ。然ルヲ今民法商法ハ其修正ヲ行フ爲メ其施行ヲ延期センカ、憲法上ニ所謂法律ニ依リ行フベキ司法權ノ多クノ部分ハ何ヲ準則トシテ之ヲ行ヒ得ベキヤ。從來ノ規定ニ從フトキハ成文アルモノハ成文ニ依ルハ當然ナリト雖モ、實際施行セラルヽ所ノ成文ハ果シテ憲法第五十七條ノ所謂法律ナルモノヲ完全スルニ足ルモノアル乎。又タ成文ナキトキハ慣習ニ依ルベキモノナリト雖モ、實際成立スル所ノ慣習ハ果シテ憲法第五十七條ノ所謂ル法律ナルモノヲ完全スルニ足ルモノアル乎。又成文法モ果シテ不完全ナリ。慣習法モ果シテ不完全ナルトキハ、唯一ノ依ルベキモノハ條理ナリト雖モ、法律不完全ナルトキハ各裁判官ノ認メテ條理トスルモ亦一定ノモノナラズ。然ラバ則チ憲法第五十七條ノ所謂ル法律ナルモノハ頗ル不完全ナルモノニシテ、憲法上ノ司法權ハ今尚ホ圓滿ナラザルモノト謂ハザル可カラズ。

今ヤ帝國憲法有效ノ期ヲ距ル既ニ一年有半、而シテ憲法條章ノ尚ホ未ダ實際完全ニ行ハレザルノ觀アルハ實ニ遺憾トスル所タリ。本官ハ民法商法ノ施行ハ憲法上急須必要ナルコトヲ深ク信ズルモノナリ。故ニ本官ハ飽クマデ此ノ延期案ニ反對シ、又タ政府ノ意見ノ確然動カザル旨ヲ茲ニ斷言ス。

民法商法ハ政府十數年幾多ノ心力ト幾多ノ財力トヲ費シ、嚮ニ立法院ノ議決ヲ經、相當ノ方式ヲ以テ裁可公布セラレタル法律ニシテ、卽チ國家ノ成典ナリ。民法商法ハ未ダ之ヲ施行セザルモ政府ハ既ニ之ヲ執行スルノ責任ヲ負ヒ、人民ハ之ヲ遵守スルノ義務ヲ荷フタルモノニシテ、固ヨリ他ノ法律ト擇ブ所ナシ。

民法商法ハ既定ノ法律ナルヲ以テ、之ヲ變更セント欲セバ必ラズ先ヅ相當ノ改正案ヲ提出シテ其議決ヲ求ムルモノニアラズ、所謂修正ナル條件ルベカラズ。然ルニ本案ハ改正案ヲ提出シテ其議決ヲ求ムルモノニアラズ、所謂修正ナル條件ヲ付シテ其施行ヲ延期セントスルモノナリ。法律ヲ尊重セザル亦甚シト謂フベシ。若シ本案ヲシテ誤テ法律ト爲ラシメバ國家ノ成典ハ忽チ變ジテ未定ノ草案タルノ惡例ヲ生ズルニ至ルベシ。故ニ今政府ハ唯其ノ已ニ命ゼラレタル法律執行ノ責ニ任ジ、民法商法ヲ施行シテ障碍ナカラシムルノ一途アル耳。然ルニ之ニ反シ其施行期限漸ク切迫セル今日ニ方リ、漫ニ修正ヲ行フヲ名トシ此憲法上急須必要ナル民法商法ノ施行ヲ延期セントスルガ如キハ立憲政治ノ進行上ニ一大蹉跌ヲ爲スモノナリ。

終リニ臨ンデ本官ハ更ニ一言ヲ呈シ諸君ノ注意ヲ喚起セントス。

法典ノ事タル、實施上國家重要ノ問題ナレバ、此問題ヲ議決セラルヽノ際ニ當リテハ特ニ公平愼重ナル討論審議ヲ悉シ、本案ハ全會一致ヲ以テ否決セラレンコトヲ國家ノ爲メ滿場諸君ニ希望ス。

同日衆議院ニ於テ民法商法施行延期法律案ヲ可決シ卽日上奏セリ。

二十五年六月十三日衆議院議員鳩山和夫外六名ヨリ臨時法典修正局設置建議案ヲ緊急事件トシテ衆議院ニ提出シ、議事日程ニ上リタルモ議了スルニ了ラザリシ其建議案ハ今之ヲ略ス。

二十五年六月中不二麻呂病痾ニ依リ辭職ヲ奉請スルニ方リ、帝國議會ノ議決ニ係ル民法商法施行延期法律案及ビ貴族院ノ議決ニ係ル民法商法修正審査委員ヲ設クルノ建議ニ對スル意見書ヲ作リ、之ヲ松方内閣總理大臣ニ提出セリ。其意見書ハ左ノ如シ。

民法商法施行延期法律案帝國議會ニ於テ議決上奏相成候ニ付別紙本大臣意見書一通提出候也

明治二十五年六月十八日

司法大臣子爵　田中不二麻呂

内閣總理大臣伯爵　松方正義殿

民法商法施行延期法律案ニ對スル意見

第三期帝國議會ニ於テ民法商法施行延期法律案ヲ議決シ、之ヲ奏上シタルニ因リ、之ニ對スル政府ノ意見ヲ定ムルハ實ニ目下ノ要務トス。謹デ帝國憲法ヲ按ズルニ其第六條ニ曰ク、　天皇ハ法律ヲ裁可シ其公布及執行ヲ命ズト。法律ヲ裁可スル權既ニ　天皇ニ屬スルトキハ之ヲ裁可セザルノ權亦之ニ從フコトハ當然ナリ。故ニ議院法ハ其三十二條ニ於テ兩議院ノ議決ヲ經テ奏上シタル議案ニシテ、裁可セラルヽモノハ次ノ會期マデニ公布セラレザル議案ハ卽チ裁可セラレザルコトヲ示シタリ。憲法ノ規定ニ依リ裁可及不裁可權ノ大權ニ屬スルコト此ノ如ク炳焉タルヲ以テ、其大權ノ施行ヲ翼贊シテ責任ヲ負擔スベキ政府ニ於テハ、宜シク國家全體ノ利害ヲ計リ自己ノ責任ヲ顧ミ、大權ノ施行ヲシテ成ルベク適當ナラシムルコトヲ務ムベキハ勿論ニシテ、一概ニ議會ノ議決ニ從フノミヲ以テ其本分ヲ盡スモノト爲スコトヲ得ザルベシ。

夫レ政府ニ於テ民法商法ノ施行ヲ必要ナリトスルハ固ヨリ一朝一夕ニ非ズ。明治十年民法ノ編纂ニ著手シ、明治二十三年ニ至リ纔ニ民法商法ノ編纂ヲ卒ヘ、其裁可施行ヲ奏請シタルノ結果、卽今日ノ民法商法トナリタルモノニシテ、其裁可施行ヲ奏請シタル政府ハ卽チ今日ノ政府ナルヲ以テ、民法商法ニ付、政府ノ

天皇陛下ニ奉對スル責任ハ且ツ重大ナルモノト云ハザルベカラズ。然ルニ政府ニシテ一タビ議會ノ議決ニ從ハンカ、政府ハ決シテ其責任ヲ完フスルコトヲ得ザルベシ。何トナレバ政府ハ議會ノ議決ニ因リ始メテ民法商法ヲ施行スルノ不適當ナルコトヲ認メタリト云ハンカ、則チ前日ノ措置其當ヲ失シタルモノナリ。若シ又政府ハ民法商法ノ施行ヲ以テ必要ナリトスレドモ議會ニ於テ

其延期ヲ議決シタルニ因リ之レニ從フト云ハンカ、議決ニ從フニ急ナルガ爲メ國家ノ利害ヲ外ニスルハ固ヨリ政府ノ本分ニ非ザレバナリ。況ンヤ民法商法ノ裁可施行ヲ奏請シタル政府ニシテ又其裁可施行ノ命令ヲ無效ナラシメントスルハ啻ニ自家撞着ノ處分ナルノミナラズ、天皇陛下ニ奉對スルノ責任ヲ顧ミザルモノト云ハザルヲ得ザルニ於テヲヤ。

抑國家立憲ノ制ヲ定メラレタル以上ハ、政府ハ成ルベク議會ノ議決ヲ重ンズベキハ當然ノコトナレドモ、其議決ヲ重ンズルノ極、遂ニ之ニ曲從シテ政府ノ本分ヲ誤ルガ如キニ至テハ亦固ヨリ政府ノ爲スベキ所ニ非ザルナリ。故ニ民法商法ニ關スル政府唯一ノ處分ハ、議會ノ議決ニ拘ハラズ政府從來ノ意見ヲ貫キ以テ其責任ヲ明カニスルニ在ルコトヲ信ズルナリ。

貴族院ヨリ民法商法修正審査委員ヲ設ルノ建議提出相成候ニ付別紙本大臣意見書一通提出候也

明治廿五年六月十八日

司法大臣子爵　田中不二麻呂

内閣總理大臣伯爵　松方正義殿

民法商法修正審査委員ヲ設クルノ建議ニ對スル意見

第三期帝國議會ハ民法商法ノ修正ヲ行フ爲メ明治二十九年十二月三十一日マデ其施行ヲ延期スルノ法律案ヲ議決シ、貴族院ハ更ニ民法商法修正審査委員ノ構成ニ關スル建議ヲ爲セリ。貴族院ノ建議ニ依レバ委員ノ組織ハ第一期議會ノ建議ニ從フコトヲ希望スルモノニシテ、第一期議會ノ建議ニハ一、兩院議員中ヨリ一個人ノ資格ヲ以テ勅選スベシ、二、法官、三、帝國大學ノ教員、四、商法會議所ノ會員ヲモ勅選シテ之ヲ加フベシト謂ヘリ。此ノ如キ範圍ヲ以テ委員ヲ選定シ各自ノ所見ニ據リ隨意ニ修正ヲ爲サシムルトキハ、其說ノ一致シ難キハ勿論首尾關聯シタル法典ハ忽チ支離滅裂シテ歸一スル所ヲ失ヒ、之ヲ完整スルハ固ヨリ容易ノ業ニ非ザルヲ以テ、議會ノ議決ノ如ク之ニ假スニ四年餘ヲ以テスルモ尙ホ其必成ヲ期スベキモノニ非ザルベシ。若シ又貴族院ノ建議ニ從ハズ、政府ヨリ少數ノ委員ヲ選定シ、更ニ審査ノ任ニ當ラシメ、特定ノ條項ニ限リ修正ヲ加ヘシムルコトヽ爲サバ、其事業前者ノ如ク困難ナルモノニアラザレドモ、第四期議會ノ開期前僅ニ三四ケ月ニ過ギザル間ニ於テ、兩法典ノ修正ヲ終リ議會ノ議ニ付セントスルハ如何ニ簡便ノ方法ヲ採ルモ決シテ人力ノ爲シ得ベキ所ニ非ザルナリ。加之假リニ第四期議會ノ開期前ニ於テ其修

正ヲ終ルコトヲ得ルモノト爲スモ、第三期議會ニ於テ施行延期ノ議決ヲ爲シタル趣旨ヲ原ヌレバ、法典ノ大體ヲ以テ不可ナリトスルモノナルニ因リ、右ノ如キ方法ヲ以テ編成シタル修正案ニ對シ同意ヲ表スルノ理ナキハ言ヲ俟タザル所ナリ。而シテ政府ヨリ一タビ其修正案ヲ提出スルトキハ其可決ヲ得ルニ至ルマデハ民法商法ヲ實施スルコトヲ得ザルハ當然ナルヲ以テ、啻ニ豫定ノ期限ニ於テ之ヲ實施スルコトヲ得ザルノミナラズ、其結果ハ遂ニ之ヲ實施スルノ期ナキニ至ルベシ。抑々政府ハ客年不二麻呂ノ入閣ニ先チ、豫定ノ期限ヨリ民法商法ヲ實施スルノ議ヲ決セラレタルニ因リ、不二麻呂ハ初メヨリ之ヲ實施スルノ責任ヲ負擔シテ入閣シタルモノナレドモ、第三期議會ニ於テ民法商法施行延期法律案ノ提出アリタルガ爲メ、更ニ閣議ヲ請ヒタルニ其決定亦前議ト異ナルコトナシ。是ヲ以テ不二麻呂ハ政府ヲ代表シテ民法商法ノ延期ニ同意セザル旨ヲ貴族院ニ明言シ、貴族院ニ於テ施行延期法律案ヲ可決シタルニ拘ハラズ、尙ホ之ヲ衆議院ニ明言セリ。夫レ施行延期法律案ノ第三期議會ニ提出セラルルノコトハ第一期議會以來ノ情勢ニ依リ必シモ豫知シ難キコトニアラズ。然ルニ政府ハ之ニ拘ラズ實施ノ議ヲ決シタルナリ。第三期議會ニ於テ施行延期法律案ヲ可決スルコトモ亦其情勢ニ依リ必シモ豫知シ難キコトニアラズ。然ルニ政府ハ尙ホ實施ノ議ヲ變ゼザリシナリ。抑修正ト延期トハ固ヨリ相伴フベキモノニシテ苟モ民法商法ヲ修正セントスレバ必ズ其實施ヲ延期セザル可ラズ。豫定ノ期限ニ於テ之ヲ實施セントスレバ決シテ

修正ニ着手スルコトヲ得ザルナリ。如此修正ト實施トハ到底併行スベキモノニ非ザル以上ハ、今日ニ於テ其修正ニ着手スベカラザルコトハ復タ喋々ヲ要セザル所ナリ。第三期議會ノ開會前民法商法修正委員設置ノ議アルニ際シ、不二麻呂ハ民法商法ノ施行ニ先チ委員ヲ設置スルノ不可ナル所以ヲ陳辯シ、幸ニ閣議ノ容ルヽ所ト爲レリ。今日ニ於テハ施行期限ノ漸ク切迫スルニ隨ヒ之ヲ不可ナリトスルノ念モ亦一層ノ甚シキヲ加ヘタルノミニシテ、議會ノ議決如何ニ因リ前日ノ意見ヲ變更セントスルガ如キハ不二麻呂ノ決シテ爲シ得ル所ニアラザルナリ。

法典問題ニ關スル意見

尾崎三郎

法典問題ニ付テハ朝野共ニ甲乙互ニ論難シテ未ダ其底止スル所ヲ知ラズ。就中一派ノ論者ハ法典其モノヽ得失ヲ言ハズシテ議會兩院ヲ通過セシモノ、何故ニ今日マデ之ヲ發布セザルヤト云フニ至ル。是レ兩院ニ於テ議決シタルモノハ當然法律ト爲ルノ意味ヲ包含シタルモノナリ。吁是レ未ダ我憲法ヲ知ラザルモノヽ言トス。我憲法ニ於テハ

天皇ノ法律ニ對スル裁可權ハ無制限ナリ。議院法ニ其裁可セラレタルモノハ次ノ會期マデニ公布スベシトアルノミナレバ、其裁可セラレザルモノハ公布セザルマデニテ別ニ之ニ對シテ說明スベキノ必要モナシ。或ハ曰ク憲法上ハ其通リナレドモ兩院シカモ大多數ニテ通過シタルモノハ容易ニ　君主ノ否認權（ベート）ヲ行フベキモノニアラズト。思フニ此論ヲ主張スルモノハ英國ノ如キ議院政治ノ慣例ニ心醉シ、直ニ我國ニ適用セントスルノ妄想ニ過ギザルナリ。抑英國ノ如ク議院ノ制ニ慣熟シタル國ニ在テハ、其兩院ノ議ヲ重ンズルハ當然ナルノミナラズ、其議ヲ容レザルトキハ其每年ノ議定ニ係ル豫算案及陸軍刑律ヲ議定セズシテ、行政機關ノ運轉ヲ中止セラルルニ至ルノ恐レアリ。故ニ政府ハ國會ノ議ヲ容ル、カ解散スルカ又ハ總辭職スルカヨリ外ニ道ナキナリ。我憲法ハ大ニ之ニ異リ、我議院ハ甚ダ幼稚ニシテ此ノ如ク重キヲ爲スニ足ラズ、其議決スル所ハ果シテ悉ク我國家人民ノ利益ト爲ルベシト信ズル能ハザルノミナラズ、或ル議案ニ對シテハ其贊同シタル議員各個ニ付聞クトキハ眞ニ國家ノ利益ト信ジテ同意シタルニアラズシテ、一時ノ雷同ニ過ギザルモノ多シ。試ニ第一期第二期第三期議會ニ提出シタル議員發議ノ議案ヲ通讀スレバ思半バニ過ギザルモノアラン。我憲法ハ是等無經驗議院ノ議決スル所ニ依リ、行政ノ方針ヲ動搖セラルルノ不幸ヲ免レシムルガ爲メ、例令ヘ議院ト衝突シテ必要ナル豫算ヲ議決セズト雖、猶前年度ノ豫算ニ依テ行政ノ機關ヲ運轉スルコトヲ得セシムルコトニ定メタリ。故ニ議院ノ通過シタル法律ニシテ果シテ我國家ノ利益ニ於テ必要ナリトスルトキハ之ヲ裁可スルコトハ無論ナレドモ、若シ之ニ反スルトキハ之ヲ裁可セザルマデナリ。語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘバ、議院提案ノ採否ヲ決スルハ提案其モノヽ可否ニ依ルベクシテ、議院ノ勢力ノ多寡ニ依ルベカラザルナリ。

今法典延期案ニ付テ其可否ヲ熟考スルニ、兩院提案ノ如クスルトキハ法典ハ再ビ原ノ草案ト爲リ之ヲ今ノ議院ノ議決ニ依リ修正セントスルハ到底此數年間ノ能ク爲スベキ業ニアラズ。尤法典

中或ル論者ノ說ノ如ク、果シテ憲法ニ反シ我國家人民ノ利益ト著ク相反スルモノアルトキハ是亦已ヲ得ザルコトナリト雖モ、小生ハ未ダ斯ノ如ク背憲反利ノ條項アルヲ見ズ。就中商法ニ於テハ眞ノ實業家ハ却テ速ニ實施セラレンコトヲ望ムモノ多シ。故ニ商法ハ今日直ニ之ヲ行フモ唯利アリテ害アルヲ見ズ。其偶々不便ヲ感ズルモノハ畢竟從來不正ノ所業アリシ之ヲ匡正セラルヽヲ不便トスルニ在リ。是レ偶々以テ商法ノ速ニ行フベキコトヲ證スルニ足ルノミ。其財產編以下證據編ニ至テハ其條項浩繁ニシテ中ニハ隨分必要ナラザル條項ナキニアラズト雖モ、必要ナル條項モ亦多シ。然レドモ之ヲ行フテ我國家民情ニ反シ、又ハ從來ノ慣習ニ著シク悖ル等ノ條項ハ盡ク原案ヨリ削除シ、又ハ修正シテ甚シキ弊害ヲ新タニ釀スニ至ルガ如キコトナキハ萬信スル所ナリ。尤數千百條中瑕疵缺點ナシトハ保シ難シト雖モ、是ヨリ修正委員ヲ設ケテ更ニ修正ヲ加ヘバ果シテ一點ノ非難スベキコトナキニ至ルコトハ到底期スベカラザルコトナリ。況ンヤ一旦　天皇ノ裁可ヲ經テ公布シ、且外國人ニ通知シ將來之ヲ以テ彼我人民ヲ制御セントノ國是ナルニ於テヲヤ。甚シキ瑕疵アルニアラザル以上ハ未ダ實行セザル前ニ於テ再ビ修正委員ニ付スル等ノコトハ斷ジテ爲スベカラザルナリ。故ニ商法及民法中財產編財產取得編擔保編證據編ハ豫定ノ如ク來ル明治二十六年一月ヨリ斷ジテ之ヲ實行シ、果シテ實際不備不便ノ條項アラバ數年ノ後委員ヲ設ケテ徐ロニ修正セシムルモ可ナリ。

其人事編及取得編ノ後編（則相續等ニ關スル分）ハ商法財產編トハ大ニ其趣ヲ異ニスル所アリ。此二編ハ假令ヘ外國人我法權ノ下ニ服從スルモ未ダ以テ悉ク服從セシムルニ及バズ、且人事相續等ノ如キハ最モ我國固有ノ風俗ヲ貴重シテ之ヲ破壞セザル樣注意セザルベカラザルナリ。蓋此二編ハ法律取調委員及元老院等ニ於テ十分修正ヲ加ヘ、殆ド我國ノ特性ニ適合セシメタリト雖モ、猶幾分カ泰西主義ノ殘留スルモノアリ。且議員多數ノ攻擊ハ多ク此人事編及相續法ノ點ニ在リ。現ニ第三議會衆議院ニ於テ一部延期案ヲ提出セシモノ卽是ナリ。

小生等此二編ニ於テハ猶修正ヲ加ヘント欲スルノ條項不少、故ニ今日政府ノ方針ハ商法及民法財產編以下四編ハ豫期ノ如ク之ヲ實施シ、人事編及取得編相續以下ノ分ハ一二年ヲ延期シ、其間ニ委員ヲ設ケ十分ナル修正ヲ爲サシムルコトニ定メラルベシ。政府ノ方針果シテ斯ノ如ク決定セラルヽトキハ議會ノ發議ヲ待タズシテ政府自ラ一部延期ノ案ヲ作リ次ノ議會ニ提出セラルベシ。

カークード氏日本商法第二百十九條ニ關スル問題ニ付テノ意見

拜啓余ハ伊藤伯爵閣下ノ垂問ニ應ジ日本商法第二百十九條ニ關スル問題ニ付キ茲ニ意見書ヲ奉呈セントス

又之レト同時ニ下問ヲ辱フシタル他ノ問題ニ付テハ余ハ數日ヲ期シテ更ニ愚見ヲ陳述スルノ榮ヲ有スルヲ信ズ　敬具

一千八百九十三年四月十三日東京ニ於テ

モンテーグ、カークード

伊東巳代治　貴下

閣下ハ余ニ命ズルニ商法第二百十九條ノ規程ハ果シテ一般ニ是認シタル會社法ニ準據シタルモノナルヤ、且日本ニ於ケル株主ニ不當ノ不便竝ニ困難ヲ與ヘザルヤ否ニ關シ卑見ヲ開陳スルコトヲ以テセラレタリ。

余ハ本條ニ付キ靜思熟慮シタルニ、其ノ規程ハ殆ンド總テノ（全然總テト云フヲ得ザレバ）商業國法律ト符合シタルモノニシテ、商法ニハ必ズ此種ノ規程ヲ載セザルベカラザルモノト思惟ス。而シテ苟モ余ガ未ダ了知セザルノ理由アリテ、日本株主ニ對シテハ外國株主ヨリ更ニ夥多ノ便宜ヲ與ヘザルベカラザル特別ノ事情存スルニ非ズンバ、本條ノ規程ハ決シテ株主ニ不當ノ不便若クハ困難ヲ與フルモノニアラズト斷言スルヲ憚ラザルナリ。

英國ノ法律ニ依レバ配當金ハ獨リ利益ノ中ヨリ支出スベキモノニシテ、若シ理事者ニ於テ株金中ヨリ配當金ヲ支出スルトキハ自ラ之ヲ償還スルノ責任ヲ有セリ。一千八百六十二年制定ノ株式會社法第一篇甲表ニ有限責任會社ニ關スル規則ヲ載セタリ。而シテ其ノ第七十三條ニ規定シテ曰ク、配當ノ金ハ必ズ會社營業ヨリ生ズル利益ノ中ヨリ之ヲ支出スルヲ要スト。

然レドモ該條ノ規程中利益ト云ヘル語ノ意義竝ニ會社貸借對照表編成ノ方法ニ關シテハ左ノ二種ノ異見紛出シタリ。

一、單記法ヲ可トスル說

二、複記法ヲ可トスル說

單記法ハ余ガ信ズル所ニ據レバ株式會社法ニ準據スル有限責任會社ガ殆ンド一般ニ採用スル所ニシテ、著名ナル判事ハ多ク之ヲ是認シタリ（法令全書第四編第四百七十五頁ストリンガー事

件ニ於ケルエル、テー、セルウキン氏法合全書第六編第百〇四頁ランス事件ニ於ケルエル、チー、ゼームス氏法令全書第二卷衡平法ノ部第百七十五頁ウエルビー事件ニ於ケルヴキー、シー、キンデルスン氏法令全書第六卷控訴事件ノ部第三百二十九頁「コルトネス」製鑛會社對ブラツク事件ニ於ケルブラツクボルン卿及ビ數多ノ場合ニ於ケルアイチソテー氏）其他有名ナル代言人及ビクーバー、ワルトン等ノ如キ重要ナル特許主計會社亦之ヲ是認シタリ。

此ノ簿記法ニ據ルトキハ會社財政上ノ實況ヲ明示スル貸借對照表ヲ作リ、之ニ依テ利益ヲ計算スルモノトス。若シ收入ニシテ各般ノ負債（拂込資本金竝ニ準備金ヲモ含有ス）ニ超過スルトキハ其ノ超過額ヲ以テ利益ト視做スベキモノトス。語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘバ財産現在高ニシテ總テノ負債幷ニ拂込資金準備金等ニ充ルニ足ラザルトキハ、利益アリト云フヲ得ズ。故ニ損失ノ爲ニ資本金ヲ減少スル時卽チ財産現在高ガ未ダ負債ヲ充タスニ足ラザルトキハ配當スルヲ得ザルナリ。

又此ノ簿記法ニ於テハ若シ會社ニシテ漸次損耗スル性質ヲ帶ビタル財産ヲ有シ、之ガ爲ニ其ノ資本金ヲ減少スルトキ（例ヘバ資本金ヲ建物若クハ機械ニ使用シタル場合ノ如キヲ云フ）或ハ現ニ資本金ヲ代表スル財産ニ損失ヲ生ズルトキ（例ヘバ汽船ノ沈沒シタル場合ノ如キヲ云フ）直ニ其ノ時々貸借對照表ニ於テ財産ノ金高ヲ減ジテ記入スルカ、若クハ更ニ補助資金ノ一項ヲ設ケテ之ヲ貸借對照表ニ記入スベキナリ。而シテ其ノ何レノ方法ヲ取ルモ結果ニ於テハ同一ナリトス。

之ニ反シテ會社ノ理事者ニ於テ其ノ會社ノ財産ニ恒久ノ增加ヲ生ジタリト確認シタルトキ、其ノ增加シタル總額ヲ以テ財産トシテ記入スベシ。又會社ガ新ニ財産ヲ得タルトキモ（例ヘバ僅少ノ入費ヲ以テ高額ナル特許權ヲ得タルガ如キ場合ヲ云フ）之ト均シク新財産眞價格ヲ財産ト認メテ記入スベキモノトス。

此ノ簿記ハ余ガ既ニ陳述シタル如ク日本商法第二百十九條ニ規定シタル簿記法ト同一ニシテ、之ニ對シテハ素ヨリ二三ノ反對論ナキヲ得ズト雖、此レ等ノ反對論ハ他ノ簿記法ニ對スル反對論ノ如ク重要ナルモノニアラザルナリ。且夫レ此ノ簿記法ハ英國ニ於テハ其商業家法律家及ビ會社ノ多數ノ是認採用スル所ト爲リ、他ノ諸國ニ於テハ日本商法ニ於ケルト同一ナル法律上ノ規程ヲ以テ其ノ採用ヲ强行セリ。此ノ一事以テ日本ニ於テ假ニ商法第二百十九條ノ規程ナシトスルモ猶ホ此ノ簿記法ヲ採用スルノ得策ナルヲ觀ルニ足ラン。

夫レ單記法ニ對スル反對論ノ一ハ、同法ニ依ルトキハ數財産ノ價格ヲ查定セザルヲ得ズ。而シテ此ノ查定ハ甚ダ困難ナリト云フニ在リ。然レドモ此ノ反對論ニ對シテハ恒久財産ノ價格ハ恒久ノ變動ヲ生ジタル場合ヲ除ク外決シテ其ノ價格ノ查定ヲ爲スヲ要セズト云フヲ以テ足レリトス。蓋シ商業家及主計家ハ會社ノ財産ニ就キ每期其ノ減少額トシテ記入スベキモノハ果シテ幾千ナルヤヲ熟知セリ。故ニ若シ普通ノ減少ノ外更ニ恒久ノ減少ヲ生ズルノ原因アルニ非ザレバ決シテ財

産ノ價格ニ付キ査定ヲ爲スノ必要ナキモノトス。

更ニ又反對論者アリテ曰ク、會社ノ財産ニ恒久ノ增加ヲ生ジタリトノ理由ヲ以テ、財産ヲ增加シテ記入スルノ權ヲ理事者ニ與フルハ、之ヲシテ實際營業上利益ナキ場合ニ於テモ猶ホ能ク貸借對照表ノ上ニ利益ヲ表示スルヲ得セシムルノ危險アリト。

斯ノ如キ危險ハ素ヨリ其ノ必無ヲ保スル能ハズト雖ドモ、實際ノ經驗ニ依レバ理事者ハ其ノ會社ノ財産ヲ增加シテ記入スルノ權ヲ有スルニ拘ハラズ、苟モ株主ニ於テ之ヲ勸告シ且增加ノ事實明瞭ニシテ疑點ナキ場合ニアラザレバ其權ヲ使用スルコト殆ンド無シト云フヲ得ベシ。

複記法　此ノ簿記法ニ於テハ二個ノ帳簿ヲ要セリ。一ヲ資本帳ト稱シ他ノ一ヲ收入帳ト稱ス。此ノ簿記法ニ據ルトキハ損耗ハ二樣ニ別ツヲ得ベシ。卽チ一ハ資本帳ニ於ケル損耗ニシテ他ノ一ハ收入帳ニ於ケル損耗ナリトス。

玆ニ普通ノ一例ヲ示サン。一ノ會社ハ一隻十萬圓ノ船舶十隻ヲ所有シ、其ノ內一隻ヲ損失シタリト假定シ、又他ノ會社ハ同一ノ價格ヲ有スル同數ノ船舶ヲ所有シ、一個年ノ營業ニ於テ十萬圓ノ損耗ヲ爲シタリト假定スベシ。

後ノ場合ニ於テハ損耗ハ收入帳ニ屬スルヲ以テ前年度ヨリ操越ノ利益或ハ次年度以下ノ利益ノ內ヨリ之ヲ償却シタル後ニアラザレバ會社ハ配當ヲ爲スヲ得ズ。

前ノ場合ニ於テハ損失ハ資本帳ニ屬スルヲ以テ、之ニ依テ生ジタル資本ノ減少ハ收入簿ト何等ノ關係ヲ有セザルガ故ニ、利益ノ計算上之ヲ參酌スルヲ要セズトノ說ヲ爲スモノアリ。

然レドモ此ノ簿記法ニ於テモ收入帳ニ就テ利益ノ計算ヲ確定スルニ先チ、收入帳ヨリ資本帳ニ向テ夥多ノ仕拂ヲ爲サヾルヲ得ズ。是レ此ノ簿記法ヲ可トスル論者ト雖是認スル所ナリ。例ヘバ借地、鑛山、鐵道等ヲ所有スル會社ニ於テハ年々其ノ財産ニ生ズル消耗若クハ減却ハ元來收入ヲ得ル爲メニ消費シタルモノト視做シ、之ニ對シテ資本帳ニ於テ相當ノ金額ヲ償却セザルベカラズ。然リ而シテ此レ等ノ除外例ノ外ハ資本帳ト收入帳トハ個々別々ニシテ、收入ト相關セザル資本上ノ增減ハ利益ノ計算及ビ配當ノ支拂ヲ爲スニ際シテ之ヲ參酌スベカラズトハ此ノ簿記法ヲ可トスル論者ノ唱道スル所ナリ。

此ノ如キ簿記法及ビ此ノ如キ利益計算法ハ日本商法第二百十九條ニ適合スルモノニアラズ。何トナレバ同條ニ依レバ先ヅ利益金ノ內ヨリ以テ資本ノ減少ヲ補充シタル後ニアラザレバ純益ヲ配當スルヲ得ザルヲ以テ、假令收入帳ト相關セザル資本ノ減却ト雖、配當仕拂ニ際シテ之ヲ看過スルヲ許サヾレバナリ。

此ノ簿記法ニ對スル反對論ハ反駁スルヲ得ザルモノト思惟ス。

抑々何ノ原則ニ基キ收入帳ニ於ケル損耗トノ資本帳ニ於ケル損耗トノ間ニ區別ヲ立ツルヲ得ベキ

ヤ、兩者共ニ會社資本金ノ損耗ニアラズヤ、而シテ收入帳ニ於ケル損耗ハ償却セザルノ理由果シテ安クニ存スル乎。又一個年間漸次會社ノ營業上ニ於テ生ジタル十萬圓ノ損耗ハ之ヲ補充シ、資本金ニ對シテ一時ニ生ジタル同額損耗ハ之ヲ補充セザルノ理由果シテ安クニ存スル乎。共ニ資本金ノ減少ニアラズシテ何ゾヤ。又會社ノ財産ニ恒久ノ增加ヲ生ジタルトキ之ヲ看過スルノ理由果シテ那邊ニ在ル乎。

吾人ハ既ニ日本商法第二百十九條ハ英國株式會社法ニ據リ、同國會社ガ實施スル利益配當方ニ適合スルコトヲ發見シタリ。吾人ハ是ヨリ更ニ進デ他ノ商業國ノ法律ハ此ノ事項ニ關シテ寬嚴ノ度果シテ如何カヲ研究セントス。

獨國商法第二百十七條ニ曰ク、損耗ニ依テ會社ノ資本ニ減少ヲ生ズルトキハ其ノ減少ノ額ヲ補充シタル後ニアラザレバ株主ハ利益ノ配當ヲ受クルヲ得ズト。則チ「準備金ヲ控除シタル」云々ノ一句ヲ除ク外日本商法第二百十九條ト同文ナリト云フヲ得ベシ。

獨國商法第二百三十九條ニ於テ貸借對照表ノ調製法ヲ指示セリ。其ノ調製法ハ英國ニ於テ使用スルモノト同一ノ單記法ニシテ、一方ニ於テハ財産現在高ヲ記入シ、他ノ一方ニ於テハ負債（資本及ビ準備金ヲ包含ス）ヲ記入スルモノトス。會社組織ノ經費（創業費）及管理費（第二編第二百三十九條）ハ素ヨリ財産トシテ記入スベキモノニアラズ、必ズ營業計算ニ記入スベキモノトス。

一千八百六十七年佛國株式會社法第三十四條ニ於テ配當金確定ニ關シテ同一ノ規程ヲ記セリ。又其ノ第三十六條ニ於テ少クトモ純益ノ二十分ノ一卽チ百分ノ五ヲ準備金トシテ先ヅ控除スベキコトヲ規定セリ。是レ日本商法第二百十九條ニ規定スル所ト同一ナリ。

伊國商法第百七十六條ニ於テ貸借對照表ノ調製法ヲ規定セリ。而シテ其ノ第百八十一條ニ於テ規定シテ曰ク、貸借對照表ニ於テ表示シ且既ニ認定ヲ經タル純益ノ外ハ株主ニ向テ配當ヲ分配スルヲ得ズト。又其ノ第百八十二條ニ於テ佛國及ビ日本ニ於ケルト均シク少クトモ純益ノ二十分ノ一ヲ準備金ニ控除スベキヲ規定セリ。

一千八百三十八年蘭國商法第四十九條ニ於テ同一ノ規程アリ。

抑々日本ニ於ケル株式會社ニシテ若シ果シテ正當ノ商業トシテ之ヲ經營シ、斷ジテ博徒ノ遊戲場タラシメザルニ於テハ何ンゾ商法第二百十九條ノ實施ニ依リ不便ヲ感ズルコト、他國ニ於ケル會社ヨリモ更ニ甚シキノ理由アランヤ。

或ハ曰ハン、新ニ會社ヲ組織シテ其ノ營業ヲ開始スルモ、兩三年ノ間ハ利益ヲ見ルコト極メテ難シ。而シテ其ノ間ノ損耗ヲ償却シタル後ニアラザレバ利息若クハ配當金ヲ分配スルヲ得ズト規定スルトキハ、株主ハ大ニ不便ヲ感ジ爲メニ其ノ株式ノ下落ヲ來スベシト。世間此ノ如キ思想ヲ懷クモノアルコトハ夙ニ余ガ聞知スル所ナリ。蓋シ株主ガ報酬ヲ得ンコトヲ欲シ、且其ノ株式ノ

騰貴センコトヲ希望スルハ固ヨリ怪ムニ足ラザルナリ。然レドモ會社資本金ノ內ヨリ利息若クハ配當金ヲ株主ニ分配スルハ德義ニ背キ、且債權者ニ對スル詐欺ノ所爲ナルヲ以テ、法律上嚴重ナル規程ヲ設ケ以テ之ヲ制禁セザル可カラズト思考ス。

夫レ株式會社ノ株式ヲ所持セント欲スル所以ハ、之ニ依テ普通ノ利息ヨリモ更ニ高額ナル利息ヲ得ルノ望アリ。而シテ之ニ對スル危險ハ其所有ノ株式高ニ限ルコトヲ了知スルニ在リ。蓋シ會社ノ債權者ガ擔保ト爲スベキモノハ單ニ會社ノ資本金又ハ其ノ財產ニ止マルモノトス。

要スルニ株主ノ責任ハ有限ナルガ故ニ、自ラ利益ヲ分配スル前ニ先ヅ會社債權者ガ目的トスル唯一ノ擔保タル資本金ヲ其ノ常額ニ維持スルノ義務アルコト明瞭ナリトス。何トナレバ會社ニ於テ利益ヲ得ザルニ當テ配當金ヲ分配セントスルトキハ資本金ヲ代表スル財產ヲ減少スルカ若クハ負債ヲ增加セザルヲ得ザルヲ以テナリ。

當世紀ノ初ニ於テ公布シタル佛國商法ニ於テハ、配當ニ關シテモ一モ規定スル所ナカリシカバ、一千八百十八年七月十一日ニ至リ、閣令ヲ以テ此ノ缺點ヲ補ヒ、以テ株式會社ニシテ資本金ノ減少ヲ生ジタルトキハ、之ヲ全ク補充シタル後ニアラザレバ配當金ヲ分配スルヲ得ザラシメタリ。然レドモ資本金ノ解散ヲ要スルノ程度ニ達セザル間、一配當金ヲ分配セザルトキハ特ニ確定シタル分割ノ利息（四朱若クハ五朱ヲ普通トス）ヲ株主ニ拂フヲ得ルノ規程

ヲ設ケタリ。蓋シ此ノ規程ノ目的ハ一ハ人ヲシテ株式ヲ所有センコトヲ欲セシメ、又一ハ資本金ノ減少ニ付キ決シテ超ユベカラザル最下額ヲ確定シテ以テ會社ノ債權者ヲ保護セントスルニ在リキ。然レドモ佛國政府ハ幾モナクシテ此ノ規程ガ如何ニ誤謬不德ニシテ且如何ニ有害ナルカヲ認知スルニ至レリ。同國政府ノ實驗スル所ニ依レバ、資本金ノ內ヨリ株主ニ向テ利息ヲ拂フトキハ勢ヒ其ノ會社ノ信用ヲ失墜スルノ傾向アリ。而シテ有限責任會社ノ性質ニ反スルモノトス。何トナレバ有限責任會社ニ在テハ資本金ノ外債權者ニ對シテ擔保ナケレバナリ。且夫レ名ハ利息ト云フト雖實ハ未ダ配當金ヲ分配スルヲ得ベキ利益アラザルニ際シテ最下額ノ配當ヲ爲スモノト云ハザルベカラズ。

佛國政府ハ此ノ過失ヲ匡正センガ爲メ、苟クモ資本金ノ減少スル間ハ何等ノ利息モ之ヲ株主ニ拂フヲ得ズト規定セリ。是レ時ニ利息ト配當トヲ同地位ニ置キタルナリ。（日本商法第二百十九條ノ旨意ニ均シ）是ニ於テ同國政府ハ其ノ後遂ニ負債ニ對シテ財產現在高ノ超過ヲ生ズルニアラザレバ利息及配當金ノ分配ヲ禁止スルヲ得タリ。

佛國政府ガ利息ノ分配ヲ許シタルハ一ハ（已ニ陳述シタル如ク）以テ人ヲシテ株式ヲ所有スルノ希望ヲ生ゼシメ、又一ハ以テ株主ヲシテ不便ヲ感ゼザラシメントスルノ外果シテ何等ノ理由ニ基ケルヤ、吾人ハ實ニ之ヲ了解スルニ苦ムナリ。而シテ今ヤ日本商法第二百十九條ニ對スル反對

論ハ實ニ前ニ記載シタル株主ノ不便ニ歸セリ。要スルニ余ガ見ル所ニ依レバ佛國竝ニ其ノ他ノ諸國ノ法律ハ未ダ嘗テ資本金ノ減少ニ際シテ配當金ノ分配ヲ許スガ如キ愚ノ極ニ達セザルナリ。

是ニ依テ之ヲ觀レバ財產現在高ガ負債（拂込株金ヲ包含ス）ニ超過スルニアラザレバ、利息若クハ配當金ヲ株主ニ拂フコトヲ禁ズル所以ハ、株主ニ向テ資本金中ヨリ分配ヲ爲シ以テ資本金ヲ減少スルハ會社ノ債權者ノ利益ヲ害スルモノナルニ在リ。而シテ之ヲ禁ズルノ制ハ諸外國ニ於テ多ク實行スル所ナリ。例ヘバ蘭國ハ一千八百三十八年ノ法律ヲ以テシ、獨國ハ商法第二百十五條及ビ第二百十六條ヲ以テシ伊國ハ商法第百八十一條ヲ以テシ、英國ハ會社法ヲ以テシ、匈牙利ハ商法第百六十三條及第百六十五條ヲ以テセリ。

此ノ通則ニ關シテ余ガ聞知スル除外例ハ獨リ獨國商法第二百十七條、伊國商法第百八十一條、匈牙利商法第百六十三條及ビ、佛國現行法ニ於テ之ヲ見ルノミ。然レドモ此レ等ノ除外例ハ營ニ英國法律家ガ非難スルノミナラズ、之ヲ實行スル諸國ニ於テモ著名ナル公法家ニシテ之ヲ是認セザル者亦尠シトセズ。

余ガ謂フ所ノ除外例トハ會社ノ事業ニ對シ準備ヲ爲ス間、卽チ株金拂込期日ヨリ營業開始ノ期日マデノ間ハ株金ノ內ヨリ一定ノ利息ヲ株主ニ拂フヲ得ルノ規程是レナリ。

是レ豈ニ單ニ株主ニ向テ其ノ株金ヲ返戻スルト同一ニアラズヤ。又斯ノ如キ配當ヲ爲サント欲スルトキハ當初先ヅ會社ノ要スル金額ヨリモ更ニ多額ノ株金ヲ募集セザルヲ得ザルニ至ルベシ。

今玆ニ十萬圓ノ資本ヲ以テ一會社ヲ起シタリト假定セン。又建築其他必要ノ準備ニ五個年ヲ要スルニ付其ノ間年五朱ノ利息ヲ株金ニ對シテ拂フモノト假定セン。此ノ計算ニ依レバ最初募集ノ十萬圓ノ內二萬五千圓ハ株主ニ利息トシテ拂返スガ故ニ、建築其他ノ必要ニ應ズルノ金額ハ僅ニ七萬五千圓ニ減少スベシ。何ンゾ初メヨリ資本高ヲ七萬五千圓ト確定シ以テ二萬五千圓ハ株主ノ嚢中ニ留置クノ勝レルニ如ンヤ。

余ハ徹頭徹尾事業準備中ニ株主ニ利息ヲ拂フノ制ニ反對セリ。蓋シ資本金ノ內ヨリ株主ニ向テ分配ヲ爲ストキハ勢ヒ會社ノ資本金ヲ多額ニスルノ必要ヲ生ズルノミニシテ一モ得ルトコロ無ルベシ。況ンヤ此ノ如キ分配ヲ爲スノ權ハ極メテ嚴密ニ之ヲ制限スルニアラザレバ、動モスレバ輙チ策者ヲシテ多年ノ間高額ノ利息ヲ拂フノ約束ヲ以テ人ヲ瞞着シテ株金ヲ募集シ、且其ノ株式ノ價格ヲ昂騰スルヲ得セシムルノ危險アルヲヤ。而シテ此ノ如キノ約束ヲ實行スルハ素ヨリ易々タルノミ。何トナレバ單ニ株主ノ拂込ミタル金ヲ拂返スニ止レバナリ。

此ノ弊ヲ防ガン爲メ伊國商法（第百八十一條）ニ於テハ斯ノ如キ利息ヲ拂フベキ最長年限ヲ三年ト定メ、利息ノ割合ハ五朱ヲ超ユベカラズトシ、拂返シタル金ハ會社ノ創業費ノ內ニ算入シテ營業計算ニ記入シ置キ、追テ會社ノ營業ヲ始メタル時ハ利益ノ內ヨリ先ヅ之ヲ補充シテ然シテ後

始メテ配當ヲ爲スベキ旨ヲ規定セリ。

若シ會社營業ノ開始ニ先チテ株主ニ利息ヲ拂ハザル可ラズトセバ、伊國商法ノ規程ヨリ完全ナルモノハ無カルベシ。蓋シ其ノ規程ニ依レバ之ガ爲メニ要シタル金額ハ先ヅ利益ノ內ヨリ之ヲ償却シタル後始メテ配當ヲ爲スモノトス。

余ハ將ニ筆ヲ擱ントスルニ際シ敢テ余ノ希望ヲ述ベント欲ス。則チ此ノ第二百十九條ハ債權者及ビ株主ノ最モ要大ナル權利ニ關スルモノナルヲ以テ、之ヲ變更セラレザランコト是レナリ。且夫レ本條ノ規程タル現ニ英國、佛國、伊國、及ビ匈牙利國等ニ於テ實行スル所ノ規程ニ比シテ決シテ嚴苛ナルヲ見ズ。又以上諸國ノ實驗ニ依レバ此ノ規程ハ商業ヲ利シ信用ヲ鞏固ニシ債權者竝ニ株主ニ便益ヲ與ヘ極メテ必要ニシテ有益ナルコトヲ證明シタルモノナルガ故ニ、之ヲ日本ニ於テ實行セザルノ理由アルコトナシ。

要スルニ法律ノ明文ヲ以テ虛僞ノ配當ヲ拂フコトヲ保助シ、若ハ認許スルハ極メテ危險ノ業ニシテ、獨リ之ガ爲メニ債權者ノ利益ヲ害スルノミナラズ、株式ニ虛僞ノ價格ヲ付シ以テ徒ニ放棄者ヲシテ其ノ奸策ヲ逞フセシメ、遂ニ金主ヲシテ其ノ金ヲ注入セシメザルニ至ラン。

一千八百九十三年四月十三日

モンテーグ、カークード 手記

日本法律編成竝英文ニ翻譯スル件ニ付外務大臣宣言案

皇帝陛下ノ外務大臣タル下名ハ　國臣民ニ對シ日本法律ヲ適用シ遂ニ日本ニ於ケル、國領事裁判權ヲ全廢スル件ニ關シ、本日ヲ以テ日本及　國政府ノ間ニ訂結シタル約款ヲ考査シタル上、皇帝陛下ノ政府ハ現時泰西文明ノ精神ニ基キ、目下帝國ノ法律ヲ改正編成中ナルコト、竝來年ヨリ晩カラズシテ右ノ大業ヲ完了スルコトヲ確信スル旨ヲ爰ニ報道ス。

帝國政府ハ裁判權條約ノ實施ニ前チ法律編成ノ業ヲ完結スルヲ必要ナリト認ムルガ故ニ、若シ明治廿三年卽一千八百九十年七月一日ヨリ以前ニ編成ノ法律ヲ施行スルコト能ハザル場合アルニ於テハ、已ムヲ得ズ裁判條約實施ノ日ヲ右法律施行ノ後六ケ月ヲ經ルニ迄延期スルコトヲ　國政府ニ請フベシ。

前揭ノ事由竝新條約ニ從ヒ　國裁判所ハ一定ノ期限間日本ノ法律ヲ取扱フベキコト、且ツ皇帝陛下ノ政府ハ外國法律家ヲ雇テ數年間判事ノ職務ヲ執ラシムル決心ヲ有スル等、彼是ノ理由ニ因リ、帝國政府ハ或ル歐羅巴語ニ帝國ノ法律ヲ反譯スルコトヲ必要ナリト感ジタリ。然ルニ

日本ニ於テ最モ普通ニ行ハル、所ノ歐羅巴語ハ英語ナルヲ以テ、新條約ニ從ヒテ外國人ニ對シ適用セラルベキ總テノ法律ハ之ヲ英文ニ翻譯シ、右法律適用前ニ其翻譯文ヲ發布スベシ。

法律ノ公正翻譯文ヲ發布スルノ制ハ直ニ之ヲ實施シ、少ナクモ外國屬籍ノ判事ヲ任用スル間ハ之ヲ繼續スベシ。

歸化法問答

問

最惠國條款ハ其ノ正文ニ從ヒ或ハ無要件（カラテエイト）タリ、或ハ要件（コンヂシヨネル）アリテ他ノ最惠國ニ與フル所ノ利益ニ均シキ讓與ヲ爲ス者ナリ。

若シ此條款ニシテ或ル要件ヲ附セザルトキハ此ノ條款ハ全ク要件ヲ拒絶スルノ意義ナリトシテ解釋スベキカ。例之ハ甲國ト乙國トノ間ニ要件ヲ附セザル最惠國條款ヲ約束シタランニ、其ノ後兩國ニ向テ報酬アル讓與ヲナシタルトキニ、乙國ハ丙國ノ甲國ニ向テ負フ所ノ報酬ヲ負ハズシテ單ニ其ノ利益ヲノミヲ均同享受スルコトヲ得ベキカ？

又ハ法理上及請誼（イクイラー）上ノ元則ニ依リ（其ノ甲乙兩國ノ間ニ要件ヲ附セザル最惠國條款ノ存スルニ均ラズ）兩國ト均同ノ利益ヲ受クル者ハ又兩國ト均同ノ報酬ヲ負ハザルベカラザルカ。

若又甲乙兩國ノ條款ニシテ消極ノ正文ヲ以テ何等ノ要件ヲモ附セズトノ事ヲ明言シタルトキハ、此ノ正文ハ法理上及請誼ニ拘ラズ甲國ハ兩國ニ報酬アル讓與ヲナシタルモ、乙國ニハ報酬ナク之ヲ讓與スベキノ義務ヲ確定シタルモノナルヤ？

答

國際公法ノ著書ニ於テ最惠國條款ニ論及スルモノ甚ダ僅少ナリ。而シテ其實際上ノ效用亦未ダ確定セズ。

元來法理上ヨリ論ズルトキハ最惠國條款ヨリ生ズル所ノ利益ハ最初之ヲ或ル國ニ與ヘタルト同一ノ方法ニ於テ、均一ニ他ノ諸國ヨリ請取スルヲ得ベシ。蓋甲國ハ之ガ爲メ報酬ヲ出スベキモ、乙國ハ無報酬ニテ之ヲ享クルトセバ、乙國ハ甲國ニ比シテ多クノ利益ヲ享クルコト明カナリ。何トナレバ甲國ハ其享クル所ノ利益ヨリシテ報酬ノ價値ヲ控除スベケレバナリ。然ラバ則外國ニ對シテ均一ノ取扱ヲ爲スニ非ズシテ偏頗ノ取扱ヲ爲スモノナリト謂ハザルヲ得ズ。

各國ノ條款ヲ通觀スルニ、最初或國ニ條件ヲ附セズシテ利益ヲ與ヘタルトキハ、他ノ諸國亦無條件ニテ之ヲ享クルコトヲ得ベク、又最初條件卽報酬ヲ附シタル利益ハ、同一ノ條件卽報酬ヲ以テスルニ非ザレバ之ヲ享クルコトヲ得ズトノ明文ヲ揭グルモノ多シトス。故ニ此ノ如キ意ヲ以テ最惠國條款ノ眞意ト視ルヲ得ベク、假令條約ニ之ガ明文ヲ揭ゲザル場合ニ於テモ亦然リトスルヲ得ベシ。之ヲ要スルニ若反對ノ明文ナキニ於テハ、最惠國條款ハ單ニ請求權ヲ生ズルノミニテ、此權ハ其場合ニ臨ンデ始メテ之ヲ確定スベク、而シテ最初或ル國ニ對シテ設ケタル所ノ條件卽報

酬ニ服從セシムベキナリ。今玆ニ一例ヲ擧ゲンニ、千八百六十九年九月二日ノ墺國ト支那トノ條約第四十三條ニ曰ク「墺國ノ國民ト支那政府ヨリ外國ノ臣民ニ與ヘタル總テノ利益及將來之ニ與フル所ノ總テノ利益ヲ完全均同ニ享受スベシ。海關稅等ノ改正ハ總テ一般ニ採用セラルヽトキハ卽時ニ且別ニ條約ヲ要セズシテ墺國ノ商人及航海者ニモ亦之ヲ適用ス」ト、蓋該條ノ前段ハ全般ノ最惠國條款ニシテ、後段ハ海關稅ノ如キ各種ノ事件ニ之ヲ適用スル場合ヲ定メタリ。而シテ此場合ニ限リ、卽時ニ且別ニ條約ヲ要セズシテ最惠國條款ヲ適用スルモノナルコトヲ明言セリ。之ニ由テ觀ルトキハ各種ノ事件ニ關シ此ノ如キ明文ナキニ於テハ、全般ノ最惠國條款ハ條件ヲ附シ且別段ノ條約ヲ以テスルニ非ザレバ之ヲ適用スルヲ得ズ。卽相當ノ報酬ヲ要スルモノナリト結論スルモ敢テ不可ナカルベシ（同條約第二十條ニ於テ之ト類似ノ規定アリ）

デ、クツシー氏曰ク、甲國乙國ヨリ最惠權ヲ享受シタル場合ニ於テ、其後若シ兩國ニシテ土地ヲ讓與スルカ、又ハ其他ノ利益ヲ與フル如キ特別ノ負擔ニ代ヘ、乙國ヨリ利益ヲ享ケタルモ、甲國ハ未ダ以テ乙國ニ對シ兩國同一ノ利益ヲ請求スルヲ得ズ、蓋此論旨ハ前陳ノ主義ニ異ナル所ナシ（同氏ハール、エ、カウース、チエレープル、ドヨ、ドロワ、マリテーム第一卷第二十四條）

蓋シ最惠國條款ニ對スル此ノ如キ狹義ノ解釋ハ近來普通ノ主義ト視ルヲ得ズ。殊ニ自由通商及完全ナル自由競爭ノ主義一度人心ニ感染シタル今日ニ於テハ、最惠國條款ヲ享受シタル國ハ少ク

モ海關稅、航海手數料等ノ通商事件ニ關シ何等ノ條件ヲ附セズシテ其條款ヲ適用セント欲スルハ實際上誣ユベカラザルコトナリ。亦予ヲ以テ之ヲ見ルモ、各國政府ニ於テ實行シ得ル限リ此方針ヲ取ルモノト、如シ。

固ヨリ條件ヲ附セズシテ最惠權ヲ適用スベキノ明文ヲ約定シタルニ於テハ毫モ玆ニ疑ヲ容ルヽコト能ハズ。蓋シ此ノ如キ條約ハ假令一方ニ對シ不利ナル所アルモ、之ガ爲メ無效トナルベキモノニ非ズ。何トナレバ此ノ如キ條約ヲ締結スルト否トハ其一方ノ任意ニ在レバナリ。又其與ヘタル利益ニ代ヘ、必ズ報酬ヲ求ムベキニ非ラズ。時宜ニ依リテハ之ヲ拋棄スルヲ得レバナリ。然レドモ此常則ニ附帶シテ亦最惠國條款ヲ適用スルコト能ハザル例外ナシトセズ。而シテ兩國間ノ特別ナル關係又ハ條約者間ニ於テ明カニ除外シタル事件ノ如キハ、則之ヲ例外ト視ルベカラザルナリ。今左ニ其實例ヲ示サントス。千七百六十一年八月十五日ノ佛國ト西班牙トノ條約第二十五條ニ規定シテ曰ク、從來與フル所ノ最惠權ハ兩國政府其臣民ニ對シ相互ニ與フル如キ利益ニ之ヲ適用セズト、又デ、クツシー氏（前記ノ著書）ノ論述スル所ハ、凡ソ最惠權ハ外國ノ臣民ヲ自國ノ臣民同一ニ取扱フコトニ其效力ヲ及ボスベカラズト謂フニ在リ。

千八百十八年六月十七日ノ孛國ト丁抹トノ通商條約第二條ニ曰ク、丁抹ニ於ケル孛國臣民及孛國ニ於ケル丁抹臣民ハ必ズ最惠國ニ屬スル臣民ト同一視サレ、且ツ同一ニ取扱ハルベシ。又兩國

國王陛下ハ其相互ノ臣民ニ對シ物權ノ性質上自然ニ生ズル所ノ總テノ免除及利益ヲ與フルノ義務ヲ負擔スト。

其ノ他ノ條約ニ於テモ亦同一ノ例外アリ。千八百六十七年二月廿三日ノ墺國ト白耳義トノ條約第四條ニ於テ、墺國ニ關シテハ獨逸關稅聯合ニ屬スル各國及土耳古ノ臣民ニ與ヘタル利益又白耳義ニ關シテハ佛國ノ海鹽輸入ヲ以テ其例外トセリ。千八百六十五年十二月十六日ノ墺國ト英國トノ條約第二條、千八百六十七年四月廿三日ノ墺國ト伊太利トノ條約第七條ニ之ト類似ノ規定アリ。「ハワイ」政府ハ條約ヲ以テ北米合衆國ニ或ル利益ヲ與ヘタルコトアリ。予ハ砂糖ノ輸入稅及輸出稅ニ關シタル利益ナリト記臆ス。當時英國政府ハ最惠國條款ニ基キテ均シク其利益ヲ請求シタリ。然レドモ米國政府ハ英國ノ請求ヲ拒絕シ、予ノ知ル所ニ依レバ此ノ如キ利益ハ米國ト「ハワイ」國トノ特別ナル關係ニ由來スルモノナルガ故ニ、他國ニ之ヲ適用スルヲ得ズト謂フヲ理由トシ、遂ニ其目的ヲ達セシメザリシ。予ハ此事件ニ關スル材料ヲ有セズ。故ニ詳細ニ之ヲ陳辯スルヲ得ザルハ實ニ遺憾ニ堪ヘザルナリ。

予ノ見ル所ニ依レバ此ノ如キ例外ハ假令條約ニ之ガ明記ナキ場合ニ於テモ、亦之ヲ實行スルヲ得ベシ。何トナレバ事性質中ニ在テ存スルモノナレバナリ。元來最惠權ハ其性質ニ依テ之ヲ一般普通ノモノト爲スヲ得ベク、而シテ專ラ兩國間ニ締結シタル條約ノ一成却ニ非ザル事件ニ關スル

トキニ限リ其效力ヲ及ボスコトヲ得ベキノミ。

今日本國他ノ一國ニ對シ或ル新條件ヲ附シテ一港ヲ開クノ條約ヲ締結シタルトキハ、之レ亦兩國間ノ特別ナル關係ト謂ハザルヲ得ズ。蓋此ノ如キ新制度ニ由來シタル所ノ利益ハ最惠國條款ニ基キテ汎ネク其他ノ各國ヨリ之ヲ請求スルヲ得ズ。何トナレバ現行條約ニ存スル最惠國條款ハ全ク他ノ制ニ卽五箇ノ開港ヲ基トシタルモノナルガ故ニ、之ヲ新制度ニ基ヅク所ノ利益ニ及ボスベカラザレバナリ。若夫レ此利益ヲ請求スルニ至テハ之ニ代フルニ同一ノ條件ヲ以テセザルベカラズ。何トナレバ其條件ハ則チ新制度ノ要部ヲ占メ、而シテ之ヲ分離スルヲ得ザレバナリ。蓋シ開港ハ日本ノ爲メ政事上及國際上一新ノ制度ニシテ、通商又ハ航海ニ關スル各個ノ利益ト同一視スベカラザルヤ敢テ論ヲ俟タザルナリ。

又千八百八十年三月卅一日ノ獨逸ト支那トノ新條約第一條ニ於テハ眞純ノ條件卽報酬ハ各別ノ利益ニ關スル單一ノ施行規定トシテ區別シ、而シテ此施行規定ハ獨逸國ニシテ既ニ無條件ノ最惠權ヲ得ベキ場合ニ於テモ亦之ニ服從セザルベカラザルナリ。蓋此規定ノ意義ハ明瞭ヲ缺ク所アルニ拘ラズ、之ニ依リ支那政府ハ新ニ利益ヲ與フルニ方リ、特ニ其施行規定ヲ約定スルトキハ彼ノ條約ニ依テ獨逸國ハ之ヲ遵行セザルベカラズ。此區別ハ日本ノ條約改正ニ際シ獨逸國ヨリ日本ニ對シテモ之ヲ提出セリ。

千八百七十九年三月廿五日ノ獨逸ト「ハワイ」トノ通商條約第三條第四條ニ於テハ明カニ海關稅ニ限リ無條件ノ最惠權ヲ與フルコトヲ約定シ、其他ノ條件附帶ノ利益ニ關シテハ均同ノ報酬ヲ出サヾルベカラザルナリ。

千八百八十一年五月廿三日ノ獨逸ト墺國トノ通商條約第二條ニ規定シテ曰ク、輸入稅輸出稅及通過權ニ關シテ第三國ニ與ヘタル總テノ利益ハ報酬ヲ要セズシテ同時ニ他ノ一方ニ與ヘザルベカラズ。但國境交通及獨逸關稅聯合ニ關スル利益ハ此限リニ在ラズト。之ニ由テ是ヲ觀レバ一モ條件ヲ附セザル最惠國條款ハ固ヨリ有效ノモノト觀ザルベカラズトノ結論ヲ爲サヾルベカラズ。然レドモ此條款ハ單ニ海關稅、航海手數料ノ如キ或ハ權利ニ對シテ其效力ヲ有スルヲ常例トシ、而シテ兩國間ニ存スル特別ノ關係ニ付テハ之ガ例外ヲ設ケザルベカラザルナリ。

千八百八十九年七月二十九日

問

歸化法問答

リヨースレル再拜

民法上ニ付キ中古ニ行ハレタル外國人抑制法ハ第十八紀ノ末ニ於テ既ニ各國ノ際ニ廢止セラレタルハ近世歷史ニ於テ開化ノ進歩ヲ表示シタリト雖モ、國法上國民政權ノ點ニ係リテハ各國ノ憲法ニ於テ內外人ノ間ニ區別ヲ揭ゲザルハナシ。

其中ニハ(A)外國人ハ既ニ歸化スル者ト雖執政又ハ參事官ニ任ズルコトヲ得ズトスル者アリ(ポルチエガル憲法百六十八條等)(B)法律ニ依ルニ非レバ外國人ノ官ニ就クコト又ハ歸化スルコトヲ許サザル者アリ(荷蘭丁抹等)(C)其本國ノ籍ヲ離ルヽノ後ニ非レバ歸化ヲ許サザル者アリ(瑞西)

獨逸ニテハ外國人ヲ使用スルコトノ本國ニ有益ナルガ爲ニ、國際上ニ向テモ此ノ區別ヲ寬ニシタルハ已ニ貴下ノ教ヲ領シタル所ナリ。今更ニ詳細ノ說ヲ乞フ爲ニ左ノ疑題ヲ呈ス。

第一　獨逸ニ於テハ外國人官吏トナルノ前ニ先ヅ歸化ノ手續ヲ要セザルヤ、其他何等ノ約束（コンチシヨン）モナキヤ。

第二　獨逸國ノ官吏トナルト同時ニ獨逸ノ國民タルノ權利ヲ得ルトナラバ兵役及忠義ノ誓等獨逸國民タルノ義務ヲモ同時ニ負擔スルヤ。

第三　獨逸國ノ官吏タル外國人ハ其本國ノ許可ヲ得タルト否トニ拘ラズ、同時ニ獨逸ノ國民タルガ爲ニ其本國ノ國民籍ヲ脫スル者アリヤ、又ハ本國ト獨逸ト二國ノ國民籍ヲ兼有スルヤ。更ニ詳明ノ教ヲ賜ハバ幸甚ナリ。

答　議

獨逸殊ニ普國ノ法ニ據レバ外國人歸化ヲ許サレタルトキハ獨リ民法上ノ關係ニ於テノミナラズ政法上ノ關係ニ於テモ亦內國人ニ異ナルコトナシ。英國ニ於テハ千八百七十年ノ歸化法律頒布以來、外國人ニ歸化ヲ許可スルニ巴羅門ノ許可ヲ要セズ、此法律ニ據レバ外國人ニシテ大英國ニ五年間寄留シ又ハ五年間勤務スルトキハ內務卿ヨリ歸化ノ許可ヲ受ケ、凡テ英國人ノ有スル權利ヲ得有シ、且ツ忠勤ノ宣誓ヲナサヾルベカラズ。

今三個ノ問題ニ就キ之ヲ論ゼンニ。

(一)獨逸ニ於テハ獨逸ノ官職ニ就クノ前ニ歸化ノ許可ヲ受クル必要ナシ。但外國人ハ內國人ノ盡スベキ條件（コンヂシヨン）ヲ盡サヾルベカラズ。然レドモ外國人ノ爲ニ特別ノ條件ヲ設クルコトナシ。

(二)外國人官職ニ就クトキハ其任官狀ニ於テ明カニ從前ノ國民資格ヲ保ツベキコトヲ記載スルニ非ザル以上ハ、自カラ歸化ノ默許ヲ得ルモノトス。而シテ任官狀ニ此等ノ事ヲ記載スルハ例外ニ屬ス。默許セラレタル歸化ノ效力ハ公許シタル歸化ノ效力ニ同ジキモノトス。歸化者ハ內國人ニ同ジク凡テ權利ヲ得有シ且ツ同時ニ凡テノ義務ヲ負フモノトス。而シテ特ニ兵役義務ニ就テ然リトス。又宣誓ニ就テモ歸化者ト內國人ニ異ナルコトナシ。往古ハ凡テ臣民タルモノハ君

主ノ始メテ政權ヲ握ラルヽノ時ニ當リ、所謂服從ノ宣誓ヲナサヾルベカラズ。又國ニ歸化スル者ハ、其歸化ニ際シ又國中ニ誕生シタル者ハ其丁年トナルトキニ當リ亦服從ノ宣誓ヲナサヾルベカラザリシナリ。然レドモ普國ニ於テハ此宣誓既ニ廢セラレ、今ハ唯官吏ノ宣誓及國會議員ノ宣誓ノミヲ存セリ。獨逸帝國官吏モ亦其委任セラレタル職務ニ屬スル凡テノ義務ヲ盡スベキノ宣誓ヲナサヾルベカラズ（帝國官吏法律第三條）此勤務ニ就テノ宣誓ハ外國人ト雖モ帝國若クハ普國ノ職務ニ奉事スルトキハ之ヲナサヾルベカラズ。

（三）獨逸法ニ據レバ歸化ノ許可ハ必シモ外國々民ノ資格ヲ失ヒシムルノ結果ヲ有セズ、又外國々民ノ資格ヲ失ヒタル後ニ始メテ歸化ヲ與フルモノニ非ズ。故ニ獨逸ノ官職ニ就クガ爲メ生ジタル歸化ニ至リテモ亦然リ。官職ニ就キタルモノハ法律上其固有ノ國民資格ヲ保有ス。故ニ此人ハ獨逸及外國ノ國民資格ヲ併有スルモノトス。例ヘバ露國ノ臣民ニシテ其政府ノ許可ヲ得テ普國ノ官職ニ就クトキハ同時ニ露國及普國ノ臣民タリ。

之ニ反シ佛蘭西法ニ據レバ佛國人外國ニ歸化スルトキハ從前ノ國民資格ヲ失フモノトス。一國民ニシテ二重ノ國民資格ヲ有スルニ因リ生ズル所ノ危險ナル爭議ハ、瑞西千八百七十六年ノ法律ニ依リ除却セラレタリ。此法律ニ依レバ歸化スベキ者其從前ノ國民資格ヲ失ヒタルコトノ證明ヲナサヾルトキハ瑞西ニ歸化スルヲ禁ズルモノナリ。又各國互ニ條約ヲ締結シ、互ニ前述ノ

證明アラザルトキハ歸化ヲ許サヾルノ義務ヲ負擔セリ。例ヘバ普國及墺國間ニ於ケル條約ノ如シ。若シ此種ノ義務ニシテ存セザルトキハ、普國若クハ帝國政府ハ法律上假令外國人固有ノ國民資格ヲ放棄セズ、若クハ失ハザルトキニ於テモ、外國人ヲ任官スルノ義務ハ絕ヘテ存セザルナリ。故ニ外國人ヲ任官スルニ因リ生ズル所ノ危險ナル爭議ハ、瑞西千八百七十六年ノ法律ニ依リ除却セラレタリ。此法律ニ依レバ歸化スベキ者其從前ノ國民資格ヲ失ヒタルコトノ證明ヲナサヾルトキハ瑞西ニ歸化スルヲ禁ズルモノナリ。又各國互ニ條約ヲ締結シ、互ニ前述ノ

又一方ヨリ論ズルトキハ、外國人ヲ任官スルノ義務ハ絕ヘテ存セザルナリ。故ニ外國人ヲ任官スルニ條件ヲ設ケ特ニ固有ノ國民資格ヲ放棄シタル後始メテ官ニ任ズルコトノ條件ヲ設クルヲ得。此條件ヲ設クルハ以テ二重ノ國民資格ヲ有スルガ爲ニ生ズル事件ヲ豫防スルナリ。

外國人獨逸ニ於テ歸化シ、若クハ任官スルガ爲メ其固有ノ國民資格ヲ失フヤ否ヤハ又其鄕國ノ法律ニ依リ定マルモノトス。故ニ其鄕國ノ法律例ヘバ佛蘭西若クハ伊太利法ニ依レバ、外國ニ歸化スル者ハ佛蘭西若クハ伊太利ノ國民資格ヲ失フノ結果ヲ生ズ、此結果ハ佛人若クハ伊太利人ヲ獨逸若クハ普國ノ官職ニ任ジ、別段ノ條件ヲ設ケザルトキニモ亦生ズルモノトス。然カノミナラズ數國ノ法律ニ據レバ內國人其政府ノ許可ヲ受ケズシテ外國ニ奉任スルトキハ、其國民資格ヲ失フコト又ハ少クモ其資格ヲ剝奪シ得ルコトヲ定メタリ。

此ニ由リ之ヲ觀レバ假令獨逸法ニハ原則ニ於テハ其事アルヲ容ルヽモ、官吏ノ二重ノ國民資格ヲ有スル場合ハ甚ダ稀ニ存スルコトナルベシ。

此問題ニ就キ日本ニ於テ如何ナル方向ヲ取ルベキ乎ハ小官口頭ヲ以テ陳述センコトヲ希望ス。
以上回答ニ及ビ候也。

千八百八十六年十一月三十日

東京　モス　セ

問

各國ノ憲法ノ内ニ國民ノ權利ヲ得又ハ失フノ明條ヲ定メタルアリ。又ハ之ヲ別法ニ讓リ憲法ニ於テハ單ニ其立法ノ定ムベキ所ナルコトヲ示シタルアリ。此ノ二ツノ方法ハ何レガ最モ便ナルヤ。

答

本日ノ下問ニ對シ小官ハ國民ノ資格ノ得有及失墜ニ關スル規則ハ、憲法ニ規定セズシテ法律ニ規定スルノ便ナル旨ヲ回答ス。其理由トスル所ノ大要ハ、
此規則タル國際ニ關渉スルモノニシテ、國際條約ヲ以テ制定セラレタリ。又將來益々此方法ヲ

以テ制定スベキトキハ將來此規則ヲ變更スルニ於テ實際上ノ不便少カラザルベシ。
今日ハ其理由ノ大體ヲ陳述セリ。明日ハ此問題ニ付キ貴下ニ面接ノ上尚詳述センコトヲ望ム。

千八百八十六年十二月二日

東京　モス　セ

（十九年十二月三日午前）

問

國民資格ノ得有又ハ脫除ノ條ヲ憲法ニ掲ゲタル國アリ、或ハ掲ゲザル國アリ。何レカ當然トスルヤノ問題ニ付更ニ詳明ノ說ヲ乞フ。

答

予ハ此事ヲ憲法ニ掲ゲザルヲ是トス。何トナレバ此事多クハ國際條約ニ關係スルヲ以テ、憲法

ノ明文ハ往々抵觸ノ不便ト變更ノ煩煩トヲ免レザレバナリ。又孛國ノ如キ第三條此事別法ヲ以テ之ヲ定ムト云フノ旨ヲ揭ゲテ、之ヲ法律ニ讓リタルモ、別法ノ爲ニ目錄（カテゴリー）ヲ記シタルニ似テ、亦憲法ノ體裁ニアラズ。故ニ寧ロ此事ハ憲法ノ明文ニ於テ之ヲ沈默スルヲ可トス。

予ハ歐洲大陸ノ憲法論ニ反對シテ英國ノ不文憲法ヲ是トスル者ナリ。但シ日本ノ現狀ハ既ニ英國ト同日ニ言ヒ難キノ事情アルヲ以テ、憲法制定ノ目的ハナルベキダケ事ノ節目ニ涉ル者ヲ避ケ、專ラ大綱ノ重要ナル條章ヲ揭グルニ止メ、以テ永久ニ動カザル憲法ノ當然ナル性質ヲ保タシムルコトヲ希望ス。

問

外國人歸化又ハ任官ノ事ニ付先日ノ貴簡ニ面話ヲ要スルトノ旨アリ、願クハ其說ヲ聞カン。

答

此事條約ヲ悉スコトヲ望ミシナリ。外國人ヲ法官トシ其外國人タルノ資格ヲ以テ法廷ニ臨マシムルトキハ埃及ノ立合裁判タルコトヲ免レズ。又就任ノ時ニ併セテ歸化ノ性質ヲ與フル者トスル（孛國ノ現行法）トキハ一人兩國ノ國民タルコトヲ免レズ。一人ニシテ二重ノ國民資格ヲ有スルトキハ往々

兩樣ノ義務ノ抵觸ヲ生ジ、紛議ヲ免レザルニ至ル。故ニ予ハ瑞西ノ新法ノ最モ精密ノ用意ヲ致セルニ倣ハンコトヲ望ム。

問

外國人ノ歸化及任官ヲ容易ナラシムルハ國ノ進步ニ於テ利益ナルベシ。但シ歸化ノ外國人ニ向テ自由ニ他ノ公權ヲ與フベキモ、選擧代議ノ權ハ特ニ之ヲ制限スベキニ似タリ如何。

答

同意ナリ。歸化ノ後若干ノ年限ヲ經ルコトヲ要スベシ。

問

國民ノ資格ヲ得ルニ係リ、獨逸ハ血統ヲ主トシ（甲國ニ於テ生ジタル乙國人民ノ子ハ仍ホ乙國ノ國民トス）英ハ土地ヲ主トス（英國ニ於テ生ジタル外國人民ノ子ハ英國ノ國民トス）然ルニ獨逸ニ於テモ、獨逸ニ於テ生ジタル外國人ノ子トシテ、又獨逸ニ生ジタル卽チ二代トモニ獨逸ニ生ジタル者ハ如何、此ノ場合ニ於テハ佛國ニテハ佛國々民ノ資格ヲ有セシムルニ似タリ。

答

獨逸ニテハ一直線ニ血統ヲ主觀トシ、更ニ除外ノ例ナシ。

問

我國ニ於テ若シ獨逸ノ法ニ從ハヾ、兵役ノ義務ヲ帶ビザル外國人、就中支那人ノ多數蕃殖ニ堪ヘザルコトアラン。

答

宜シキヲ酌ミ制防スルハ國權ノ在ル所ナリ。

新商法ニ付キ内閣總理大臣閣下ニ奉呈スル意見書

モンテーグ、カークード

余ハ曩ニ商法中本年七月一日ヨリ實施スベキ部分、卽チ合名會社、合資會社、爲替手形、約束手形、小切手及ビ破產ニ關スル規程、其他第二章商業登記簿幷ニ第四章商業帳簿ニ關スル規程ニ付實際施行上不便ト思惟スル要點ヲ擧示スベシトノ高命ヲ辱クセリ。

此レ等ノ規程ニ就テ精思熟考スルニ、或ハ修正ヲ要スベキ條項ニシテ未ダ修正セラレザルモノアリ、或ハ修正スベカラザルモノニシテ既ニ修正シタル條項アルガ如シ。然レドモ閣下ガ余ニ求メラルヽ所ハ此レ等ノ要點ニ關セザルベキヲ以テ、余ハ專ラ此レ等ノ條項ヲ實施スルニ當リ、實際上困難ヲ生ズル原因ニ就キ略々卑見ヲ開陳セントス。

余ガ見ル所ニ據レバ最モ重要ナル點ハ左ノ如シ。

一　來七月一日ヨリ實施セラルベキ規程ノ內ニ商人竝ニ商取引ナル語ニ付テ定義ヲ載セザルコト。

二　住所、住地、住居、營業所及ビ營業場ナル語辭ノ使用ヨリ生ズル紛雜。

三　事業年度ナル語ノ使用。

四　第七百十二條第二項末文ノ不完全ナルガ爲メ獨リ其ノ適用困難ナルノミナラズ、民法ト相抵觸スルコト。

五　爲替手形（第七百十六條第三項及ビ第四項）ニハ支拂人及ビ受取人ノ氏名ヲ記載スルヲ要シ、約束手形（第八百十一條第三項）及ビ小切手（第八百十六條）ニハ受取人ノ氏名ヲ要スルコトナシ、其ノ氏名若クハ他ノ確定シタル標章ノ記入ヲ爲スノ自由ヲ許サヾルコト。

六　第八百十一條第三項ト第六百九十九條ト相抵觸スルコト。

七　第八百十九條ノ修正ニ依リ一段ニ是認シタル銀行法ニ異例ヲ作リタルコト。

八　第九百八十條第五項ヲ適用スルノ不便ナルコト。

九　破產編ニ於テ優先權幷ニ別除權ナル語辭ノ使用。

十　第千二十九條ニ於テ後ニト記スベキ所ヲ因リテト爲シタルコト。

十一　第千三十一條ト民法債權擔保篇第六十九條トハ原則ニ於テ同一ナラザルベカラザルニ却テ相抵觸スルコト。

右ノ諸點ニ付キ左ニ其ノ理由ヲ論述セントス。

（一）來ル七月一日ヨリ實施セラルベキ規程ノ內、商人幷ニ商取引ナル語ニ付テ定義ヲ載セザルコト。

法律ニ於テ定義ヲ與ヘザル場合ニ於テ、裁判所ハ果シテ何ニ由テ商人幷ニ商取引ノ範圍ヲ確定スルヲ得ベキヤ。是レ商法第一條ヨリ第九條若クハ第十條マデヲ同時ニ實施スルノ必要ナル所以ナリトス。然レドモ實際之ヲ實施セザルニ於テハ裁判所ハ猶此レ等ノ條項ニ準據スルヲ得ベキヤ。又慣例ニ依ルベキヤ、將タ其ノ一個ノ私見ニ從フベキヤ、此ノ場合ニ於テハ意見ノ相違ト判決ノ抵觸ハ勢ヒ免ルヽコトヲ得ズシテ、法律適用ノ根據ヲ失フニ至ラン。蓋シ第四章及ビ破產編ハ首トシテ商人ニ適用スベキモノナルヲ以テナリ。

卑見ニ依レバ此ノ如キ其ノ指導ト爲スベキ明條ナキ場合ニ於テハ、裁判所ハ未ダ實施セラレザル部分ノ規程ニ準據セザルヲ得ズト思惟ス。然レドモ裁判所ヲシテ斯ノ如キ窮屈ナル地位ニ立タシメタルハ遺憾ノ至リト云ハザルヲ得ズ。

（二）住所、住地、住居、營業所及ビ營業場ナル語辭ノ使用ヨリ生ズル紛雜。

第十八條ニ於テ營業所竝ニ住所ナル語ヲ二回使用セリ。抑モ住所ナル語ノ意義果シテ如何ハ商法ニ於テハ此ノ語ニ付キ定義ヲ載セズト雖モ、既ニ發布シテ未ダ實施セザル民法人事編第二百六十二條ニ於テ其意義ヲ解シテ本籍所在地ト爲セリ。蓋シ日本ニ於テハ商人ハ必ズ第一本籍ヲ有シ、

第二其ノ住居ヲ定ムル所ノ住地ヲ有シ、第三營業場ヲ設ケタル營業所ヲ有セザルベカラザルガ如シト雖モ、營業所ト營業場トノ差違ニ至テハ余ハ殆ンド之ガ判別ニ苦メリ（例ヘバ第七百九十一條及第九百八十一條ニ營業場ナル語ヲ用ヰ第十八條第七十條第七十九條第百六十八條第二百二十四條第九百七十九條竝ニ第千五十九條ニ於テ營業所ナル語ヲ用フルノ例ヲ參看スベシ）

住所、住地、住居、營業所竝ニ營業場ハ或ハ同一ナルコトアラン、然レドモ目下交通便利ノ時ニ際シテハ、本籍ヲ有セザル所ニ住居ヲ設クルノ慣習漸ク常觀トナレリ。營業所若クハ營業場ト住居ヲ一ニスル者素ヨリ多カルベシト雖モ、營業所若クハ營業場ト住居トヲ單ニ區別スルノミナラズ、互ニ管轄ヲ異ニスルノ風年ヲ逐フテ徐々盛行セリ。例ヘバ營業所若クハ營業場ハ橫濱ニ設ケ、住居ハ東京ニ置キ、本籍ハ熊本ニ有スルガ如キ即チ是レナリ。此ノ場合ニ於テ登記簿ハ何レノ地ニ之ヲ備置クベキヤ、此ノ問ニ對スル答ハ橫濱ニ之ヲ備フベシト云フニ在ラン。蓋シ前記第十八條ニ於テ營業所若クハ住所ト記シテ二語ヲ併用シタルノ意ハ、營業所ナキ場合ニ於テノミ住所ニ登記簿ヲ備フルヲ許シタルナラン。然レドモ假ニ東京ニ於テ住居ヲ有シ、隨テ東京ヲ以テ住地トシテ何レノ地ニ於テスベキヤ。余ノ見ル所ニ依レバ此ノ場合ニ於テハ登記ハ東京ニ於テスベキモノニシテ、熊本ニ於テスルハ不可ナルガ如シ。而シテ第十八條ニ於テハ住所ナル語ヲ記載スト雖モ、此ノ語ニ付テハ現行ノ法律ニ於テ未ダ其ノ定義ヲ載セザルヲ以テ、裁判所ハ何ニ依テ其ノ解釋ヲ定ムベキヤ。若シ假ニ商人竝ニ商取引ナル二語ニ付キ、裁判所ハ余ガ陳述シタル如ク商法中發布シテ未ダ實施セザル部分ニ就テ其ノ釋義ヲ索ムルモノトスルトキハ、住所ナル文字ニ付テモ之ト均シク民法ニ據テ其ノ意義ヲ釋定スルヲ得ベキガ如シト雖モ、若シ實際此ノ如キ解釋法ヲ本條竝ニ其他ニ適用スルトキハ、甚シキ困難ヲ生ズルノ恐レアリ。若シ又此ノ解釋ヲ採用セザルニ於テハ已ムヲ得ズ住所ヲ以テ住地住居若クハ營業所ト同一ノ意義ヲ有スルモノト假定セザルヲ得ザルニ至ラン。若シ果シテ然ラバ特ニ住所ナル語ヲ使用スルノ必要毫モ之レ有ルヲ觀ザルニアラズヤ。寧ロ其ノ場合ニ應ジテ住地若クハ住居ト記スルカ、或ハ住居又ハ營業所（若シ有ラバ）ト記スルニ如カザルナリ。

故ニ余ハ第十八條ニ於テ住所ナル語ヲ記スルハ誤謬ニシテ、住地若クハ住居トセザルベカラズト思惟セリ。余ガ委任ヲ受ケタル官英譯ニハ余ハ此ノ意義ヲ以テ翻譯セント欲ス。

以上陳述スル所ハ又第九百七十九條及ビ第千五十九條ニモ適用ス。

合名會社及ビ合資會社ニ關スル法規中、第七十九條第四項、第百二十九條、第百五十八條第六項、第百六十八條第六項、第百七十四條第一項、第二百三十四條及第二百五十四條ニ於テモ住所ナル語ヲ記載セリ。

第七十九條第三項ニ於テ會社ノ社名及ビ營業所ノ登記ヲ要スト規定セリ。

第七十九條第四項ニ於テ各社員ノ氏名竝ニ住所ノ登記ヲ要セリ。

右ノ場合ニ於テ登記ハ本籍ニ依ルベキヤ又ハ住居ニ依ルベキヤ、余ノ見ル所ニテハ住居ナルガ如シ。蓋シ其ノ登記ノ目的タル、各社員ノ誰タルヲ知悉シ、且之ト交通ヲ爲スノ便ヲ得ルニアルヲ以テナリ。

第百二十九條及第二百三十四條ニ於テ清算人ノ氏名竝ニ住所ノ登記ヲ要セリ。

此ノ場合ニ於テモ住居ヲ以テスルヲ可トス。蓋シ其ノ登記ノ目的ハ清算人ノ誰タルヲ知悉シ、且之ト通信ヲ爲スノ便宜ヲ得ルニ在レバナリ。又清算人ノ營業所ヲモ併セテ登記スル亦可ナラン。何トナレバ清算人ハ必ズ商人ナルベケレバナリ。然レドモ是レ決シテ必要トスルニアラズ。要スルニ余ハ斷ジテ住所ナル語ヲ使用スルノ不便ヲ痛論スルヲ憚ラザルナリ。

此レ等ノ評論ハ第百五十八條第六項第百六十八條第六項第百七十四條第一項、及第二百五十四條ニ於ケル住所ナル語ニモ適用セリ。

英國合資會社法ニ依レバ之ト同一ノ場合ニ於テハ番地（アッドレス）（卽チ現住居）ト職業（若シ有ラバ）トヲ登記スルヲ要セリ。而シテ最モ必要トスルハ其ノ番地トス。

第七百九條ニ於テモ住所ナル語ヲ使用スト雖モ、其ノ意ハ營業若クハ住居所在地ト云フニアルヤ明瞭ナリ。

第七百二十一條及ビ第八百條ニ於テ住地ナル語ヲ記載セリ。然レドモ此語ハ未ダ充分ナラザルガ如シ、余ハ住地若クハ營業地云々ト記セザルベカラズト思惟セリ。假ニ横濱ニ於テ營業所ヲ有シ、東京ニ住地ヲ有スル某ニ向テ爲替手形ヲ振出シタリトセンニ、此ノ手形ハ本來他所拂爲替手形ト稱スルヲ得ズト雖モ、本條ニ依レバ此ノ名稱ヲ附セザルヲ得ザルベシ。且夫レ商業ヲ營ム法人ノ場合ニ於テハ、營業所ハ有スベキモ住地ヲ有スルノ理ナシ。此レ等ノ評論ハ戻爲替手形ニ關スル規程ニモ適應スルモノトス。蓋シ戻爲替手形ハ義務者營業地ニ向テ振出スヲ得ベキモノニシテ、此ノ場合ニ於テハ義務者ノ住地ニ於ケル相場ニ代フルニ其ノ營業地ノ相場ヲ以テスベキモノトス（第八百條）

第千三條ニ於ケル住地ハ適當ナルガ如シ。

第七百九十一條及第七百九十二條ハ住居ナル語ヲ使用シタル唯一ノ例ナリト愚考セリ。而シテ此ノ二條ニ就テ考フルニ益々余ガ上文ニ陳述シタル修正ノ必要ナルヲ認ムルヲ得ベシ。

抑々爲替手形及ビ一般商法ニ於テ實際考慮ヲ要スル點ハ四個アリ、第一營業場所在ノ市府若クハ地例ヘバ横濱ノ如キ、第二營業場其物ノ位地、第三當事者現住ノ地例ヘバ東京ノ如キ、第四住家其物是レナリ。此等ノ四個ノ目的ノ爲ニ住所ナル語ヲ使用スルハ不可ナルガ如シ。或ル特種ノ

民事上ノ目的若クハ或ル刑事執行ノ目的ニ對シテハ住所卽チ本籍所在地ヲ知悉スルノ必要ナキニアラズト雖モ、余ガ上來列擧シタル商法中ノ規程ニ關シテ、余ハ本籍ヲ探知スルノ必要ヲ發見スルコト能ハザルナリ。唯ダ必要ナキノミナラズ、本籍所在地ノ意ヲ以テ住所ナル語ヲ使用スルハ大ナル不便ヲ生ズベシト思惟セリ。余ハ既ニ破產編中住所ナル語ノ使用ヲ誤リタル條項ヲモ列擧シタリ。其ノ外第千六十條第二項ニ於テモ住所ノ代リニ住居ナル語ヲ使用スルヲ可トス。

(三)事業年度ナル語ノ使用。

營業年度（事業年度ノ謂カ）ト云ヘル日本語ハ英語ニ譯スルトキハ「ビジネス、イヤル」ト云ハザルベカラズ。然レドモ若シ之ニ確乎タル意義ヲ附セント欲スレバ斯ノ如キ譯ヲ用フルヲ容サザル場合尠シトセズ。而シテ此ノ如キ場合ニ於テハ余ハ「年」（イヤー）ノ外ニ「季」（ビリヲツド）ナル語ヲ以テ之ヲ譯セリ。抑々事業年度ナル語ハ單ニ云フ年度ト區別スル爲ニ使用スルモノニシテ、例ヘバ四月一日ヲ以テ其ノ帳簿ヲ完結スルヲ事業年度ト稱ス。

第三十二條ニ於テ每事業年度ノ終ナル一句アリ。是レ敢テ不可ナキガ如シ。何トナレバ其ノ意ハ事業上ノ十二ケ月ノ謂ニシテ、事業季（ビジネスビリヲツド）ノ謂ニアラザレバナリ。其然ル所以ハ次ノ條ニ於テ第三十二條規定ノ年度債務（イヤーリーゲーラー）ハ每半ケ年若クハ事業季一ケ年ヨリ短キ場合ニハ每半ケ年內ニ之ヲ盡スベキコトヲ記載シタルニ依テ明白ナリトス。

第百五十條及第二百條ニ於テハ果シテ事業年度ノ謂ナルカ、將タ事業季ノ意ナルカ判明ナラズ。然レドモ余ノ思惟スル所ヲ以テスレバ、事業季ノ一ケ年ニ滿タザル有限合名會社若クハ合資會社ハ每半ケ年ニ配當ヲ爲サンガ爲ニ總會ヲ開クニ當リ、前事業年度ノ計算書貸借對照表等ヲ提出スルヲ得ザルベク、又之ヲ要求スルハ妥當ナラザルヲ以テ、蓋シ此ノ如キ合名會社若クハ合資會社ニ關シテ斯ク解釋スルノ必要ヲ見レバナリ。

此ノ場合ニ於テハ單ニ前事業季ト云フノ外ナシ、第二百二十二條ニ於ケルモ亦然リトス。故ニ此レ等ノ場合ニ於テ計算書其ノ他ノ書類ノ調成ヲ爲サシメント欲セバ、第百八十三條及ビ第二百二十三條ノ意ハ每事業季ノ謂ニシテ每事業年度ノ謂ニアラザルナリ。

第二百十八條ニ於テ年度ト云フハ十二ケ月ノ意ニシテ適當ナルガ如シト雖モ、第二百七十三條ニ於テハ季ノ謂ニシテ十二ケ月ノ謂ニアラザルガ如シ。

要スルニ年度ナル文字ニ二樣ノ意義ヲ附シ、以テ事業ナル語ト共ニ使用スルハ寧ニ誤謬ノ原因タルノミナラズ、實ニ其ノ本來有スベカラザル意義ヲ附會スルモノト云ハザルベカラズ。

(四)第七百十二條第二項末文ノ不完全ナルガ爲メ獨リ其ノ適用困難ナルノミナラズ民法ト相抵觸スルコト。

本條ニ依ルトキハ時效ノ消滅ヲ得ルノ方法唯ダ二アリ、曰ク裁判所ノ判決、曰ク書面ニ明示シ

テ債務ヲ承認シ新債務ト爲ス、卽チ是レナリ。

余ノ考フル所ニ據レバ仍ホ不足ナルガ如シ。何トナレバ新債務ト爲スト否トニ關セズ、書面ノ承認ヲ以テ時效ヲ消滅セシムルハ最モ必要ニシテ、且最モ普通ノ方法タルニ拘ハラズ、之ニ關シテ一モ規定スル所ナケレバナリ。

獨文ノ原案ニ於テハ、第一裁判所ノ判決、第二書面ヲ以テ債務ヲ承認スルノ二方法ヲ以テ時效ヲ消滅セシムルモノト規定セリ。是レ英獨佛三ケ國法律ノ原則ニ協ヒタル規程ナリトス（佛國民法第百八十九條參看）

且ツ夫レ書面ヲ以テ債務ヲ承認スルハ必ズ之ヲ以テ新債務ヲ爲シタルモノト認定スルヲ得ベキヤ如何。

今民法ニ就テ考フルニ、必シモ新債務ヲ爲シタルモノト見做スヲ得ザルガ如シ。是レ實ニ財產編第四百九十條第二項ニ於テ明記スル所ナリトス。蓋シ同條ノ規定ニ依レバ單ニ書面ニテ承認ヲ爲スハ未ダ以テ債務ノ更改ト見做スヲ得ザルナリ。而カモ書面ニテ爲セル承認ハ假令更改ト認ムルヲ得ザルモ時效ヲ消滅セシムルニハ固ヨリ充分ナリ（證據編第百十八條參看）

是ニ依テ之ヲ觀レバ獨リ債務ノ更改ヲ意味スル所ノ承認ノミヲ記載シテ債務ノ更改ヲ意味セザル承認ヲ除ントスルガ如キ條項ハ、獨リ未ダ以テ完全ナリトスルヲ得ザルガ如シ。加之斯ノ如キ

條項ハ之ヲ實施スルニ當リ必ズ紛綜ヲ生起スルノ恐レアリ。而シテ其ノ紛綜ヲ避ケント欲スレバ則チ民法ノ規程ト抵觸スルヲ如何セン。

（五）爲替手形（第七百十六條第三項及ビ第四項）ニハ支拂人及ビ受取人ノ氏名ノ記載ヲ要シ、約束手形（第八百十一條第三項）及ビ小切手（第八百十六條）ニハ受取人ノ氏名ノ記載ヲ要スルコト、爲シ、其ノ氏名若クハ他ノ確定シタル標章ノ記入ヲ爲スノ自由ヲ許サヾルコト。

爲替手形、約束手形若クハ小切手ニ於テ氏名ノ記載ヲ爲スコトヲ得ズ、或ハ之ヲ不便トスル場合尠ナカラズ、例ヘバ合名會社若クハ合資會社或ハ此ノ種ノ會社ト性質ヲ異ニスル團體、卽チ慈善會、俱樂部等及ビ府縣等官員ニ對シテハ其ノ支配人、會計主任若クハ書記或ハ知事等ノ役名若クハ官名ノミヲ記載スルガ如キ卽チ是レナリ。

此レ等ノ場合ヲ總括シテ其ノ取引ヲ便ニセント欲スレバ「氏名若クハ他ノ確定シタル標章」ト云ヘル一句ヲ加フルヲ必要ナリトス。

（六）第八百十一條第三項ト第六百九十九條ト相抵觸スルコト。

第六百九十九條ニ於テ手形ハ指圖式又ハ無記名式ニテ發行スル信用證券ナリトノ旨ヲ規定セリ。而シテ玆ニ手形ト云フハ約束手形竝ニ爲替手形ヲ包含スルコトハ本章ノ題名竝ニ本總則ノ大旨ニ依テ明瞭ナリトス。

第七百十六條第四項ニ於テ爲替手形ニハ「受取人ノ氏名又ハ其指圖セラレタル人若クハ所持人ニ支拂フベキ旨」記載スベシト規定セリ。

第八百十一條第三項ニ於テ約束手形ニハ「受取人ノ氏名又ハ其ノ指圖セラレタル人ニ支拂フベキ旨」明瞭詳密（此レ等ノ數字ハ第七百十六條第二項ニ於テハ刪除セリ）ニ記載スルコトヲ要スル旨規定セリ。

第八百十五條ニ於テ「本節ノ規程ノ範圍內ニ於テ爲替手形ニ關スル規定ハ性質上抵觸セザルモノニ限リ約束手形ニモ之ヲ適用ス」ト規定セリ（譯者曰本節ノ規程ノ範圍內ニ於テノ一句ハ商法ニハ單ニ右ノ外ト記セリ、故ニ本條ノ英譯ハ稍々穩當ナラザルガ如シ）

第八百十六條ニ於テハ小切手ノ場合ニハ記名セラレタル人又ハ指圖セラレタル人若クハ所持人ニ支拂フベキモノタルコトヲ明示セリ。

試ニ第八百十一條第三項ト第七百十六條及ビ第八百十六條トヲ對照スルトキハ余ハ約束手形ヲ所持人ニ支拂フコトヲ得ルノ意義ヲ毫モ發見スルコト能ハザルナリ。蓋シ一方ヲ記載スルトキハ他方ヲ除クノ意ナリト云ヘルハ解釋法ノ通則ニシテ、前述ノ場合ニ最モ適應スルモノトス。現ニ第七百十二條及ビ第八百十六條ニ於テ爲替手形及ビ小切手ノ所持人ニ仕拂フコトヲ得ベシト規定シ、第八百十一條第三項ニ於テハ約束手形ニハ「受取人ノ氏名又ハ其ノ指圖セラレタル人ニ支拂

フベキ旨明瞭詳密ニ記載スベシトノ規程アリ。且夫レ第八百十五條第二節ノ規程ノ範圍內ニ於テノミ之ヲ適用スルヲ得ベキモノナルヲ以テ、第八百十一條第三項ニ明記シタル規程ト相抵觸スル場合ニ於テ之ヲ適用スルヲ許サルヽハ論ヲ俟タズ。要ルニ法律ノ精神何レニ在ルヤ余ハ之ヲ知ラズト雖モ、法廷所持人ニ支拂フベキコトヲ指定シタル約束手形ハ、第二節ニ依テ之ヲ無效ト判定セザルヲ得ズト思考ス。然ルニ第六百九十九條ニ於テハ約束手形ハ指圖式又ハ無記名式ニテ發行スル信用證券ナリト記載セリ。斯ノ如ク兩々相抵觸スル場合ニ際シテハ、果シテ何レノ個條ヲ適用スベキヤ、獨國爲替手形法（第四條第三項及第九十六條第三項）ニ依レバ爲替手形幷ニ約束手形ハ所持人ニ仕拂フコトヲ得ズト規定セリ。英國一千八百八十二年制定ノ爲替手形法ニ於テハ爲替手形幷ニ約束手形ハ所持人ニ仕拂フコトヲ得ト規定セリ。余ハ此ノ兩種ノ手形ニ就キ一ハ所持人ニ仕拂フヲ得ベキモノトシ、一ハ所持人ニ仕拂フコトヲ得ザルモノト規定セルガ如キ法律ヲ見聞セザルナリ。然リ而シテ余ガ最モ注意ヲ惹起セント欲スル要點ハ第二百九十九條ニ於テハ約束手形ヲ所持人ニ仕拂フヲ得ベキモノト爲シ。第八百十一條ニ於テハ之ヲ所持人ニ仕拂フヲ許サヾル如キ規定ヲ載セ、兩者ノ間相互ニ抵觸スルモノアリト云フニ在リ。

（七）第八百十九條ノ修正ニ依テ一般ニ是認シタル銀行法ニ異例ヲ作リタルコト。

惟フニ本條ノ意ハ小切手ハ其ノ發行地ニ於テ仕拂フベキモノナルトキハ五日內、又ハ他ノ地ニ

於テ支拂フベキモノナルトキハ十日内ニ必ズ其ノ仕拂ヲ請求スベシト云フニ在ルガ如シ。若シ果シテ然ラバ銀行家ハ右ノ期限經過後ニ於テハ假令振出人ガ信用ヲ有スル場合ト雖モ嘗ニ之ヲ仕拂フヲ要セザルノミナラズ、却テ之ヲ仕拂フトキハ其ノ責任ヲ免レザルノ結果ヲ生ズベシ。

英國銀行法ニ依ルニ小切手ハ適當ナル期限内ニ其仕拂ヲ請求セザルヲ得ズト雖、其ノ仕拂ノ請求ヲ爲サヾルガ爲ニ無效トナルコトナシ。仕拂請求ヲ爲サヾル結果ハ（時效ノ適用ヲ除キ）唯ダ振出人ガ仕拂請求ノ遲延ニ依テ受ケタル損害高ニ限リ、小切手所持人ニ對シテ其ノ責任ヲ免ルヽノミ。例ヘバ茲ニ甲ナル者アリ、乙ノ爲ニ丙ナル銀行家ニ向テ小切手ヲ振出シタリト假定センニ、乙ハ適當ナル期限内ニ其ノ仕拂ノ請求ヲ爲サヾル内ニ、丙ナル銀行家倒產シタルガ爲メ、乙ハ遂ニ之ヲ受取ルコト能ハザルニ至レリ。此ノ場合ニ於テ甲ハ乙ニ對シテ其ノ責任ヲ免レタルモノニシテ、乙ハ唯ダ甲ノ代リニ丙ニ對シテ小切手仕拂ノ請求ヲ爲スヲ得ルノミ。

夫レ小切手仕拂請求權ハ時效（第八百十九條ニ依リ三ケ年）ノ爲ニ妨ゲラレザル限リハ振出人ニ對シテ有效ナラザルベカラズ。隨テ銀行家ニ於テモ振出人ヨリ之ヲ仕拂フニ足ルノ金額ヲ預リ居ル間ハ、適法ノ所持人ニ向テ仕拂ヲ爲サヾルベカラズ。一般商人ノ間ニ行ハル、慣習ニ依レバ信用アル銀行ニシテ信用アル商人ノ振出シタル小切手ハ其ノ金額多カラザルニ於テハ暫時之ヲ現金ニ引換ヘザルナリ。要スルニ所持人ハ其ノ結果ヲ負擔スル以上ハ斯ノ如キ自由ヲ有スルベキモノニシテ、之ヲ以テ必ズ一定ノ期日内ニ仕拂ノ請求ヲ爲サシムルハ其ノ當ヲ得タルモノニアラズ。且夫レ第八百十九條ニ於テ小切手ハ日附後三ケ年ヲ以テ時效ニ罹ルト規定シタルノミニテ、振出人ハ所持人ガ仕拂ノ請求ヲ遲滯シタルガ爲メニ受ケタル損害高ニ對シテ、其ノ責任ヲ免ル旨ヲ記載セザルニ依テ考フルニ、小切手仕拂ノ請求ヲ遲滯スルノ結果ハ小切手ヲ無效ト爲スニ止リテ、債務者ノ責任ハ依然トシテ存立スルノ意ナルガ如シ。例ヘバ銀行家ガ倒產シ爲ニ甲ハ同銀行家ニ預ケ置キタル金員ヲ失ヒ、乙ハ遂ニ其ノ請求遲滯ノ爲メ同銀行家ヨリ仕拂ヲ受クル能ハザル場合ノ如キ卽チ是レナリ。

貴國ニ於テ最近數年間ニ小切手ヲ使用スルノ慣習大ニ行ハル、ニ至リタレバ、之ニ關スル規程ヲシテ成ルベク完全ナラシムルハ最モ緊要ナルガ如シ。金本位制ノ英國ノ如キニ於テモ經濟家ハ最近十年間ニ於テ小切手使用ノ增加シタルニ喫驚セリ。然ラバ日本ノ如キ銀貨本位制ノ邦國ニ於テハ苟モ信用鞏固ニナリ、法律信用セラレ、小切手ノ便利ナルコト一般ニ知了セラル、ニ至ラバ其ノ使用ノ更ニ增加スルハ期シテ待ツベキナリ。故ニ斯ノ如キ問題ニ關スル法律ヲ制定スルニ當テハ商海ノ第一位ニ居ラザル邦國ニ行ハル、古法ヲ以テ標準トナスハ策ノ得タルモノニアラズト思惟ス。

又最近ノ編成ニ係ル法典（伊國商法第三百四十二條第三百四十三條及ビ西班國商法第五百三十

新商法ニ付キ內閣總理大臣閣下ニ奉呈スル意見書

七條）ニ於テモ英國ノ法律ト其ノ揆ヲ一ニセリ。獨リ其ノ相異ル所ハ此レ等ノ法典ニ於テハ、仕拂請求ニ關スル相當ノ時期ヲ一定シテ數日ト爲シ、英國法ニ於テハ通常同日若クハ翌日ヲ以テ相當ノ期日ト爲スト云フ。要スルニ銀行家ハ振出人ヨリ預リタル金員ノ存スル間ハ小切手ニ對シ請求ニ應ジテ仕拂ヲ爲サヾルベカラズト雖モ、呈示遲延ノ結果ニシテ振出人ニ不利益ナルニ於テハ其ノ責任ハ所持人ニ歸セザルベカラズ。

（八）第九百八十條第五項ヲ適用スルノ不便ナルコト。

（譯者曰本條ニ關シテハカークード氏全然誤解シタルガ如シ）

余ノ聞ク所ニ依レバ原文ノ意ハ請求權屈出ノ期ハ三ケ月後ヨリ早カラズ、六ケ月後ヨリ遲カラザルベシト云フモノニシテ、卽チ未ダ三ケ月ヲ經過若クハ既ニ六ケ月ヲ經過シタル場合ニ於テ屈出ヲ爲スヲ得ズトノ義ナリト云ヘリ。

是レ最モ不當ニシテ最モ迂濶ナル規程ナルガ如シ。

債權ヲシテ三ケ月以內ニ於テ屈出ヲ爲スヲ得ザラシメ、之ヲシテ空シク三ケ月間待タザルヲ得ザラシムルノ理由果シテ如何。

又破產ノ大小若クハ債權者住所ノ遠近ニ關セズ、何等ノ場合ニ於テモ必ズ請求權ノ屈出ニ六ケ月ノ長期間ヲ與フルノ理由果シテ如何。

余ノ思惟スル所ニ依レバ第九百八十條第五項ハ「破產者ノ總債權者ニ對シ、其請求權ヲ短クトモ三ケ月長クトモ六ケ月ノ範圍內ニ於テ破產主任官ヲ指定スル期間ニ當該官ニ屈出ヅベキ旨ノ催告」ト改ムルヲ可トス。

此ノ如ク規定スルトキハ請求權屈出ノ期間ハ單ニ其ノ最終ノ日限ヲ指定スルニ止マルモノニシテ、其ノ範圍ハ三ケ月ヨリ短カラズ、六ケ月ヨリ長カラザルモノトス。而シテ此ノ範圍內ニ於テ事情ニ應ジテ請求權屈出ノ期間ヲ指定スルハ裁判所ノ權內ニ屬スルモノトス。

英法ニ於テハ該期間ハ裁判所ニ於テ指定スルモノトス。而シテ債權者ハ破產言渡ノ後何時ニテモ其ノ請求權ノ屈出ヲ爲スヲ得ルガ故ニ、一ケ月二ケ月若クハ三ケ月間空シク待ツノ不便ヲ生ゼズ。

佛國商法第四百九十一條モ之ト趣意ヲ同フセリ。

伊國商法第九百六十一條第五項ニ曰ク。

破產決定書ニ於テ裁判所ハ債權者ニ對シテ一ケ月ヨリ長カラザル期間ヲ指定シテ其請求權屈出ノ期限ト定ムルコト。

是ニ由テ之ヲ觀レバ第一裁判所ハ請求權屈出ノ期限ヲ指定スベキモノニシテ、唯ダ法律ニ於テ其ノ範圍ヲ規定スルヲ要スルコト、及ビ第二破產ノ言渡ヲ爲シタル後債權者ハ何時ニテモ其ノ請

求權ノ屆出ヲ爲スヲ得ルコト蓋シ明瞭ナリトス。

要スルニ毫モ期日指定ノ自由ヲ裁判所ニ與ヘズ、總テノ債權者ヲ同一ノ地位ニ置キ、請求權屆出ノ爲メ總テ六ケ月ノ期限ヲ與ヘ、且ツ債權者ヲシテ三ケ月後ニアラザレバ屆出ヲ爲スヲ得ザラシムルガ如キ規程ハ其ノ果シテ何ノ理由ニ出ヅルカ余ノ解セザル所ナリ。

(九)破產編ニ於テ優先權竝ニ別除權ナル語辭ノ使用。

破產編第三章ハ題シテ別除權ト云ヒ、而シテ第九百九十七條ニ於テ別除權ノ何タルヲ釋定シタリ。卽チ其定義ニ依レバ別除權トハ債權者ガ擔保物ノ賣拂代金ヨリ費用利息及ビ元金ノ支拂ヲ受クル爲メ別除ノ辨償ヲ請求スルヲ得ルノ權ナリト爲セリ。且又同條ニ此ノ如キ權利ヲ有スベキ債權者ノ種類ヲ規定セリ。卽チ此ノ如キ權利ヲ有スベキ債權者ハ債務者ノ動產又ハ不動產ニ對シテ抵當權質權其他ノ優先權ヲ有スル者タラザルベカラズ。

動產又ハ不動產ニ對シテ果シテ何等ノ優先權アリヤ。夫レ優先權ノ辯明ニ付テハ第九百九十八條ニ於テ之ヲ民法ニ委セリ。試ニ民法ニ據ルニ動產ノ抵當權質權、(擔保篇第二章)及ビ不動產ノ質權(同編第三章)ヲ除ク外ノ優先權ニ就テハ、第四章先取特權ノ部ニ於テ記載セリ。蓋シ獨國法ニ於テハ留置權ヲ以テ優先權ト認ムルト雖モ、日本民法ニ於テハ擔保編第九十四條ヲ以テ留置權ハ債權者ニ先取特權ヲ付與セズト明記セリ(譯者曰擔保編第二章トアルハ第二部第二章ナラン

又次行ノ第三章モ第二部第三章ノ意ナラン)

先取特權ハ第百三十一條ニ於テ優先權ナリト記載セリ。

先取特權ハ左ノ如シ(第百三十四條)

第一　總動產及ビ附隨ニテ其總不動產ニ係ル一般ノ先取得權。

第二　或ル動產ニ係ル特別ノ先取特權。

第三　或ル不動產ニ係ル特別ノ先取特權。

故ニ商法第九百九十七條ニシテ果シテ「動產又ハ不動產ニ對シテ抵當權質權其他ノ優先權ヲ有スル債權者云々ト規定シタリトセバ、他ノ優先權ト云ヘル語ハ先取特權ト云フト其ノ義ヲ同クセルガ如シ。

然ラバ本條ニ據ルトキハ凡ソ抵當權質權又ハ先取得權ヲ有スル債權者ハ皆別除權ヲ有スルモノト推定スルヲ得ベキガ如シ。

余ハ此ノ如キ規程ヲ以テ實行スベカラズト斷定スルモノニアラズ。然リト雖モ此ノ規程ハ英國破產法ト大ニ其趣ヲ異ニセリト言フヲ憚ラザルナリ。抑々英國破產法ニ依ルトキハ現ニ抵當ヲ所持シ又ハ質權若クハ留置權ヲ有スル債權者ニアラザレバ、別除權ヲ有シテ擔保物ノ賣拂代金ノ內ヨリ、先ヅ辨償ヲ受クルコトヲ得ザルモノト規定シ、又ハ該破產法第四十條ニ據リ他ノ負債ニ先

ンジテ辨償ヲ受クルノ權利ヲ有スル債權者ハ、唯ダ管財人ノ手ニ入ルベキ金額ニ對シテ先取權ヲ有スルノミニテ決シテ別除權ヲ有セザル旨記載セリ。

日本商法第九百八十七條ニシテ若シ優先權ノ內ニ先取特權ヲ加ヘザランニハ、英國ノ法律ト異ル所ナシト雖モ、若シ先取特權ヲ以テ優先權ト爲スニ於テハ、該條ノ實施上大ニ困難ヲ感ゼザルヲ得ズ。何トナレバ此ノ場合ニ於テ普通ノ先取特權ヲ有スル債權者ト雖モ猶ホ能ク破產者ノ財產中執レヲモ之ヲ差押フルヲ得ベケレバナリ。

思フニ從テ先取權ヲ有スル債權者ヲシテ破產者ノ財產ヲ自由ニ差押ヘシムルノ制ハ大ナル不便ヲ生ズベシ。余ノ思惟スル所ニテハ、破產ノ當時破產者ノ財產ニシテ此種ノ債權者ノ所持スル分ハ悉ク之ヲ整理人ニ返付セシメ、其ノ內動產ハ第千二條ノ規程ニ依テ之ヲ封鎖シ、以テ先取特權ヲ有スル債權者ヲシテ之ヲ差押フルヲ得ザラシムルヲ可トス。蓋シ先取特權者ノ權利ハ唯ダ財產賣拂代金ノ內ニ就キ先取スルニ在レバナリ。

第九百九十九條ニ付テモ其ノ實施上同一ノ困難ヲ感ズベシ。何トナレバ、同條ニ於テモ優先權ナル語ヲ無期限ニ使用シタレバナリ。蓋シ普通ノ先取特權ヲ有スル債權者ニシテ、賣拂代金ヨリ辨償ヲ完成セザルトキハ、最早辨償ノ途アルベカラズ。然ルニ之ヲシテ他ノ優先權ヲ有スル債權者ト平等ナル割合ヲ以テ財團ニ對シテ其ノ未濟ノ債權ヲ主張スルヲ得セシムルハ實ニ理由ナキコト、云ハザルベカラズ。

(十)第千二十九條ニ於テ「後」ニト記スベキ所ヲ「因リテ」ト爲シタルコト。

余ノ聞知スル所ニ據レバ本條ニハ「以後ノ確定ニ因リテ爲ス可キ財團ノ配當云々」ト記載スルガ如シ。然レドモ以後ノ確定ハ決シテ財團配當ノ原因トナルモノニアラズト思考ス。

財團賣拂ヨリ收入金アルニ從ヒ時ニ管財人ニ於テ之ヲ配當スベキモノニシテ、其ノ配當ハ決シテ以後ノ確定ノ結果トシテ生ズルニアラズ。故ニ配當ヲ爲スハ確定ノ有無ニ關セザルナリ。

此故ニ本條ニ於テハ因リテノ代ニ後ニノ字ヲ用キザルベカラズ。要スルニ旨意ハ時期ニシテ原因ニアラズ。或ル配當ノ後ニ確定シタル債權ハ其ノ確定後（因リテニアラズ）ニ爲シタル配當ニ加ハルヲ得ト云フニ過ギズ。

蓋シ日本文ニ於ケル誤謬ハ獨語ノ原文ヨリ飜譯ノ際ニ生ジタルナラン乎。

(十一)第千三十一條ト民法債權擔保篇第六十九條トハ原則ニ於テ同一ナラザルベカラザルニ却テ相抵觸スルコト。

目下民法ハ未ダ實施セザルヲ以テ此ノ困難ナシト雖モ、余ハ此ノ問題ニ付テ豫テ注意ヲ乞ハザルヲ得ズ。何トナレバ連帶債務トハ各自ノ財團間ニ於ケル償還請求權トノ間ニハ同一ノ原則ヲ應用セザルベカラザルノ理由ナケレバナリ。要スルニ債務者ノ內或ルモノ（商人）ハ破產シ、他ノ

モノ（非商人）無資力トナリタル場合ニ於テハ、原則及ビ慣行ヲ相異ニスルハ極メテ不便ナリトス。

余ハ以上ノ卑見ヲ閣下ニ奉呈スルニ當リ大ニ躊躇スル所アリ、蓋シ余ハ卑見ヲ定ムルニ當リ一モ他人ト商議スルノ機ヲ有セザリシヲ以テ、余ガ以上開陳シタル所見ノ内或ハ全ク余ガ誤解ニ基因スルモノナキヲ保セズ。若シ果シテ此ノ如キ誤解アラバ目下着手中ナル官英譯出版前ニ於テ余ニ教示セラルレバ幸甚シ。

一千八百九十三年四月十八日

モンテーグ、カークード　再拜

命令ニ關スル質問ニ答フ

アルベルト、モスセ

余ハ此質問ニ答フルニ當リ必ズシモ其順序ヲ追フコトヲセザルベシ。何トナレバ余ノ答辯スル所ヲ通觀セバ自ラ全部ヲ釋然タラシムルニ足ルヲ信ズレバナリ。

此問題ハ總テ命令（アンオルドタング）ニ關スルモノナリ。抑々命令ハ國家ノ發スベキモノナリト雖モ、國家自ラ命令ヲ發スルヲ得ザレバ國家ノ官廳之ヲ發スルヲ實際ノ場合ニ就テ規定スルモノトシ、第二ハ一般普通ノ場合ニ就テ規定スルモノトス。

第一ノ場合ハ例ヘバ警察上ノ命令ニシテ、街路ニ云々ノ行爲ヲ命ジ、又ハ不行爲ヲ禁ズルコト、租稅ヲ徵收シ又ハ陸軍ニ於テ兵ヲ募集スルコトノ命令ヲ云フ、之ヲ命令卽チ達（フエルヒユグング）ト稱シ、一人若クハ一個ノ場合ニ發スルモノトス。斯ノ如キ命令ヲ發スルハ廣キ意義ノ行政職務ニ屬ス。卽チ狹キ意義ノ行政事務ト及ビ司法事務トヲ指スナリ。此「フエルヒユーグング」ノ體裁及要件ハ法律ヲ以テ各行政官廳ノ爲ニ定メラレ甚ダ錯雜スルガ故ニ姑ク此ニ陳述セザルベシ。

「フエルヒユーグング」ハ常ニ行爲若クハ不行爲ヲ命ズルコト、卽チ命令（ベフエール）ヲ總稱スルナリ。而シ

テ此命令ハ下等官廳ニ對シテ爲スコトアリ、又ハ一個臣民ニ對シテ爲スコトアリ。臣民ハ唯ダ其命令（ベフエール）ノ法律上ニ基ク時ニ限リ之ニ服從スルヲ要ス。下等官廳ハ之ニ反シテ必ズ上等官廳ノ命令ニ從ハザルベカラズ。蓋シ「フエルヒユーグング」ハ種々ノ名稱ヲ以テ發ス、卽チ決議、裁判、判決命令ト云フ。然レドモ全ク之ヲ細論スルノ必要ナキヲ感ジ此ニ之ヲ略ス。

此問題ニ對シテハ唯此「フエルヒユーグング」ハ立法府ノ認可ヲ經ズシテ行政廳ノ自由ニ之ヲ發スルコトヲ得ルト云フノ意義ヲ明ニセバ足ラント信ズ。然レ共此「フエルヒユーグング」ヲ發スルニ立法府ノ認可ヲ要スルコトアリ、是レ唯ダ第一憲法ニ於テ其認可ヲ要スルコトヲ明記セル場合ニ限ルナリ。而シテ其場合トハ專ラ財政ノ範圍ニ屬スル事項トス。立法府ノ認可ヲ要スル場合ニハ「フエルヒユーグング」モ亦法律ト云フ。是レ凡ソ立法府ノ認可ヲ經タル命令ヲ稱シテ法律ト云フノ原則ニ基カズ、此「フエルヒユーグング」ヲモ立法府ノ認可ニ付シタルヲ以テ斯ク稱スルナリ。然レドモ元來法律ニアラザルモノヲ法律ト稱シタルニ依リ、實際甚ダ錯雜ヲ極メタリ。若シ日本ニ於テ憲法ヲ定メラルヽトキハ、是等ノ「フエルヒユーグング」ニ對シテ法律ノ名ヲ省カレンコトヲ希望ス。

第二立法府ノ認可ヲ要スル場合ハ行政上ノ事務ヲ行フニ當リ現行ノ法律ニ反對スル事項ヲ規定スルトキニ限ルナリ。其一例ヲ擧ゲンニ曾テ「ハンノウブル」土ノ財產ヲ差押ヘタルコトアリ、

此事ハ法律ニ明文ナキヲ以テ故ラニ此場合ノ爲ニ單行法律（インジセジユルダセツ）ヲ設ケテ其處分ヲ爲シタリキ。以上ハ各個ノ場合ニ對シテ規程ヲ定ムルコトヲ述ベタリ、今ヨリ進デ第二一般普通ノ法律ニ就テ述ベントス、卽チ普通ノ命令（アンゲルドヌング）ナリ。此普通ノ命令ニ二種アリ、乃チ或ハ法律ト云ヒ、或ハ命令（オルデナンス）ト云フ。抑モ法律トハ國家ヨリ立法府ノ認可ヲ經テ發布スルモノヲ稱ス。命令ハ之ニ異ナリテ立法府ノ認可ヲ經ズシテ發スルモノヲ云フナリ。今命令ニ就テ釋論センニ、命令ニ亦二種ノ別アリ。學問上ニ於テ第一ヲ權利上（レヒツフエルタルトノング）ノ命令（アンゲルドヌング）ト云ヒ、第二ヲ行政上（フエルヴルトニクス）ノ命令（フエルジーオルトタング）ト云フ。畢竟是レ學問上ノ稱語ニシテ法律ニ定メラレタルニアラズト雖モ、實際ニ於テハ此二種共ニ均シク命令（フエルオルドタング）ノ中ニ網羅ス。此區別ハ最モ緊要ナルモノニシテ、此區別ナキ以前ニ在リテハ甚ダ混雜ヲ來タシテ何レニ歸スルヤ分明ナラザリシモノト雖モ、今日ニ於テハ恰モ公園ヲ逍遙スル如ク、極メテ其路次境界ヲ明カニシタリ。今行政上ノ命令ニ就テ述ベントス。

凡ソ下等官廳ハ高等官廳ニ隷屬シテ其命令ニ從ハザルベカラズ。行政ノ事務ハ命令ヲ與ヘテ執行スルモノナリ。又此命令ニモ二種ノ別アリ、第一各場合ニ對シ官廳ノ行爲ヲ命ズルコトアリ、是レ卽チ前ニ論ジタル「フエルヒユーグング」ナリ。又高等官廳ノ命令ハ一般ニ關スルコトアリ、例ヘバ高等官廳ハ一定ノ場合ニ限ラズ、汎ク下等官廳ニ對シ命令ヲ發スルコトヲ得、是レ下等官廳ニ對スル普通ノ命令ニシテ、卽チ行政上ノ命令ナリ。（高等官廳ヨリ下等官廳ニ對シ一般ニ命令

スルモノヲ云フ、學問上ニ於テハ此命令ヲ行政上ノ命令ト稱ス）實際ニ於テハ此下等官廳ニ對スル命令ヲ通常「インストラクシヨン」若クハ「レーグルマン」ト云フ。然レドモ此二個ノ名稱ニ限ラズ、單ニ之ヲ「フエルオルドノング」ト稱スルコトアリ、唯ダ其名ノミニ依テ實ヲ推知スルコト能ハズ。各場合ニ於テ訓令ガ果シテ如何ナル性質ニ屬スルカヲ判斷セザルベカラズ。何トナレバ學問上一定ノ名ヲ冒シ來ラザレバナリ。此行政上ノ命令ハ各高等官廳法律上ノ委任ナク、其下等官廳ニ對シテ發スルコトヲ得ルナリ。然レドモ唯一ノ反面（ネヂチーフ）上ノ制限アリ、乃チ法律ニ反對スルノ命令ヲ發スルコトヲ得ザル是ナリ。要スルニ此命令ハ官廳內ニ對シテ效力ヲ有スルモノニシテ、臣民ニ對シテハ效力ヲ有セザルナリ。故ニ此命令ハ決シテ臣民ニ對シテ義務ヲ負ハシムルヲ得ズ、此命令ヲ發スルノ權利ハ素ヨリ國君ニ屬ス、如何トナレバ國君ハ行政事務ノ首長ナレバナリ。又各行政部長乃チ大臣ハ其管轄スル事項ニ就キ下等官廳ニ對シ此命令ヲ發スルノ權利アルモノトス。此命令ト總テ其所部ノ官廳ニ對シテ效力ヲ有スルモノアリ。下等官廳ハ又其下ニ在ル官廳ニ對シテ高等官廳ヨリ受ケタル命令ノ範圍內ニ於テ行政上ノ命令ヲ發スルコトヲ得、例ヘバ州長ハ縣知事ニ、縣知事ハ郡長ニ、郡長ハ戶長ニ命令ヲ發スルガ如シ。此ニ立憲政體ニ關スル緊要ナル一問題アリ。卽チ君主幷ニ大臣其ノ他ノ行政官廳ハ法律上ノ委任ナクシテ自由官廳ノ組織ヲ編制シ、乃チ官制ヲ適意ニ定メ之ヲ變更廢止スルノ權アルヤ否ノ一事ナリ。思フニ官廳ノ組織ハ臣民ノ權

利義務ニ關係ヲ生ゼザレバ君主及大臣等ハ其官制ヲ定メ、又ハ之ヲ變更廢止スル權アルモノナリト云フハ當然ナリトス。唯ダ其例外トスベキモノハ裁判所ノ組織是レナリ。蓋シ裁判所ノ組織ハ法律上ヨリ定ムルモノニシテ、行政上ノ命令ヲ以テスルモノニアラズ、若シ法律ニ依テ定メラレタル官制ナルトキハ、君主以下ト雖モ行政上ノ命令ヲ以テ之ヲ變更廢止スルヲ得ザルモノトス。又一ノ新官制ヲ定メ或ハ之ヲ變更スル爲ニ費用ヲ要スルトキハ、亦行政上ノ命令ヲ以テスルヲ得ズ。而シテ行政上命令ノ體裁ヲ論ゼンニ、此命令ト既ニ前ニ叙述スル如ク、臣民ニ對シテ權利義務ノ關係ヲ生ゼズ。唯ダ其下等官廳ニ送達シ、一ハ下等官廳ノ購讀義務アル新聞紙ニ登錄シテ達スルナリ、一ハ書面ヲ下等官廳ニ送達シ、一ハ書面ヲ以テ足レリトス。然レドモ此發布ノ方法モ二種アリ。今ヨリ更ニ權利上ニ關スル命令ニ移ルベシ。蓋シ權利上ノ以上行政ノ命令ニ就キ略論シタリ。

命令トハ臣民ニ對シ權利義務ノ關係ヲ生ズル命令ヲ云フ。凡ソ君主獨裁ノ國ニ在テハ、此命令ニ付更ニ混雜ナル問題ヲ生ズルコトナシ。何トナレバ君主獨裁ノ國ニ於テハ法律ト命令ノ區別存セザレバナリ。然レドモ立憲君主ノ國ニ於テハ爲ニ困難ナル問題ヲ生ズベシ。乃チ行政ハ臣民ニ對シ權利義務ノ關係ヲ生ズル命令ヲ法律ニ依ラズシテ發スルコトヲ得ルヤ否ト云フニ在リ。英國ニ於テハ議院ノ立法權ハ君主ノ命令ト竝ビ行ハレ、君主ハ議院ノ立法權ヲ以テ發令セザル限リハ自己ノ命令ヲ以テ總テノ規程ヲ定ムルコトヲ得ルナリ。更ニ言ヲ換ヘテ之ヲ云ヘバ、法律ノ設アラ

ザル限リハ、君主ハ其命令ヲ以テ臣民ノ權利義務ニ關スル命令ヲ發スルコトヲ得、唯ダ其制限スル點ハ君主ノ命令ト雖モ議會（パアリヤメントアクト）決議乃チ法律ニ背反スルヲ許サヾルナリ。故ニ英國ニ在テハ命令權ト立法權ト相竝行セルナリ。然レドモ別ニ此兩權ノ分界ヲ定メタル法律アルニアラズ。一旦法律ノ範圍内ニ屬セシメタル事柄ハ命令ヲ以テ規程ヲ定メ得ザルノ慣習アルノミ。畢竟英國ニ於テハ漸次立法權ヲ以テ殆ンド全ク規定セラレタルハ假令法律上ヨリスルニアラザルモ實際君主ノ命令權ハ頗ル制限セラレタリ。「グナイスト」及「ローゼンスタイン」ハ最モ英國ノ制度ヲ研究シ說ヲ爲シテ曰ク、英國ニ付テ法律命令施行ノ制ハ歐洲大陸ノ諸國就中普國ニ採リ用フルニ適當ナリト、然レドモ今日此說ハ正當ナリトセズ。試ニ獨國ノ實際ニ徵シ或ハ學問上ヨリ考察スルニ、獨國ノ命令權ハ英國ノ命令權ト同一ナラザルコトヲ發見セリ。故ニ前說ハ近來ノ著述家ノ一致シテ擯斥スル所トナレリ。獨逸ニ於テ一般ニ考フル所ニ據レバ、凡ソ臣民ニ對シ義務ヲ生ゼシムベキ事項ハ唯ダ法律ニ依リ規定セザルベカラズト云フニ在リ。故ニ一般ノ臣民ニ對シテ義務ヲ負ハシムルノ命令ハ必ズ法律上ノ委任ヲ以テ發スベキコトヲ主張セリ。此ノ如キ法律上ノ委任ハ特別ノ法律ヲ以テスルカ、又ハ一般ニ之ヲ與フルモノトス。獨國ニ於テハ特別ノ法律ヲ以テ委任スルコト屢々其例アリ譬ヘバ裁判所構成法ニ於テ命令ヲ發スルノ委任ヲ爲シタルコトアリ。法律上ニ於テ此委任ヲ「デレゲーシヨン」ト云フ、又一般ノ法ヲ以テ行政廳ニ此委任ヲ爲スコトアリ、乃チ一般法律上ノ委任（ゼネラルレクスレシヨン）ト云フ。而テ此一般ノ委任ヲ分テ三種トス。第一緊急命令、第二執行命令、第三警察命令是レナリ。

先ヅ第一緊急命令ヨリ論ズベシ。此緊急命令ハ卽チ緊急ノ事情ヨリ生ジタル場合ニ於テ施スモノニシテ、假令國會ノ開設中ニアラザルモ其焦眉ノ急ヲ救フ爲ニ發スルモノナリ。普國ニ於テハ其憲法第六十四條ニ於テ之ヲ定メタリ。但シ此命令ハ唯ダ一時ノ效力ヲ有スルモノニシテ、必ズ次會ノ國會ニ提出シテ其認可ヲ經ベキモノトス。蓋シ此命令ハ內閣員ノ連署ヲ以テノミ發スルコトヲ得、第二執行命令ハ憲法第四十五條ニ記載ス、此條ニ依レバ命令ヲ發ストアリ。凡ソ普國ノ法律ニ於テ此法律ノ施行ハ君主若クハ其大臣ニ委任スト記載セリ。然リト雖モ此特別ノ委任ハ決シテ必要ナリトセズ。如何トナレバ憲法第四十五條ニ於テ既ニ一般ニ委任セラレタレバナリ。獨國ノ法律ハ專ラ其大體ニ關スル事項ヲ規定スルニ止マリ、其詳細ニ至テハ之ヲ命令ニ委任ス、余ハ今此機會ヲ得テ豫ジメ一言セントスルモノハ將來日本ニ於テ凡ソ法律ヲ制定スルニハ宜シク其大體ノ事項ニ就テノミ法律ヲ以テ規定シ、其詳細ノ事項ハ必ズ命令ヲ以テ規定セラレンコトヲ希望ス。如何トナレバ君主獨裁ノ政體ニ於テハ必要ナラザルモ、一旦立憲君主制トナラバ、法律ノ變更廢止ハ總テ立法府ノ認可ヲ要スレバ、若シ其詳細ニ涉テ之ヲ法律中ニ網羅スル時ハ其都度立法府ノ議ニ附スルノ煩ヲ免レザレバナリ。是等ノ用意ハ目下必要トセズト雖モ、將來大ニ關係スル

モノアラン。前ニ述ブル執行命令ハ命令ヲ以テ發布スルヲ得ト雖モ、如何ナル範圍ガ果シテ執行ノ部分ニ屬スベキヤニ至テハ又往々議論アリ。然レドモ其執行ノ範圍ハ唯ダ左ノ一言ヲ以テ之ヲ定ムルノ外方便アルコトナシ。乃チ執行規則ノ範圍法律ノ範圍ヲ越ユルヲ得ズト云フニ止マルベシ。凡ソ法律ヲ執行スルニ於テ之ガ機關ヲ設置シ、又ハ官廳ヲ設立スルノ必要ヲ生ズベシ。斯ノ如キ場合ニ於テハ爲ニ費用ヲ要スルヲ以テ、其財政ニ關スルガ故ニ立法府ノ認可ヲ得ザルベカラザルナリ。憲法第四十五條ニ依レバ國王ハ執行命令ヲ發スルヲ例トス。然レドモ國王ハ其權利ヲ大臣ニ委任シテ大臣ヨリ發セシムルコトヲ得、加之法律ニ於テ此法律ノ執行ハ其大臣ニ委任スト指定シタル場合尠カラズ、若シ法律ニ於テ此ノ如ク大臣ニ委任セザルトキハ必ズ國王親ラ此命令ヲ發スルモノトス。素ヨリ國王ノ命令乃チ勅令ニハ必ズ大臣ノ副署ヲ要ス。而シテ副署ハ或ル主務大臣之ヲ爲シ、或ハ內閣員連署スルノ例ナリト雖モ之ガ爲ニ一定ノ規則ナシ。獨國ニ於テハ各省ハ皆獨立ノ體制ナルヲ以テ各大臣ハ其主管內ノ事項ニ關シ、自由ノ行爲ヲ有スルヲ立法ノ原則トセリ。然レドモ國家ノ事務ハ之ヲ統一スルヲ要スルヲ以テ、之ヲ統一スルガ爲ニ內閣ヲ設置ス。昔時一千八百十年ノ命令ハ宰相（スタールツカンセル）ノ官ヲ置ケリ。此宰相ニ就テノ規定ハ普國ニ於テハ別ニ廢スルニ及バズシテ實際ニ適用セラレザリキ。何トナレバ宰相「ハーテンベルグ」ノ死後他ニ之ニ代ルベキ人ナキヨリ自ラ實際ノ效用ヲ失ヒタルナリ。

蓋シ宰相ハ大政ノ方向ヲ指示シ、且之ヲ統督スルモノニシテ、各行政部長ハ宰相ニ對シテ其責任ヲ有シ又疑問ニ答辯說明スルノ責アルモノトス。故ニ宰相ハ各行政部長ノ爲シタル事務ヲ中止シ、其必要ナル場合ニ於テハ自ラ命令ヲ發スルノ權アリ。又總テ各部長ヨリ國王ニ上呈スル書類ハ必ズ悉ク宰相ノ經手スルヲ要ス。然ルニ宰相ノ職ハ「ハーテンベルグ」ノ逝去ト共ニ滅シ、今ヤ之ニ代フルニ內閣ヲ以テシ、以テ政務ノ統一ヲ謀ルニ至レリ。蓋シ內閣ノ新制ト宰相ノ舊制トハ實際ニ於テ更ニ異ナル所ナシ。故ニ總テ其大體ニ關スルモノハ內閣ノ討議ニ付シ、例ヘバ各省連涉ノ事務、新法案、各部長ノ間ニ生ジタル爭議、一般ノ利益ニ關スル事項等ニ於ケルガ如シ。是等ノ事項ヲ今論ズル所ノ命令ニ就キ講究スルトキハ左ノ結果ヲ顯スベシ。

各大臣ハ法律若クハ勅令ニ依テ委任セラレタル事項ニ就テハ自由ニ命令ヲ發シテ處分スルコトヲ得、然レドモ法律ニ於テハ其法律ノ執行ヲ唯ダ一人ノ大臣ニ委任セズシテ之ヲ數人ノ大臣ニ委任スルコトアリ、此場合ニ於テハ關係ノ諸大臣ハ互ニ協議ヲ遂ゲテ必要ノ命令ヲ發セザルベカラズ。若シ双方ノ間意見ヲ異ニスルトキハ、內閣ニ提出シテ閣議ヲ請フベシ。故ニ一旦命令ト爲テ發布スルトキハ各省ノ間決シテ矛盾スルノ憂ナシ。今一例ヲ示サンニ、訴訟入費ニ關スル命令ハ司法大藏ノ兩省大臣協議シテ之ヲ發スルナリ。若シ協議ノ整ハザル場合ニ於テハ、卽チ內閣ニ提出シテ其決議ヲ請フヲ以テ各部ノ動作ハ極メテ敏活ニシテ且圓滑ヲ致ス、獨國ニ於テハ日本ノ如

キ其命令ニ某省令何號ト號數ヲ記スルコトナシ。唯ダ某件ニ關スル命令ト題シ其標目トスル所ハ此題號ト發布ノ日附ヲ以テスレバ其省名ヲ以テ省令ニ冠稱セシムルノ要ナシ。

凡ソ勅令ハ通常內閣ニ於テ討議セラルヽモノナリ。其理由タル勅令ハ通常一般ノ利益ニ關スルヲ以テナリ。今勅令ノ由テ生ズル手續ヲ述ベンニ、第一主務省ニ於テ起案シ之ヲ內閣ニ提出シテ閣議ヲ經タル後國王ニ上呈ス。而シテ國王ハ之ヲ裁可シテ發布セシメ、又ハ參議院ヲシテ意見ヲ述ベシメタル後發布ス。素ヨリ此命令ハ公布式ニ係リ發布セラルヽモノナリ。如何トナレバ其發布ニ依リ臣民ニ對シテ義務ヲ負ハシムレバナリ。普國ニ於テハ爲ニ一定ノ名稱アリ、卽チ內閣員悉ク連署シタル勅令（アレハキステ）ヲ命令（フエルデルダング）ト云ヒ、唯ダ主務ノ大臣一名若クハ數名ノ副署シタルヲ高等命令（アレルヘキテエラース）ト云フ。而シテ此公布ハ必ズ法律全書中ニ記載シテ公布セザルベカラズ。若シ之ヲ法律全書ニ載セザルトキハ、遵奉ノ義務ヲ生ズルコトナシ、第三警察命令トハ警察廳ヨリ管下ノ人民ニ對シ一定ノ行爲若クハ不行爲ヲ命ズ。乃チ罰則ヲ付加シテ發布スル命令禁止ヲ云フナリ。蓋シ警察命令モ其實體ヨリ考フルトキハ一ノ法律ト云フベシ。唯ダ其純然タル法律ト異ナル點ハ、警察廳ニ於テハ法律ノ委任ヲ受ケテ之ヲ發スルニ在リ、但シ此委任ハ其法律ヲ明記スルヲ要スルヲ以テ、警察罰則ノ大半ハ既ニ法律ニ依テ規定セラレタルモノナリ。今日本ニ就テ考フレバ、日本ハ佛國ノ例ニ倣ヒ刑法ノ第四編ニ之ヲ編入セリ。獨國ノ如キモ亦之ニ異ナラズト雖モ、其國ニ依テ刑法以外別ニ違警罪法ヲ定メタルモノアリ。然レドモ此一般ノ規定タル各地特別ノ需要ニ應ズルニ足ラズ。故ニ普國ニ於テハ一定ノ官廳ニ法律ヲ以テ警察命令ヲ發スルノ權ヲ與ヘタリ。其法律ノ最近ナルモノハ一千八百八十三年ノ地方行政法トス。此警察命令ハ地方官卽チ州長以下戶長ニ至ルマデ之ヲ發スルコトヲ得、其罰則ハ官廳ノ階級ニ依テ多少ノ差アリ、例ヘバ州長ハ六十「マーク」ヲ限リトシ、其最下限ハ九「マーク」トスルノ類ナリ。然レドモ普國ニ於テハ此命令ヲ發スル種別ヲ全ク一ノ官廳ニ委任シタルニアラズ、必ズ一ノ自治體ノ協議ヲ要セシメタリ。然レドモ日本ニ於テハ或ハ普國法ヲ適用スルノ不可ナルモノアラント雖モ、若シ日本ニ於テモ所謂自治體ヲ設クルトキハ、此點ニ至テモ亦普國ノ如ク協議權ヲ與フルハ必要ナルベシ。總テ高等官廳ハ下等官廳ノ警察命令ヲ廢止スルノ權ヲ有ス、多クノ法律ニ於テハ下等官廳ノ豫メ警察命令ヲ高等官廳ニ提出シテ其許可ヲ得ルニアラザレバ其效力ヲ有セザルコトヲ記載セリ。普國ニ於テハ內務大臣ハ警察命令ヲ廢スルノ權アリト雖モ、一般ニ關スル警察命令ヲ發スルノ權ヲ與ヘラレズ。卽チ警察命令ハ地方官廳以下ノミ之ヲ有スルナリ。其理由ハ他ナシ、若シ全國ニ對シテ一般ノ警察命令ヲ必要トスルトキハ法律ヲ以テ之ヲ規定スルヲ要ス、唯ダ特別ノ法律ヲ以テ大臣ノ警察命令ヲ發スルコトヲ得ルヲ定メタルトキハ、其罰則ノ金額百「マーク」ヲ限リ各大臣ハ之ヲ發スルコトヲ得、例ヘバ工部大臣ハ鐵道規則ヲ制定シテ百「マーク」以下ノ罰金ヲ付加スルコトヲ得ルガ如シ。但シ

別段ノ規定アルトキニ限ルハ勿論ナリトス、又商務大臣ハ近海河灣ノ通船ニシテ數州ニ跨ルトキハ警察命令ヲ發スルコトヲ得、內務大臣ハ毒藥ノ保存方火藥ノ取扱方等ニ付亦警察命令ヲ發スルヲ得、然レドモ各省一般ニ警察命令ヲ發スルノ權アルニアラズ。特別ノ法律ニ於テ委任セラレタルモノニ限ルナリ。此事ハ普國地方行政法第百二十三條ニ載セテ詳ナリ。而シテ警察命令ハ效力ヲ有セシムル爲ニ之ヲ公布スルヲ要ス。其手續ハ各州各縣ニ在ル官報ノ類ニ登載スルナリ。然レドモ郡及町村ノ公布方法ハ縣知事別段ニ之ヲ規定シテ設クルヲ得ルナリ。要スルニ警察命令ヲ發スルノ權ハ既ニ前ニ叙述スル如ク各行政官廳ニ屬スルモ、其罰ヲ科スルノ權ハ素ヨリ行政廳ニ屬セズシテ乃チ裁判所ニ所屬スルモノトス。此點ニ就テハ刑法ニ觸ルヽモノモ違警罪ヲ犯シタルモノト相同ジ。唯ダ脅迫手續ノミ之ニ均シカラズ。其警察命令ハ脅迫手續ノ異ナル一例ヲ擧グレバ警察命令ハ總テ一地方間ノ養狗ニ首環ヲ施スベシト云フガ如シ。而シテ若シ之ニ應ゼザレバ罰金ヲ科スルナリ。脅迫手續ハ之ニ反シテ私ニ其穴藏ニ蓋ヲ蔽フベシト一個人ニ命ズルモ之ニ從ハザルトキハ罰金ヲ科スルノ類トス。

以上大要ニ過ギズト雖モ其質問ノ要領ニ對シテ小補ナシトセザレバ幸甚、尙ホ其所論ニ就テ質疑セラレバ余ハ欣デ之ニ應答スル所アラン。

明治十九年十一月廿六日

國民權內外人差別ニ付ロエスレル氏モスセ氏意見

問題

各國ノ憲法ノ內ニ國民ノ權利ヲ得又ハ失フノ約束ヲ明條ヲ以テ定ムルアリ、又ハ之ヲ別法ニ讓リ憲法ハ單ニ其別法ノ定ムル所ナルコトヲ示スモノアリ。此ノ二ツノ方法ハ何レガ最便ナルヤ。

外國人ノ國民權利ヲ得セシムルニ於テ通常（オルデナルナチユラリザシヨン）歸化ト大歸化トヲ分テル國アリ、又編籍（デニザシヨン）トヲ分テル國アリ、語ヲ易ヘテイヘバ之ヲ嚴ニスルアリ、之ヲ寬ニスルアリ、其得失如何。

乞教。

答議

（第一）國民權ノ得有及脫除就中歸化ニ關スル規定ハ各國多クハ特別ノ法律ヲ以テ之ヲ定メタリ。普國憲法第三條ニ據レバ此ノ規定ハ一ノ法律ヲ以テ定ムベキモノナリ。千八百六十七年制定ノ

墺國建國法第一條ニ據ルモ亦然リ。

バイエルン國ニ於テハ千八百十八年制定ノ憲法第四篇第一條及ビ之ニ屬スル附則第一卽チ憲法ヲ以テ此件ヲ規定シタリト雖モ、現今ニ於テハ該國ニ於テモ亦他ノ獨逸諸國ト均シク千八百七十年六月一日制定ノ國民權得有及失墜ニ關スル帝國法律ニ準フモノトス。故ニ獨逸及墺國ニ於テハ憲法上此件ニ關スル規定アルコトナシ。

佛國ニ於テハ往時ノ憲法卽チ千七百九十九年制定ノ憲法ニ於テハ歸化ニ關スル原則ヲ定メタリト雖モ、其後特別ノ勅令及法律特ニ千八百十四年及千八百四十九年竝ニ其他ノ勅令及法律ヲ頒布セラレタリ。且ツ民法ニ於テモ亦之ヲ規定セリ。

白耳義憲法第四條及第五條ハ歸化ニ關シ一二ノ一般ノ規定ヲ揭ゲタリト雖モ、然レドモ亦之ヲ特別法律及民法ニ讓レリ。此ノ件ニ關シ最近ノ法律ハ千八百八十一年八月六日制定ノ法律是レナリ。

英國ニ於テモ亦千八百七十年制可ノ特別ノ歸化法アリ。

普國民會ハ憲法ヲ議スルニ當リ國民權ノ得有及失墜ニ關スル原則ヲ憲法中ニ揭グルヲ以テ不可ナリトセリ。何トナレバ之ヲ憲法中ニ揭グルトキハ憲法ニ於テ定ムベキ限界ヲ越ユベケレバナリ。凡ソ憲法ハ重要ニシテ基礎トナルベキ原則ヲ定メ、憲法ヲシテ憲法タラシメザルベカラズ。歸化

ヲ規定スルニハ歸化ヲシテ行政權ノ專恣ナル執行ニ免レシムルガ爲ニ、之ヲ立法權ノ執行ニ委スレバ足レリトス。故ニ此事ニ關スル法律ニ於テ規定スベキ節目ハ憲法ニ屬セザルベク、但憲法ニ依リテ立法權ノ爲メ一定ノ制限ヲ定ムルコトヲ得ベシ。例ヘバ大歸化ト通常歸化ノ差別又ハ之ヲ得ルガ爲メノ條件ニ關スルモノ、如キ是レナリ。

往古ニ在リテハ歸化ヲ許可スルニ關シ現今ノ如ク嚴密ナラザリシ故ニ、當時唯僅々ノ規定ヲ憲法中ニ揭グルコトヲ得タリ。是ニ反シテ近今ニ至リテハ此件ニ關シ漸次詳細ノ規則ヲ頒布シタリ。蓋シ其範圍漸ク廣ク且ツ官廳ノ手續權限ニ關スルガ爲メニ憲法中ニ揭載スルヲ以テ足レリトスルコト能ハザレバナリ。

故ニ憲法中ニハ特ニ此件ニ關ル重要ノ原則ヲ示シ、而シテ特別ノ規則ハ特別ノ法律ヲ以テ定ムルヲ可トス。

（第二）大歸化ト通常歸化トノ區別ハ墺國又ビ獨逸國ニ於テ之ナキ所ナリ。然レドモ英國白耳義（往古ハ佛國ニ於テモ）及合衆國（大統領被選權ノ通常歸化ニ依テ得ベカラザル限リ大統領被選舉權ニ關シ）ニ於テハ此區別アリ、通常政事上ノ關係ニ於ケル國民權ハ特ニ大歸化ニ依リテノミ之ヲ得ルモノトス。例ヘバ代議士被選舉權及最高等ノ官職ヲ帶ブベキ能力是レナリ。其之ヲ得ベキ條件ハ久シク國內ニ居住シ或ハ國內ニ於テ特別ノ功績アリ、又ハ代議院ニ於テ歸化ヲ附與スルコ

ト是レナリ。此レ其故ハ他ナシ、外國人ハ一國ノ事件ニ於テ最上ノ裁斷權ヲ有スベカラザレバナリ。通常ノ入境者勞働者又ハ職工ト彼ノ卓絶ノ人物ニシテ其人國民トナルモ平凡種族ノ人ノ如キ弊患アルコトナキ者トノ間ニ區別ヲナスコト數多ノ場合ニ在リテ適當ナルベシ。若シ任意ヲ以テ入境シタル各外國人ニシテ、更ニ制限スル所ナク政治上ノ權利ヲ與フルコトアラバ、憲法又ハ國內ノ秩序ヲ妨害スルコトナシトセズ。許多ノ入境者アル場合社會黨又ハ異人種卽チ未ダ十分ニ國ノ狀況及需用ニ適セザル他人種ノ入境スル場合ニ於テハ特ニ然リトス。故ニ大歸化ト通常歸化トヲ區別シテ本然ノ政治ノ權ヲ得セシメ及最高等ノ官職ヲ帶ルコトヲ得セシムルニハ上文ニ述ブルガ如ク特別ナル條件ヲ設クルコト緊要ナリ。

十二月二日

井上君貴下

ハー、ロエスレル　謹白

問目

民法上ニ付キ中古ニ行ハレタル外國人抑制法ノ第十八世紀ノ末ニ於テ旣ニ各國ノ間ニ廢止セラレタルハ近世歷史ニ於テ開化ノ進步ヲ表示シタリト雖モ、國法上國民政權ノ點ニ係リテハ各國ノ憲法ニ於テ內外人ノ間ニ區別ヲ示サザルハナシ。

其中ニハ（ア）外國人ハ旣ニ歸化スル者ト雖モ執政又ハ參事官ニ任ズルコトヲ得ズトスル者アリ（ポルチユガル憲第六百八條）（ベ）法律ニ依ルニ非レバ外國人ノ官ニ就クコト又ハ歸化スルコトヲ許サヾル者アリ（荷蘭丁抹等）（セ）其本國ノ籍ヲ離ルヽノ後ニ非ザレバ歸化入籍ヲ許サヾル者アリ（瑞西）

獨逸ニテハ外國人ヲ使用スルコト本國ニ有益ナルガ爲ニ國法上ニ向テモ此ノ區別ヲ寬ニシタルハ已ニ貴下ノ敎ヲ領シタル所ナリ。今更ニ詳細ヲ乞フ爲ニ左ノ疑題ヲ呈ス。

第一　獨逸ニ於テハ外國人官吏トナルノ前ニ先ヅ歸化ノ手續ヲ要セザルヤ、其他何等ノ約束（コンヂシヨン）モナキヤ。

第二　獨逸國ノ官吏トナルト同時ニ獨逸ノ國民タルノ權利ヲ得ルトナラバ、兵役及忠義ノ誓等獨逸國民タルノ義務ヲモ同時ニ負擔スルヤ。

國民權內外人差別ニ付ロエスレル氏モスセ氏意見

第三　獨逸國ノ官吏タル外國人ハ其本國ノ許可ヲ得ルト否トニ拘ラズ、同時ニ獨逸ノ國民タルガ爲ニ其本國ノ國民籍ヲ脫スル者ナリヤ、又ハ本國ト獨逸ノ二國ノ國民籍ヲ兼有スルヤ。若シ更ニ詳明ノ教ヲ賜ハヾ幸甚ナリ。

十一月廿九日

答　議

井上　毅

獨逸殊ニ普國ノ法ニ據レバ外國人歸化ヲ許サレタルトキハ獨リ民法上ノ關係ニ於テノミナラズ、政治上ノ關係ニ於テモ亦內國人ニ異ルコトナシ。英國ニ於テハ千八百七十年ノ歸化法律頒布以來、外國人ニ歸化ヲ許可スルニ巴羅門ノ許可ヲ要セズ。此法律ニ據レバ外國人ニシテ大英國ニ五年間寄留シ、又ハ五年間勤務スルトキハ內務卿ヨリ歸化ノ許可ヲ受ケ、凡テ英國人ノ有スル權利ヲ得有シ、且ツ忠勤ノ宣誓ヲナサヾルベカラズ。

今三個ノ問題ニ就キ之ヲ論ゼンニ、

（一）獨逸ニ於テハ獨逸ノ官職ニ就クノ前ニ歸化ノ許可ヲ受クルノ必要ナシ、但外國人ハ內國人ノ盡スベキ條件（コンヂション）ヲ盡サヾルベカラズ。然レドモ外國人ノ爲メニ特別ノ條件ヲ設クルコトナシ。

（二）外國人官職ニ就クトキハ其任官所ニ於テ明カニ從前ノ國民資格ヲ保ツベキコトヲ記載スルニ非ザル以上ハ、自カラ歸化ノ默許ヲ得ルモノトス。而シテ任官所ニ此等ノ事ヲ記載スルハ例外ニ屬ス。自ラ默許セラレタル歸化ノ效力ハ公許シタル歸化ノ效力ニ同ジキモノトス。歸化者ハ內國人ニ同ジク凡テ權利ヲ得有シ、且ツ同時ニ凡テノ義務ヲ負フモノトス。而シテ特ニ兵役義務ニ就テ然リトス。又宣誓ニ就テモ歸化者ハ內國人ニ異ルコトナシ。往古ハ凡テ臣民タルモノハ君主ノ始メテ政權ヲ握ラルヽノ時ニ當リ所謂一ノ服從ノ宣誓ヲナサヾルベカラズ。又國家ニ歸化スル者ハ其歸化ニ際シ又國宗中ニ誕生シタル者ハ其丁年トナルトキニ當リ亦服從ノ宣誓ヲナサヾルベカラザリシナリ。然レドモ普國ニ於テハ此宣誓既ニ廢セラレ、今ハ唯官吏ノ宣誓及國會議員ノ宣誓ノミヲ存セリ。獨逸帝國官吏モ亦其委任セラレタル職務ニ屬スル凡テノ義務ヲ盡スベキノ宣誓ヲナサヾルベカラズ（帝國官吏法律第三條）此勤務ニ就テノ宣誓ハ外國人ト雖帝國若クハ普國ノ職務ニ奉事スルトキハ之ヲナサヾルベカラズ。

（三）獨逸法ニ據レバ歸化ノ許可ハ必シモ外國々民ノ資格ヲ失ハシムルノ結果ヲ有セズ、又外國々民ノ資格ヲ失ヒタル後ニ始メテ歸化ノ許可ヲ與フルモノニ非ズ。故ニ獨逸ノ官職ニ就クガ爲メ

生ジタル歸化ニ至リテモ亦然リ、官職ニ就キタルモノハ法律上其固有ノ國民資格ヲ保有ス、故ニ此人ハ獨逸及外國ノ國民資格ヲ併有スルモノトス。例ヘバ露國ノ臣民ニシテ其政府ノ許可ヲ得テ普國ノ官職ニ就クトキハ同時ニ露國及普國ノ臣民タリ。

之ニ反シ佛蘭西法ニ據レバ佛國人外國ニ歸化スルトキハ從前ノ國民資格ヲ失フモノトス。一國民ニシテ二重ノ國民資格ヲ有スルニ因リ生ズル所ノ甚ダ危險ナル爭訟ハ瑞西千八百七十六年ノ法律ニ依リ能ク除却セラレタリ。此法律ニ據レバ歸化スベキ者其從前ノ國民資格ヲ失ヒタルコトノ證明ヲナサヾルトキハ、瑞西ニ歸化スルヲ禁ズルモノナリ。又各國互ニ條約ヲ締結シ互ニ前述ノ證明アラザルトキハ歸化ヲ許サヾルノ義務ヲ負擔セシムルアリ。例ヘバ普國及墺國間ニ於ケル條約ノ如シ。若シ此種ノ義務ニシテ存セザルトキハ、普國若クハ帝國政府ハ法律上假令外國人固有ノ國民資格ヲ放棄セズ、若シクハ失ハザルトキニ於テモ、外國人ヲ任官シ、以テ之ニ普國若クハ獨逸ノ國民資格ヲ與フルヲ妨ゲラレザルモノトス。

又一方ヨリ論ズルトキハ、外國人ヲ任官スルノ義務ハ絕エテ存セザルナリ。故ニ外國人ヲ任官スルニ條件ヲ設ケ、特ニ固有ノ國民資格ヲ放棄シタル後始メテ官ニ任ズルコトノ條件ヲ設クルヲ得、此條件ヲ設クルハ以テ二重ノ國民資格ヲ有スルガ爲ニ生ズル事件ヲ豫防スルナリ。

外國人獨逸ニ於テ歸化シ、若クハ任官スルガ爲メ其固有ノ國民資格ヲ失フヤ否ヤハ又其鄉國ノ

法律ニ依リ定マルモノトス。故ニ其鄉國ノ法律例ヘバ佛蘭西若クハ伊太利ノ國民資格ヲ失フノ結果ヲ生ズ。此結果ハ佛人若クハ伊太利人ヲ獨逸若クハ普國ノ官職ニ任ジ、別段ノ條件ヲ設ケザルトキニモ亦生ズルモノトス。然カノミナラズ數國ノ法律ニ據レバ、內國人其政府ノ許可ヲ受ケズシテ外國ニ奉任スルトキハ其國民資格ヲ失フコト、又ハ少クモ其資格ヲ剝奪シ得ルコトヲ定メタリ。

此ニ由テ之ヲ觀レバ、假令獨逸法ニハ原則ニ於テハ其事アルヲ容ルヽモ、官吏ノ二重ノ國民資格ヲ有スル場合ハ甚ダ稀ニ存スルコトナルベシ。

此問題ニ付日本ニ於テ如何ナル方向ヲ取ルベキ乎ハ小官口頭ヲ以テ陳述センコトヲ希望ス。

以上回答ニ及ビ候也。

東京

千八百八十六年十一月三十日

モス セ

國民權內外人差別ニ付ロエスレル氏モスセ氏意見

問目

各國ノ憲法ノ內ニ國民ノ權利ヲ得又ハ失フノ明條ヲ定メタルアリ、又ハ之ヲ別法ニ讓リ憲法ニ於テハ單ニ其立法ノ定ムベキ所ナルコトヲ示シタルアリ、此ノ二ツノ方法ハ何レガ尤便ナルヤ。

答議

本日ノ下問ニ對シ小官ハ國民ノ資格ノ得有及失墜ニ關スル規則ハ憲法ニ規定セズシテ法律ニ規定スルノ便ナル旨ヲ回答ス。其理由トスル所ノ大要ハ、此規則タル國際ニ關涉スルモノニシテ、國際條約ヲ以テ制定セラレタリ。又將來益々此方法ヲ以テ制定セラレンコトヲ希望ス。故ニ若シ之ヲ憲法ニ制定スルトキハ將來此規則ヲ變更スルニ於テ實際上ノ不便少ナカラザルベシ。

今日ハ其理由ノ大體ヲ陳述セリ、明日ハ此問題ニ付キ貴下ニ面接ノ上尙詳述センコトヲ望ム。

東京

千八百八十六年十二月二日

モス

セ

（十二月三日午前面話）

問

國民資格ノ得有又ハ脫除ノ條ヲ憲法ニ揭ゲタル國アリ、或ハ揭ゲザル國アリ、何レガ當然トスルヤノ問題ニ付更ニ詳明ノ說ヲ乞フ。

答

予ハ此事ヲ憲法ニ揭ゲザルヲ是トス。何トナレバ此事多クハ國際條約ニ關係スルヲ以テ、憲法ノ明文ハ往々抵觸ノ不便ト變更ノ頻煩トヲ免レザレバナリ。

又孛國ノ如ク（第三條）此事別法ヲ以テ之ヲ定ムルト云フノ旨ヲ揭ゲテ之ヲ法律ニ讓リタルモ、別法ノ爲ニ目錄（カタログ）ヲ記シタルニ似テ亦憲法ノ體裁ニアラズ。故ニ寧ロ此事ハ憲法ノ明文ニ於テ之ヲ沈默スルヲ可トス。

予ハ歐洲大陸ノ憲法論ニ反對シテ英國ノ不文憲法ヲ是トスル者ナリ。但シ日本ノ現情ハ既ニ英國ト同日ニ言ヒ難キノ事狀アルヲ以テ、憲法制定ノ目的ハナルベキダケ事ノ節目ニ渉ル者ヲ避ケ、專ラ大綱ノ重要ナル條章ヲ揭グルニ止メ、以テ永久ニ動カザル憲法ノ當然ナル性質ヲ保タシムルコトヲ希望ス。

問

外國人歸化又ハ任官ノ事ニ付、先日ノ貴簡ニ面語ヲ要スルトノ旨アリ、願クハ其說ヲ聞カン。

答

此事條約ノ新案ニ關係スルヲ以テノ故ニ面語ヲ以テ委曲事情ヲ悉スコトヲ望ミシナリ。外國人ヲ法官トシテ其外國人タルノ資格ヲ以テ法廷ニ臨マシムルトキハ埃及ノ立會裁判タルコトヲ免レズ。又就任ノ時ニ併セテ歸化ノ性質ヲ與フル者トスルトキハ、(字國ノ現行法)一人兩國ノ國民タルヲ免レズ。一人ニシテ二重ノ國民資格ヲ有スルトキハ往々兩樣ノ義務ノ抵觸ヲ生ジ、紛議ヲ免レザルニ至ル、故ニ余ハ瑞西ノ新法ノ尤モ精密ノ用意ヲ致セルニ倣ハンコトヲ望ム。

問

外國人ノ歸化及任官ヲ容易ナラシムルハ國ノ進歩ニ於テ利益ナルベシ。但シ歸化ノ外國人ニ向テ自由ニ他ノ公權ヲ與フベキモ、選擧代議ノ權ハ特ニ之ヲ制限スベキニ似タリ如何。

答

同意ナリ。歸化ノ後若干ノ年限ヲ經ルコトヲ要スベシ。

問

國民ノ資格ヲ得ルニ係リ、獨逸ハ血統ヲ主トシ(甲國ニ於テ生ジタル乙國人民ノ子ハ仍ホ乙國ノ國民トス)英ハ土地ヲ主トシ(英國ニ於テ生ジタル外國人民ノ子ハ英國ノ國民トス)然ルニ獨逸ニ於テモ獨逸ニ於テ生ジタル外國人ノ子トシテ又獨逸ニ生レタル卽チ二代トモニ獨逸ニ生レタル者ハ如何、此場合ニ於テハ佛國ニテハ佛國國民ノ資格ヲ有セシムルニ似タリ。

答

國民權內外人差別ニ付ロエスレル氏モスセ氏意見

獨逸ニテハ一直線ニ血統ヲ主觀トシ、更ニ除外ノ例ナシ。

問

我國ニ於テ若シ獨逸ノ法ニ從ハバ、兵役ノ義務ヲ帶ビザル外國人就中支那人ノ多數蕃殖ニ堪ヘザルコトアラン。

答

宜シキヲ酌ミ制防スルハ國權ノ在ル所ナリ。

ロエスレル氏答議

問題

貴書ニ外國人歸化ノ要件ハ憲法ニ其大限ヲ定ムベキコトヲ論ゼラレタリ。此事ニ付貴下ノ意ヲ以テ立案ヲ試ミラレバ如何ナル立言ヲ要スルヤ。

答議

國民タルノ資格ヲ得喪スルコトニ就テノ原則ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

此法律ニ依リ外國人ノ歸化證ハ行政廳ヨリ附與ス。

大歸化證ハ十五年ノ間日本國ニ滯在シタル者或ハ日本ノ爲ニ拔群ノ功勞アル者ニ非ザレバ之ヲ附與スベカラズ。

上院下院ノ代議士トナリ、或ハ大臣トナリ、行政廳ノ長官トナリ、又ハ陸海軍ノ指令官トナルノ資格ハ大歸化證ニ依テノミ之ヲ得ベシ。

余ハ貴下ノ依囑ニ依リ、國民タルノ資格ヲ得喪スルコトニ關スル一條ノ草案ヲ進呈スルニ當リ、聊カ左ノ說明ヲ加ヘント欲ス。

此草案ハ國民タル資格ヲ得喪スルコトニ關ル原則ヲ定ムルハ立法權ノ職掌ニシテ、斯カル場合ニ於テ歸化證ヲ附與スルハ行政權ノ職掌トナシタリ。或ル國ニ於テハ歸化證ヲ附與スルコトヲモ併セテ立法權ニ委ヌト雖、此法ハ正當ナラズ。何トナレバ歸化證ノ附與ハ行政ノ區域內ニ屬スルコトハ當然ノ理ニシテ、歸化ノ場合ニ於テ行政ノ事務ヲ立法權ニ委ヌル十分ノ理由ナケレバナリ。又立法卽チ議院ニ於テ歸化ノ事ヲ政治上ノ黨議ニ關ル事件トシテ取扱フガ如キハ事宜ノ適當

ニ非ズ。

此草案ニ於テ大歸化ノ要件ヲモ併セテ揭載シタリ。何トナレバ其要件ハ本來國民タル資格ヲ得ルノ要件ニハアラズシテ、或ル政權ヲ行フコトニ關ル要件ナレバ、之ヲ憲法中ニ揭載スルハ固ヨリ正當ナレバナリ。故ニ本案第一項ニ國民タル資格ヲ得ルノ要件ハ通常ノ法律ヲ以テ定ムベシトスルト相矛盾スルニ非ズ。又例外ニモ非ザルナリ。白耳義ノ憲法ノ如キハ大歸化ヲ一種ノ歸化ト見做シ、通常歸化ト均ク通常ノ法律ヲ以テ之ヲ規定セシメタリ。此兩樣ノ場合ニ依リテ各々正當ナラン歟。例ヘバ人アリテ先ヅ通常ノ歸化ヲナシ。十五年ヲ經タル後更ニ大歸化ヲナスガ如キ、又人アリテ拔群ノ功勞アルガ爲メ、最初ヨリ直チニ大歸化ヲナスガ如キ、第一ノ場合ニ於テハ大歸化ヲナストキ既ニ前日通常歸化ヲナシタレバ其人既ニ外國人ニアラザルガ故ニ、本來ノ大歸化ナルモノハ單ニ第二ノ場合ニ於テノミ存スル者ナリ。是レ兩樣ノ差異アリトスル所ナリ。

是ヲ以テ大歸化ノ要件ニ關スル第三項ハ之ヲ揭ゲザルモ亦必要ヲ缺クコトナシ。但大歸化證ヲ附與スルニハ通常ノ歸化ニ關スル法律上ノ要件ニ循フベキハ勿論ノ事タリ。

大歸化ノ效力ニ關スル第四項ハ極メテ必要タリ。何トナレバ此項ハ或ル政權ヲ與フルコトヲ揭グルガ故ナリ。政權ヲ與フルニ多少アリ、白耳義法律ノ如キハ大歸化ニ依テ諸般ノ政權ヲ得セシメ、殊ニ參議院議官「ゲネラル」或ハ高等法院ノ判事タルノ資格ヲ得セシム、此レ甚ダ適當ノ度ヲ過ギタリトス。其他ノ國ノ憲法ニ於テハ多クハ國會議員タル資格ヲ得セシムルニ止マル此草案ハ宜キヲ斟ミ折衷シタル者ナリ。

(答) 孛國憲法第百二條ニ關スル意見

ロエスレル拜

(一) 孛國憲法第百二條ノ意義ハ、手數料ハ法律ヲ以テスルニ非ザレバ之ヲ徵收スルヲ得ザルニ在ラズ、政府若ハ町村ノ官吏ハ法律ヲ以テスルニ非ザレバ手數料ヲ徵收スルヲ得ザルニ在リ。蓋本條ノ意義ハ國庫ノ爲メニスル租稅及雜稅ハ歲計豫算ニ揭載スルカ又ハ特別ノ法律ヲ以テ定ムル場合ニ非ザレバ之ヲ徵收スルヲ許サズト云ヘル第百條ト對照スルトキハ自ラ判然スベシ。

第百二條ニ於テハ正條ノ法文既ニ明瞭ナル如ク、國庫ニ收入スル手數料ヲ揭ゲタルノ意ニ非ズ。官吏政府ノ職務ヲ行ヒタル場合徵收スベク、而シテ其收得ノ一部トナル所ノ手數料ヲ謂フナリ。斯ノ如キ手數料ハ中古ノ末期獨逸國ニ於テハ裁判費ト稱シ專ラ裁判所ニ行ハレ、其後ハ或ル行政

上ノ執務ニ對シテモ亦之ヲ徵收シ、當該官吏ノ收得ノ一部ヲ成シ、其勞務ニ對スル報酬ト見做サルヽニ至リタリ。然レドモ官吏一定ノ俸給ヲ受クル例規ヲ設ケタルノ後ハ、手數料ハ常ニ國庫ニ收入スルノ例トス。而シテ斯ノ沿革ヲ經テ當世期ニ至リ、遂ニ其局ヲ結ビタルノ今日ニ於テモ尙兼務ノ爲メ手數料ヲ受ルノ例外ナキニ非ズ。卽第百二條ノ如キハ法律ニ依レル場合ニ於テノミ斯ノ如キ手數料ノ徵收ヲ許シタルモノニシテ、此規定ニ關シテハ玆ニ之ガ理由ヲ論究スルヲ要セズ。

又法律ヲ以テスルニ非ザレバ國庫ノ爲手數料ヲ徵收スルヲ許サヾルヤノ問題ハ、第百條ニ依リテ判定スベク而シテ雜稅ナル語ノ廣汎ナル意義中ニハ手數料ヲ包含スベシ。

(二)　今國庫ノ爲手數料ヲ徵收スルニハ議院ノ承認ヲ經ルモ正當ナリトスベキヤノ問題ニ關シテハ先ヅ手數料ノ意義ヲ講究セザル可カラズ。

蓋シ手數料ノ意義ニ關シテハ學問上ニ於テ說ク所未ダ一定セズト雖モ、此意義ヲ定ムルニハ一ニハ手數料ト租稅ノ區別ヲ判明ニシ、又一ニハ政府ノ一私人ノ資格ニ於ケル經濟上ノ收得ト手數料ノ區別ヲ分タザルベカラズ。

手數料ト租稅ノ區別ハ本問題ニ關シ特ニ之ヲ論述スルヲ要セズ、何トナレバ總テ雜稅ハ純粹ノ租稅又ハ手數料ノ性質ヲ具フルト否トニ拘ラズ、必ズ法律ニ依テ徵收スベケレバナリ、而シテ此原則タル租稅ニ在テハ一般ノ是認ヲ經タル所ニシテ、手數料ニ至テモ亦租稅ニ於ケルト同一ノ理由ヨリシテ之ヲ適用スルヲ得ベシ。蓋手數料ハ歲計豫算ニ於テ租稅ノ部ニ揭グルノミナラズ、又均シク政府ノ支出ニ充ツル爲一定ノ固定額ヲ成セリ。但一個ノ利益ノ爲ニ政府ヲ煩シ、若クハ特別ノ事務ヲ行ハシムル者ニ對シ之ヲ徵收スルハ權宜上ノ理由ヨリ生ズル者ナリ。故ニ手數料ハ其實特別徵稅ニ外ナラズ。之ヲ詳言スレバ專ラ一定ノ義務者ニ對シ一般普通ノ標準ニ依ラズ、其人ノ爲ニ生ジタル特別ノ費用若ハ其人ノ得タル利益ニ準據シテ徵收スル所ノ租稅ナリ。加之之ヲ財政ノ實際ニ徵スルニ、手數料ハ其額義務者ノ請求シタル政府ノ執務費ノ外ニ出ヅルノミナラズ、又其執務ノ經濟上ノ價値ニ超過スルコト往々之アリ。而シテ此場合ニ於テハ純然タル租稅ト區別スル所ナリ。又義務者ノ資力ニ準シテ其額ヲ定ムルヲ得ベク、而シテ實際屢々斯ノ如クスルハ更ニ租稅ニ異ナルモノナケレバナリ。蓋國法上ノ本問題ニ關シ手數料ヲ以テ租稅ト同一視スルノ正當ナルハ以上ノ理由ヨリ然ルモノニシテ、其他諸般ノ政治上ノ理由ヲ論辯スルヲ要セザルナリ。

(三)　然レドモ政府一私人ノ資格ヲ以テスル事業ニ於テ明約ト默約（往々之アリ）トヲ問ハズ、一私人トノ契約ニ從ヒ徵收スル所ノ額ニ關シテハ別論ナリ。蓋此場合ニ於テ行政ハ法律ニ背反セザル限リハ各個ニ對スルト一般ニ於テスルトヲ論ゼズ、其煩勞ニ準ズル報酬ニ關シ更ニ議院ノ承認ヲ經ルヲ要セズ。一私人ト協議ノ上若ハ專斷ノ賃錢表等ヲ以テ其額ヲ定ムルヲ得ベシ。是レ殊ニ政府ノ運輸事業ニ在テ行ハル、所ニシテ、手數料ナル語ヲ用キルハ誤レルモノト云フベシ。然

レドモ運輸事業ノ他日漸ク進歩スルニ於テハ公法上ノ事業ニ變性シ、而シテ政府ト其事業ヲ使用スル者トノ關係ハ既ニ契約ヲ以テ論ズベカラザルニ至ルベク、隨テ一私人ノ報酬ハ變ジテ手數料ノ性質ヲ帶ルニ至ルベク、二三ノ國ニ於テ既ニ斯ノ如キ進歩ヲ爲スノ傾向アルニ拘ラズ、未ダ其結局ニ至ラザル間政府ハ專ラ運輸事業者トシテ一私人ニ對立シ、兩者ノ關係亦民法上ノ區域間ニ止マルガ故ニ、一私人ノ報酬ハ假令ヒ政府一方ニ於テ其額ヲ定ムルモ、仍民法上ノモノニシテ以上論述シタル租稅類似ノ手數料ハ公法上ノ性質ヲ具ヘザルモノトス。之ヲ要スルニ、一私人ノ報酬ハ宇國憲法第百條ニ曰フ所ノ雜稅ニ非ザルガ故ニ、此理由ヨリ見ルモ又國法上一般ノ主義ヨリ論ズルモ法律ヲ以テ制定スルヲ要セザルナリ。而シテ此原則ハ政府ノ一私人タル資格ヲ以テスル事業外ニ出デザル限リハ、郵便電信料電話料鐵道料ハ勿論、其他政府ノ事業及營造物ニ關シテ行ハル所ナリ。故ニ法律上ヨリ論ズルトキハ政府ノ郵便事業ノ大部ニ於ケル如ク、法律ニ依リ一私人ノ競爭ヲ禁ズル場合ト雖亦手數料ナル語ヲ用キルヲ得ズ（茲ニ注意スベキコトハ、政府ノ郵便專有權ト租稅專有權トヲ混同スベカラザルコト是レナリ。租稅專有權ハ租稅ノ徵收方法ヲ表示スルニ止マルモノナルガ故ニ法律ヲ以テ制定スベキナリ）然レドモ政治上ヨリ說ヲ立ツルトキハ、行政ニ於テ財政ノ目的ニ拘泥シ、濫リニ專有權ヲ利用シ、以テ一般交通ノ利益ヲ害セザラシメンガ爲ニ法律ニ賃錢ヲ明揭スルハ大ニ理由アルモノニシテ、卽獨逸國ノ如キハ茲ニ見ル所アリテ重要

ナル賃錢ノ定率ヲ法律ニ讓リタルハ其一例ナリ、但斯ノ如クスベキ國法上ノ必要ナキハ宇國憲法第百條及國法上一般ノ主義ヨリシテ判然スベキノミ。

モス セ 再拜

十月、十一月間ロエスレル氏答議

一、所有權讓與ノ件
一、手數料ノ件
一、兩院徵集ノ件
一、行政上强制處分ハ憲法ト矛盾セザルヤノ問
一、非常ノ時ニ際シ權利停止ノ處分ヲ以テ君權ニ屬スルヲ穩當ナラズトスルノ問（モスセル氏ロエスレル氏）
一、勅令ヲ以テ人民ノ幸福ヲ增進スル爲ニ發スル者トシテ解釋スルコトヲ得ベキ乎ノ問
一、召集閉院解散停會ノ王命ノ文式竝停會ノ問

問

人民ノ權利ハ不可侵（インヴイオラビリチー）ノ物タリ、然ルニ公益ノ爲ニ所有權ヲ讓與セシムルガ如キハ、法律ヲ以テ權利ヲ制限（レストリックテット）スルヨリモ寧ロ權利ヲ奪フノ類ナルガ如シ。此ノ場合ニ於テ法律ハ權利ヲ侵（ウイオレット）スト云フコトヲ得ベキカ、或ハ其事物ハ之ヲ奪フトモ其權利ハ仍不可侵ノ位置ヲ保ツトシテ解釋スベキカ。

答

侵害ノ意義ハ毀損ノ事實ナクンバアルベカラズ。例之ハ人身侵害ハ他人ノ身體ニ損傷ヲ加ヘタル事實アル時ニアラザレバ之ヲ言ハザルガ如シ。故ニ公益ノ爲ニ所有權ヲ讓與セシムルコトモ若シ其所有物ノ價格ニ相當スル賠償ヲ得ルトキハ之ヲ以テ所有權侵害セラレタリト謂フヲ得ズ。法理上ヨリ之ヲ觀ルニ「凡己ノ權利ヲ施用スル者ハ其施用ニ依テ他ノ權利ヲ侵サズ」トノ原則ハ正サニ此ニ適應ス。故ニ私有物買上ノ權法律ニ依テ明カニ定メラレタル上ハ之ヲ以テ所有權ヲ侵スト謂フヲ得ズ。

左レバ公益ノ爲メ所有權ヲ讓與セシムルコトハ唯其事ノ道理ニ適ヒ、法律ニ根據スルヤ否ヤヲ問フノ一點ニアルノミ。而シテ此問題ニ對シテハ一般ノ法制ニ依テ之ヲ答辯シ得ルノミ、就中何レノ主義ニ從ヒテ土地所有權ノ制ヲ定メタルヤヲ問ヒ、而テ後該問題ニ答フルコトヲ得ルノミ。（此ニ土地所有權ト言ヒタルハ元來公益ノ爲ニ所有權ヲ讓與セシムルコトハ單ニ土地ノミニ關スルヲ妥當トナセバナリ）

若シ所有權ヲ以テ無限絶體ノ權利トナシ、再言スレバ物件ヲ獨占專有シテ之ガ支配權ヲ全有スコトヲ得ベキカ、或ハ其事物ハ之ヲ奪フトモ其權利ハ仍不可侵ノ位置ヲ保ツトシテ解釋スベキカ。

ルモノトナスカ、或ハ物件ニ對スル一切ノ使用及利用ヲ包括スルモノトナス時ハ、公用ノ爲ニスル讓與ハ無論所有權ノ毀損ト看做スベシ。何トナレバ他ノ權利ハ此所有權ニ打勝ツコトヲ得ザレバナリ。此場合ニ於テハ假令所有權ノ價格ニ相當スル賠償ヲ與フルモ、尙所有權ノ脫却ノ强制セラレタルモノニシテ、卽チ我ガ權利ノ自由ヲ奪ハレタルニ相違ナシ。

然ルニ斯ノ如ク所有權ヲ解釋スルノ理論ハ後世ノ羅馬律ニ基キタルモノニシテ、決シテ實際ニ適セズ。抑々土地所有權ナルモノハ其使用利用共用等ニ關シテ法律上百般ノ制限ヲ受クルヲ見テモ既ニ其無限絕對ノ權利ニアラザルヲ知ルニ足レリ。國ニ由リテハ例之バ英國及米國ニ於テハ土地ニ關シテ私人ノ所有權アルヲ認メズ、單ニ現有權（ベジック）（tenure）アルヲ認ルノミ。余輩ガ土地所有權ト稱スルモノハ英米二國ニ於テ「フヒーシンプル」（fee Simple）（單純ノ借地權）ト言フ、但シ此現有權タル事實上通常ノ私有權ニ異ナラザルナリ。太古及中古ノ世ニ於テ土地ハ其初メ或ハ共有物或ハ國有物ト看做シ、國民之ヲ用ヰルノ權ヲ使用權トナシ、卽チ其原有權ハ國家若クハ君主ニ屬シ、人民ノ土地所有權ハ第二段ノ所有權ナリト看做シタリ。蓋シ此原有權ノ基因ハ公共ノ利益ト政治上ノ目的ニ應ジテ土地現有權ヲ分配シタルニアラザルナリ。諸ノ使用權例之バ採礦、漁業、航海ノ權利ノ如キハ之ヲ人民ニ與ヘズシテ國家ノ特有ニ留メ以テ土地私有權ヨリ別離シタリ。

右ニ述ベタル土地所有權ノ起源沿革ヨリ之ヲ推ストキハ、土地所有權ノ決シテ無限ノ私有權ニアラザルヤ甚ダ明カナリ。此ニ於テ土地ハ公益ノ爲ニ使用スルノ必要ナキ時ニ限リ其使用ヲ臣民ニ許與シテ可ナリトノ通則ヲ定メ得ルニ至レリ。

加之、一ノ賠償ナクシテ私有權ヲ讓與セシムルコトモ亦全ク爲シ得ベカラザルニアラズ。是レ往昔公用地買上法ノ今日ノ如ク整備セザリシ時ニ屢々見タル例ナリ。其理ハ往昔地主ガ豫ネテ農夫ニ委托シ置キタル土地ヲ自身耕耘セントス欲スルトキハ該農夫ヨリ其土地ヲ取上ゲタルト一般ナリ。

然レドモ此等ハ封建時代ノ獨裁國ニ屬シタル私有權ノ不安全ナルモノニシテ、今日ニ適セザル論ヲ俟タザルナリ。今日ニ於テ私有權ハ政府ノ隨意ニ左右シ得ルモノニアラズ、唯土地所有權ハ無限ノ權利ニアラズシテ、若シ公益ノ爲ニスル必要アルトキハ其私用ヲ廢セザルベカラズトノ原則ヲ存スルノミ。而シテ所有權侵犯ノ異議ヲ避ケンガ爲メ、豫メ其所有ニ相當スル賠償ヲ與フルニアラザレバ讓與セシメズトナス。是レ一般ノ認定スル所ナリ。

故ニ余ハ所有權ナルモノハ私權ト公益トノ二點ヲ根據トシテ之ガ法律ヲ制定セザルベカラザルモノト思惟ス。顧フニ現時社會ノ進運及事情ニ對シテ往々不穩當ナル羅馬法ノ解釋ハ今日ノ民法中ニ其跡ヲ絕チ、隨テ所有權モ亦社會ノ一施設トナリテ發達セザルベカラザルノ時運遠カラズシテ到來スルコトナルベシ。其他動產不動產ヲ同一視スルノ甚ダ不條理ナルモ亦缺典ノ一ナリ。

以上陳述セシ理由ヨリシテ公用地買上ハ所有權ノ侵害ト看做スコトヲ得ズ。

千八百八十七年十一月一日

問

手數料及公權收入ノ事ハ過日既ニ答示ヲ得タリ、但シ現在孛國ニテ租稅ノ外トシテ取立ツル手數料ハ何々ナルヤ。

又憲法第百二條ニ依リ租稅ト同ジク國會ノ議ヲ經テ取立ツル手數料ハ何々ナルヤ。

又政府ノ公權上ノ收入トシテ國會ノ議ヲ經ザル專獨特權ハ何々ナル乎。

右貴下ノ條列シテ指教セラレンコトヲ求ム。

ドクトル、ハー、ロエスレル 記

井上

答

右ノ問題ニ答フルコト左ノ如シ。

第一問ニ答フ。孛漏生國ニ現行スル手數料ニ二種アリ。

第一　本來ノ手數料卽チ狹義ノ手數料ニシテ「スポルテルン」ト稱スルモノ是ナリ。之ニ屬スルモノハ、

一　裁判費用　爭訟裁判費用及爭訟ニアラザル裁判取扱ノ費用

二　行政手數料　行政官衙ニ於テ人民ノ爲ニ取扱ヒタル事務ノ費用

第二　准手數料卽チ政府ノ施設物ヲ利用スルモノヨリ收ムル所ノ賠償（鐵道運賃、郵便料、學校費、貨幣鑄造料、道路費、及入港料等）

第二問ニ答フ　孛國憲法第百二條ハ單ニ本來ノ手數料ニ關係ヲ有スルノミ、卽チ裁判費用ト行政手數料ノ二ヲ指スノミ。而シテ其金額ハ之ヲ國庫ニ收ムルト俸給ノ一部トシテ當該官吏ノ手ニ收ムルトノ別アルモ之ヲ問ハズ。然ルニ右ノ原則ハ行政手數料ニ對シテ未ダ充分ニ踐行セラレザルモノヽ如シ。蓋シ此手數料ノ徵收ハ高等官衙ニ於テハ千八百二十五年四月二十五日ノ勅令ニ依據シ、下等官署ニ於テハ間々亦省令ニ由テ之ヲ實行スレバナリ。但シ近時ハ千八百六十八年二月二

十七日ノ法律ニ依リ、何レノ手數料ヲ自今引續キテ徵收スベキヤ何レヲ自今廢止スベキヤヲ定メタリ。

第三問ニ答フ　孛國ニ於テ准手數料即チ政府ノ特有權（レガーリエン）施用ヨリ生ズル收入ニシテ賦課金（アッフガーベン）ノ性質ヲ有スルモノハ憲法第百條ニ從ヒ、法律ニ依ルニアラザレバ之ヲ定ムルコト能ハズト雖モ、其賦課金ノ性質ヲ帶ビザルモノハ議院ノ承認ヲ經ルヲ要セズ。

此賦課金トハ特別ノ意義アルモノニシテ、之ヲ明記スルコト甚ダ難シトス。然レドモ人民ヨリ政府ニ納ムル金ニシテ本來ノ租稅ニモ本來ノ手數料ニモ屬セザルモノハ卽チ此賦課金ト解釋シテ可ナルベシ。語ヲ更ヘテ言ヘバ、此賦課金ハ官ノ手數ニ對スル單純ノ報酬ニアラズシテ、之ヲ徵收スルニモ亦收稅ノ原則ニ依ルヲ要セザルモノトス。隨ヒテ納稅能力ノ程度及豫メ施行スル評定ニ基キテ賦課徵收スルモノニアラズ。

此賦課金ニ屬スルモノハ例之ハ專賣特許料、航海料、河川、運河、及道路通行料、木材押流料ノ如キモノニシテ其額ハ單純ノ報酬額ヲ超ユルモノ是レナリ。

故ニ法律ノ規定外ニ在ル手數料ハ主トシテ貨幣鑄造料、鐵道運賃、郵便料、水先案內料、入港料、燈火料、倉庫料是レナリ。

然レドモ上記ノ原則ハ孛國ニ於テ嚴ニ之ヲ遵守スルニアラズ、卽チ一方ニ於テハ單純ノ行政令ヲ以テ道路、河川及港灣ニ關スル賦課金ヲ確定シ、其額ヲ費用ノ償ハレ得ルニ止メ、若クハ單純ノ報酬ノミニ止メ、一方ニ於テハ賦課金ノ性質ヲ帶ビザル手數料例之バ貨幣鑄造料、郵便料ノ如キモノヲ法律ニ依リテ確定シタリ。前段ノ場合ハ古來ノ慣例ニ由リテ然ルモノナルベシト雖モ、其果シテ憲法ニ抵觸セザルヤノ疑ヒアリ。後段ノ場合ハ商業上重大ノ關係アルガ爲ニ法律ニ依ルモノナリ。

之ヲ要スルニ個々ノ例外ヲ除キ凡ソ租稅若クハ租稅ニ類スル賦課金若クハ本來ノ手數料ノ性質ヲ帶ビザルモノハ、代議院ノ承認ヲ要セズトノ原則ハ今ニシテ之ヲ確定セザルベカラズ。

千八百八十七年十一月廿五日

ハー、リヨースレル　記

法律ニ依ル者

一　租稅
二　手數料（スポルテルンタキス）

裁判費
行政手數料

十月、十一月間ロエスレル氏答議

三	准手數料
鐵道費	
郵便料	
學校費	
貨幣鑄造費	
道路費	
入港料	

此中賦課金ノ性質ヲ有スル者ハ專賣特許料、航海料、河渠道路料、木材押流料ノ如キハ法律ニ依ルベシ
又賦課金ニ非ザル貨幣鑄造料、鐵道費、郵便料、水先案內料入港料、燈臺料、倉庫料等ハ法律ニ依ルヲ要セズ
但孛國ニテハ道路河渠海港ノ賦金ヲ行政令ニテ定メタリ又貨幣鑄造料、郵便料ヲ法律ニテ定メタリ此レ慣例ニ依ルト又後段ノ事件ハ商業上重大ノ關係アルガ爲メナリ

問

普憲法五十一條ニ兩院ヲ徵聚ストアリ、上院ニ對シテ亦下院ト同ク徵聚ノ手順ヲ必要トスルヲ得ザレバナリ。若シ議院ニシテ隨意ニ集會スルコトアルトキハ、其行爲ハ法律ニ矛盾シ、其議決ハ無效ナリ。凡ソ兩院ハ孛國憲法第七十七條ニ於テ明言スル如ク、同時ニ招集セラレザルベカラズ。何トナレバ一院ニシテ獨立シテ一般ニ有效ナル決議ヲ爲シ能ハザレバナリ。此招集ハ勅令ヲ以テ擧行シ、其通常ノ方法ヲ以テ之ヲ法律集ニ公布スルモノナリ。

乎?

答

兩院ノ招集ハ必要ナリ、何トナレバ凡ソ議院ハ國王ノ招集ニ依ルニアラザレバ有效ニ集會スルヲ得ザレバナリ。若シ議院ニシテ隨意ニ集會スルコトアルトキハ、其行爲ハ法律ニ矛盾シ、其議決ハ無效ナリ。凡ソ兩院ハ孛國憲法第七十七條ニ於テ明言スル如ク、同時ニ招集セラレザルベカラズ。何トナレバ一院ニシテ獨立シテ一般ニ有效ナル決議ヲ爲シ能ハザレバナリ。此招集ハ勅令ヲ以テ擧行シ、其通常ノ方法ヲ以テ之ヲ法律集ニ公布スルモノナリ。

之ニ反シ各議員ノ招喚ハ必シモ之ヲ爲スヲ要セズ、何トナレバ各議員ハ前記ノ勅令ニ依リ議院ノ開會ヲ知了セザルベカラザルモノナレバナリ。然レドモ各議員ニ開會ノ事實ヲ遺漏ナク知了セシムル爲メ之ヲ招喚スルハ便益ナリ。加之又議員ヲ優待スルノ冀望ニ應ズベシ。孛漏士ニ於テハロエンネノ說ニ依レバ唯上院ノ各議員ヲ招喚シ、下院ノ議員ヲ招喚セズ、之ニ反シ巴威爾、瓦敦

堡、索遜ニ於テハ兩院ノ各議員ヲ招喚ス、蓋其他ノ獨逸各邦ニ於テモ亦兩院ノ各議員ヲ招喚スルナルベシ。招喚狀ハ大臣之ヲ發シ、此招喚狀ハ同時ニ議員ノ資格ヲ表スルモノニシテ、屆出ノ際各院議長局又ハ其他屆出ヲ受付ル所ノ機關ニ之ヲ提出スルヲ例トス。

墺國ハ千八百七十三年五月十二日ノ議院事務法律ニ依レバ、勅令ヲ以テ兩院ノ招集ヲ廣告スルノミニシテ、各議員ヲ招喚セザルモノ、如シ。下院ノ議員ハ當選狀ニ依リ其資格ヲ明ニスルモノトス。

獨逸帝國憲法第十二條及第十三條ニ依ルニ、皇帝ノ勅令ヲ以テ聯邦院及國會ヲ招集ス。

佛國ハ千八百五十二年ノ憲法第二十四條ニ依レバ、元老院及下院ハ皇帝之ヲ招集スルモノトス。最近ノ共和制憲法卽チ千八百七十五年ノ法律第一條ニ據レバ、元老院及代議院ハ毎年一月ノ第二火曜日ヲ以テ自ラ集會スベキコトヲ定メタリ。然レドモ大統領ハ臨時會ヲ招集スルヲ得、是レハ白耳義憲法第七十條ニ於テモ亦然リ。

又英國ニ於テモ兩院ハ勅令ヲ以テ之ヲ招集ス、議院ハ王位空虛トナリタル場合ヲ除クノ外此招集アルニアラザレバ集會スルヲ得ズ。其外各議員ノ招喚ニ付テハ少クモ上院ノ各議員ニ招喚狀ヲ發スルモノ、如シ。然レドモ余ハ此點ニ付キ種々取調ヲ爲シタルニ拘ラズ、其明文ノ規定ヲ發見スルヲ得ザリキ。

千八百八十七年十一月九日

問

普國千八百八十三年ノ行政條例ニハ縣令郡長警察長竝ニ戶長ニ迄、強制處分トシテ罰金ヲ科シ竝ニ其罰金ヲ拘留ニ換ユルコトヲ許シタリ。

又法律ノ正條ヲ以テ指定シタル警察規則ニ於テハ各省長官ハ罰金百マルク迄ヲ科スルノ省令ヲ定ムルノ權ヲ付與セラレタリ。

然ルニ普國ノ憲法ハ一モ此事ニ付テ明言セザルノミナラズ、却テ法律ニ依ルニ非ザレバ糺彈ヲ命ジ、刑罰ヲ科スルコトヲ得ザルノ正文ヲ揭ゲタリ。

敢テ問フ、憲法ノ主義ハ實際ノ行政强制處分トハ矛盾スルニ非ザルコトナキ乎、强制ノ罰金又ハ拘留ハ刑罰ニ非ズトノ解釋ハ、憲法學ノ許ス所ナル乎、法律ノ外ニ刑罰ヲ設クルハ理論如何ニ拘ハラズ、政治上ノ實驗ニ於テ必要アリトスルコトヲ得ベキ乎。乞教

博士　ヘルマン、ロエスレル

十月、十一月間ロエスレル氏答議

明治二十年十一月六日

答

上ニ掲ゲタル千八百八十三年ノ孛國法律ニ依レバ、實際ニ於テ警察罪、處罰ノ宣告ト警察上强制方ノ執行トノ間ニ主義上ノ區別アルコト判然タリ。何トナレバ同法律ニ於テ處罰ノ宣告及强制方ヲ官廳ニ委任スルノ規定ヲ別章ニ掲載スレバナリ。

强制方ニシテ只タ罰金又ハ拘留ヨリ成立スルノ點ヨリ見ルトキハ、主義上ノ區別外面ニ現出セズシテ同法律第百三十三條ニ依リ强制方ノ宣告執行ニ對スル上訴ハ警察處罰ノ處斷ニ對スル上訴ニ異ナルノ差アルノミ。然レドモ强制方ニシテ官ノ命令又ハ禁令ヲ直接ニ强施スルノ點、卽チ義務者ノ費用ヲ以テ其强制スベキ行爲ヲ實施スルノ點ヨリ見ルトキ、通常ノ處罰ト區別スル所アルハ外面ニ於テ直ニ之ヲ知ルヲ得ベシ。

故ニ凡ソ刑罰ハ法律ヲ以テスルニアラザレバ之ヲ宣告處斷スルヲ得ズトノ規定ヲ憲法ニ掲グルモ、强制力ヲ宣告執行スルノ權ハ此ト抵觸スルモノニアラズ。而シテ其憲法上ノ規定ハ最モ廣キ意義ニ於テ解釋スベク、法律ヲ以テ直接ニ定メタル處罰ニ關スルノミナラズ、又法律上ノ委任アル場合ニ於テ官廳其命令中ニ掲ル所ノ處罰ヲ包含スルモノナリトスベキナリ。加之千八百八十三年ノ孛國法律ハ勿論已ニ千八百五十年三月十一日ノ法律第二十條ニ於テ、警察廳ハ法律上ノ强制方ヲ以テ其命令ヲ實施スルヲ得ルガ如ク、凡ソ强制方ヲ宣言執行スルノ權モ亦法律ヲ以テ官廳ニ委任スルヲ得ベキナリ。

又千八百六十七年十二月二十六日ノ墺國憲法第十一條ニ依レバ行政廳ハ其職權內ニ於テ法律ニ準據シテ命令ヲ發シ、且義務者ヲ强制シテ法律上ノ規定及其命令ヲ遵守セシムルヲ得ベシ。巴國ニ關シテハ余ハ法律ヲ以テ此事ヲ規定シタルヲ知ラズト雖、凡ソ官廳ノ强制權ハ執政權ヨリ自然ニ生出スルコト論ヲ俟タズトスルモノヽ如シ。ピヨーツル氏（巴國法論第百五十五條第百五十六條）此事ヲ論ジテ曰ク「執政權ハタヾ法律ヲ執行スルノミナラズ、又國ノ幸福上ニ於テ必要ナル限リハ自ラ進ンデ處置ヲ施シ且之ガ爲メ專獨ヲ以テ規則命令等至當ト認ムルモノヲ行ヒ、已ムヲ得ザル場合ニ於テハ亦强制方ヲ取ルヲ得ベシ。而シテ執政權ノ目的ヲ達スルノ方便ハ其意ニ任ズルヲ常例トス。但憲法又ハ法律ノ許サヾルモノヲ撰ムベカラザルノミト」此原則ニシテ獨逸各邦中行ハレザル所ナキハ「マイエル」氏獨逸國法論第百八十七條備考第三ニ就テ知ルベキナリ。

十月、十一月間ロエスレル氏答議

蓋法律ヲ以テ官廳ノ強制權ヲ制限シタルトキハ、官廳其制限ヲ守ルベキハ當然ナリ。而シテ此制限タル千八百八十三年ノ孛國法律ニ於ル如ク、百般ノ事件ニ普通ニ制定スルヲ得ベク、又一定ノ事件ニ適用スル場合ノ爲メ各別ニ制定スルヲ得ベシ。殊ニ各個ノ場合ニ關シテ法律ヲ設ルノ慣例アル英國ノ如キハ、此第二ノ制定方ニ依レルモノナリ。卽チ英國ノ法律ニ於テ往々本來ノ處罰（ペナリナー）ノ外禁制シタル現狀ノ繼續スル間ノ爲ニ過怠金（ファイン）ノ定アルハ卽チ強制方（強制處罰）ト同一物ナリ。

今ヤ本來ノ處罰ト強制方トノ區別ヲ設ケントスルトキハ左ノ如シ（第一）本來ノ處罰ニ違法ノ罪過ヲ消滅スルガ故ニ、其事處罰ト共ニ終ヲ告グト雖モ、強制方ノ適用ハ行政上ノ目的ヲ有スルガ故ニ、此目的ヲ達スルマデハ繼續スルヲ得ベシ（第二）本來ノ處罰ハ法律ノ正條ニ依ルベキニ、強制方ハ其場合ニ從ヒテ之ヲ撰取スルヲ得ベシ（第三）本來ノ處罰ハ裁判官ノ判決ニ依テ宣告スベキニ、強制方ハ之ニ反シ純然タル行政上ノ處分タリ。（第四）本來ノ處罰宣告ニ對シテハ裁判官ニ控訴スルヲ得ルモ、強制方ニ對シテハ行政廳ニ訴願スルヲ得ルノミ。何トナレバ強制方ノ宣告執行スルノ權ヲ爭フ場合ニ於テハ、本來ノ處罰ニ關スル如ク犯人果シテ或ル違法ノ行ヲナシタルヤヲ審査スルノ必要アルノミナラズ、又官廳ニ於テ義務者ニ或ル行爲ヲ命ズル法律上ノ權アルヤヲ審査スルノ必要アルモノニシテ、是レ裁判所ニ於テセズ、行政廳ニ於テ裁決スベキ純然タル行政上ノ問題ナレバナリ。

前ノ區別ニ關シテ一例ヲ擧ゲンニ、千八百六十九年ノ獨逸營業規則第百四十七條ニ依レバ、官ノ許可ヲ受クベキ營業場ニシテ許可ヲ受ケズシテ設立シタル者ハ百ターレル以下ノ罰金ニ處セラルヽモノニシテ、此處罰ハ裁判所之ヲ宣告ス。然レドモ警察廳ハ斯ノ如キ營業場ノ取毀ヲ命ジ、其命ニ從ハザルトキハ強制方ヲ施スヲ得ベシ。而シテ此處分タル純然タル行政上ノ事件ナリ。若シ此場合ニ際シテ必本來ノ處罰ヲ行ハントスルニ於テハ、其結果ハ却テ行政上ノ目的ヲ達スルコト能ハザルノミナラズ、行政廳ハ其法律上ノ職權ヲ執行スルニ際シ、獨斷決行ノ途ヲ失フニ至ルベシ。何トナレバ事件ノ起ル每ニ裁判所ノ判定ニ任ゼザルベカラザレバナリ。又強制方ヲ直接ニ施スハ純然タル處罰ニ於テモ其必要トナルモノニアラズ、故ニ獨逸ノ強制方ハ先ヅ強制處罰ヲ宣告シ、義務者ノ費用ヲ以テシ、直ニ他人ニ決行セシメザルコト往々之アルノ點ヨリ論ズレバ便宜ニシテ效驗アルノミナラズ又寬大ナルモノヽ如シ。

以上論ズル所ニ依レバ憲法ノ主義ニ於テ元來ノ處罰ト強制方トヲ區別スルノ必要アリトス。純然タル行政上ノ強制方ヲ施行スル一般ノ必要ハ既ニ論述セシ如ク、第一ニハ單一ナル處罰ノミヲ以テハ行政廳ノ達セントスル法律上ノ目的ヲ達スルコト能ハザルコト、第二ニハ本來ノ處罰ヲ施スヲ得ザル場合卽チ刑律ヲ以テ論ズベキ行爲ニ關セズシテ、單ニ公共ニ有害又危險ナル現狀

ヲ排除スベキ場合（有害ナル不潔物ヲ排除スル如キ是ナリ）ニ於テモ亦能ク之ヲ施行スルヲ得ベシ。何トナレバ警察上禁制スル所ノ百事ニ對シ、毎ニ本來ノ處罰ヲ施スハ其必要ナケレバナリ。蓋シ臣民タル者ハ官ノ正當ナル命令ニ服從スベク、而シテ國ノ威權ヲシテ地ニ落チザラシムル爲メ、其命令ニ強服セシメザルベカラザルノ必要アルニ際シ、強制方ヲ施スニ於テ何ゾ憲法ノ主義ニ矛盾スルノ理アランヤ。

千八百八十七年十一月十日

問

國家急迫非常ノ場合ニ於テ、國民ノ權利ヲ一時停止スルハ不得已ノ必要ニ由ル者ナリ。但或ハ法律ヲ以テシ、或ハ戒嚴ノ公告ヲ以テシ、或ハ內閣ノ責任ヲ負ハシメタル行政處分ヲ以テスルハ各國ノ憲法ニ於テ各々殊異ナル所ナリ。

戒嚴ノ公告ト竝ニ內閣ノ責任ヲ負ハシメタル行政處分トハ均シク皆君主ノ大權（レギールングスレット）ヨリ生ズル

リヨースレル 再拜

者ナレバ、寧ロ君主ノ大權ヲ以テ憲法上ノ國民權利ヲ停止スト云フ立言直截ニシテ且明白ナルガ如シ。

但シ此ニ一ツノ注意ヲ要スル點アリ、君權ト民權トヲシテ直接ニ消極（ネガチフ）ノ作用ヲナサシムルハ危險ナル反動ヲ引起スノ道ニ近シ。故ニ裁判ニ於テ均シク君權ヨリ出ルノ事ナルモ刑罰ノ處分ハ之ヲ裁判官ニ委ネ宣告セシメ、而シテ赦免ノ權ヲ以テ之ヲ直接ナル君主ノ特權トハナシタリ。此ノ例ニ依ルトキハ國民權停止ノ處分モ寧ロ之ヲ內閣ニ委ネ、而シテ直接ニ君主權ノ施行ニ屬セザルコト尤穩當ナルガ如シ。此件ニ付更ニ貴下ノ明教ヲ煩ス。

明治二十年十一月

モツセー氏答議

本月十七日附貴書ヲ拜讀ス、貴書中登載ノ意見ハ余ノ悉ク贊成スル所ナリ。

前ニ戒嚴令發布ノ事ニ關シテ愚見ヲ陳述セシ際、該令發布ノ權ハ皇帝ノ特權ト稱シテ不可ナル

十月、十一月間ロエスレル氏答議

コトナキ旨答ヘタルハ、畢竟此發布ヲナスニ國會ノ參同ヲ除キ、其權ヲ單ニ行政權ニ委任スルノ精神ニ起由スル義ナリ。然レドモ余ハ此權ヲ皇帝ノ特權ナリト憲法ニ明記セントノ考案アルコト無シ。此點ニ關シテハ貴下ノ意見ヲ贊成シ、卽チ孛國憲法第三章ニ於ケルガ如ク國王ガ憲法ノ條則ヲ停止スルノ許否ヲ全ク揭載セザル方皇帝ノ權利ヲ保全スル義ト信ズ。西班牙憲法第十七條、葡萄憲法第百四十五條及第三十四條セルビヤ憲法第三十八條ニ於テハ單ニ「政府」ト記スルノミニテ國王ノ二字ヲ用ヒズ、又孛國千八百五十一年六月四日ノ法律ニ略ボ相同ジキ貴案卽チ戒嚴令ノ發布及憲法上ノ權利停止ヲ內閣ニ於テ爲サシムトノ考案ハ、學理上ヨリ之ヲ觀ルモ實際ノ利害ニ照スモ寔ニ國家及君主ノ爲ニ利益アリトシ予ニ於テ非難スル所無シ。

然レドモ戒嚴令ヲ布クニ內閣ノ「決議」ヲ以テスルトカ、或ハ內閣ノ「決議ニ依ル」トカノ語句ヲ用ヒザルヲ善トス。若シ斯ル語句ヲ用ユルトキハ左ニ揭グル兩樣ノ誤謬ヲ引起スニ至ルベシ。

第一　內閣ノ多數議ヲ以テ戒嚴令ヲ發シ得ル事。

第二　勅意ノアル所ヲ問ハズシテ戒嚴令ノ發布ヲナシ又ハ發布ノ議ヲ拒ム事。

此二樣ノ場合ハ共ニ穩當ナラズトス。

第一ノ場合ハ內閣責任ノ原則ニ稱ハズ。

第二ノ場合ハ君主政體ノ本義ニ戻ル。

蓋シ戒嚴令ナルモノハ國家危急ノ事變アルニ當リ、始メテ其發布ヲ要スルモノニシテ、之ヲ發布スルト否トハ本ト法律上ノ問題ニアラズ。畢竟實際便宜上ノ問題ナリトス。故ニ一方ニ於テ其決議ヲ內閣大臣ノ議ニ偏任シ、一方ニ於テ君主ノ勅意ヲ曲グルコトアルベカラズ。此時ニ當リテ內閣大臣ハ一ニ勅意ヲ遵奉シ、自己ノ責任ヲ以テ勅意ノ如ク實踐スベキナリ。若然ラザレバ辭職スルノ一途アル而已、而シテ君主ガ戒嚴令ノ發布ヲ決裁スルニ當リ、之ガ責任ヲ負フベキモノハ一二ノ大臣ニアラズシテ內閣全體ナルニヨリ、此點ニ於テ君主ハ制限ヲ受クル者トシ、而シテ其制限ハ通常ノモノヨリ稍々重シトス。之ヲ要スルニ戒嚴令ハ君主ノ制可ナクシテ發布シ得ベカラザルモノニシテ、而シテ君主ニ抗爭シテ辭職スル大臣アルニモ拘ラズ、尙其欲スル所ヲ貫ヌクコトヲ得ベク、此場合ニ於テ君主ハ他ニ其責ニ當ルベキ大臣ヲ得テ之ヲ實踐セシムベキコト言ヲ俟ザルナリ。凡ソ此等ノ事ハ都テ憲法ニ揭載スルノ必要無シ。是レ蓋シ一切ノ政權ヲ君主ノ身ニ總攬シ、一定ノ方向ニ於テ其施用ヲ制限スル君主政體ノ最上原則ヨリ推シテ固ヨリ當ニ然ルベキ事ナレバナリ。又君主ガ非常戒嚴ノ場合ヲ確定セラルルノ權ハ、外ニ向テ顯露セシメザルヲ以テ政治上得策トスルノ事モ余ハ貴下ト同案ナリ。サリナガラ君主ガ政權ヲ總攬セラルヽハ國步艱難ノ時ニ於テ最モ必要ノモノニシテ、戒嚴令發布ノ權ヲ憲法ニ明記シ、以テ君主ノ政權ヲ制限スル如

キ事無キヲ要ス、此義ハ注意ノ爲ニ一言ス。

右ニヨリ孛國憲法第三章ニ於テモ、千八百五十一年六月四日ノ法律ニ於テモ、余ハ前文ニ於テ危險ト看做シタル語句ヲバ故ラニ避ケテ採用セザリキ。憲法第三章ニ於テハ單ニ憲法上ノ權利ノ停止ノミヲ掲ゲ又法律第二條ニ於テハ左ノ如ク明記セリ。

「戒嚴令ノ布告ハ內閣ヨリ發スベシ」

斯ノ如クナルトキハ君主ノ權利安全鞏固トナリ、外ニ向テ顯露スルノ憂無カルベシ。余ハ此例ニ依リテ左ノ如ク明記スベシト信ズ。

「、、、、、、、、、、」ノ場合ニ於テハ全國又ハ其一部ニ向テ憲法、、、、、、、條ヲ無效トナスコトアルベシ。

其無效ノ布告ハ內閣ヨリ之ヲ發ス。

千八百八十七年十一月二十日

モ ス セ 記

答

戒嚴ヲ宣告スルトキハ執行權ハ轉ジテ軍事廳ニ移リ、又或ル犯罪ハ普通人ノ犯シタル場合ト雖軍事法院ニ於テ之ヲ裁判スルノ結果ヲ生ズ。人或ハ普通ノ主義ニ依リ斯ノ如キ重大ナル規定ニ付現狀ノ變更ハ法律ヲ以テセザルベカラズトノ說ヲ爲スヲ得ベシ。而シテ此主義ハ現ニ英國ニ行ハルヽモノニシテ、議院ハ其場合ニ臨時戒嚴宣告ノ權ヲ委任ス。加之白國ニ於テハ戒嚴ノ宣告ヲ許サズ。實際合圍ノ地ニ於テハ戰爭ノ規律ニ從ヒ戰權ノ執行ヲ許スノミ。而シテ此主義亦全ク理由ナキモノニ非ズ。

第三ノ主義ハ戒嚴ヲ宣告スル實際上ノ必要ヨリ生ズルモノナリ。卽チ或ハ事至急ヲ要シ、或ハ行政上ノ反對アルガ爲メ立法ノ常途ノミヲ以テハ足ラザル所アリ、而シテ公然ノ秩序及安全ヲ維持スル爲メ、非常ノ權力ヲ以テ一ニ之ヲ行政官廳ニ歸セザルベカラザル一般危急ノ場合ヨリ生ズルモノナリ。蓋此主義ハ佛國及獨逸帝國ニ行ハルモノニシテ、此兩國ハ戒嚴宣告ノ權ヲ以テ執行權ニ屬セシム。又孛國ニ於テモ執行權ハ憲法第百十一條ニ依リ此權ヲ有スト雖、之ヲ執行スルニハ必ズ法律上ノ規定ニ服從セザルベカラザルナリ。然レドモ孛國王ハ千八百四十九年ヲ以テ戒嚴宣告ニ關スル勅令ヲ公布シ、其後千八百八十一年ニ至リ法律ヲ發シテ之ニ代ヘタリ。

今日日本ニ於テ戒嚴ノ事ヲ掲載セザルトキハ、其結果タル戒嚴宣告ノ權ハ自然ニ執行權ニ歸スルモノニ非ザルガ故、普通ノモノト各個ノ場合ニ係ルモノナルトヲ問ハズ、必ズ法律ヲ以テ其事ヲ明言スルノ必要ヲ生ズルニ在リ。而シテ此法律ハ或ハ議院ノ否議スル所タルヤ知ルベカラザルナリ。若シ之ニ反シ憲法ニ於テ此權ニシテ執行權ニ歸スルコトヲ明言スルトキハ、議院ノ承諾ヲ受クルヲ要セズシテ、主權者ハ任意ニ之ヲ執行スルヲ得ベシ。而シテ主權者ハ獨逸帝國ニ於ケル如ク、其場合ニ際シ時々此權ヲ行フモ亦普通ノ勅令ヲ以テスルモ妨ゲナキナリ。但普通ノ勅令ニハ戒嚴ノ方法效力及要件ハ勿論、各場合ニ於テ其處分ヲ行フ所ノ軍事廳及行政廳ヲ一定スベキノミ。

余ハ此第三主義ヲ最モ便宜ニ適スルモノトス。又余ハ平時内亂ノ場合ニ於テ戒嚴宣告ノ權ヲ内閣ニ委任スルモノトセズ、必ズヤ勅令ニ定ムル範圍内ニ於テ執行セシムベキナリ。又戰時ハ勿論平時ニ於テモ軍事廳ニ此權ヲ有セシムルノ例外ヲ設クルノ必要アリ。蓋シ憲法ハ此權ノ細目ヲ定ムベキニ非ザルガ故、余ガ所見ニ依レバ此權ハ主權者ノ保有スル執行權ノ一タルコトヲ明言スルヲ以テ定レリトス。

千八百八十七年十一月廿四日

リヨースレル

問

普憲五十一條、五十二條ハ兩議院ヲ召集シ及閉會ヲ命ズルコトヲ掲ゲ、又議院ヲ解散シ及停會シ能フコトヲ掲ゲタリ。

此ノ招集及閉院及解散停會ハ皆上諭（フキクライーション）ヲ以テスルカ又ハ單純ナル王命（オルドノンク）ノ式ヲ以テスルカ？

而シテ其文式（ホルマルチー）ハ如何、乞教。

又普國ニテハ停會（フロッグエ）ノ爲ニ英國ノ如ク議事ノ繼續ヲ截斷スルコトナク、更ニ開會ノ節ニハ仍前議事ヲ嗣續スト聞ク、果シテ然ラバ停會ハ休會ト差別ナク、而シテ憲法ニ掲ゲテ王ノ特權トナス迄ノ要用（イムポルテント）ナキニ似タリ。如何。

答

（第一）孛國及獨逸帝國ニ於テ議院ノ召集ハ王（帝）命ヲ以テス。其王命ニハ宰相副署シ之ヲ法令全書ニ掲載シテ公布ス。

十月、十一月間ロエスレル氏答議

此議院召集令ニハ議員參會ノ時日場所ヲ明記スルモノトス。

議院召集令ノ文式左ノ如シ。

朕ウヰルヘルム、、、、、、、、、、ハ憲法第、、、、條ニ依リ命令スルコト左ノ如シ。

兩議院（國會）ハ、、、、、、、、、、、、日ヲ以テ伯林府ニ參會スベシ。

本令ノ實施（又ハ本令實施ノ目的ニ必要ナル準備）ハ之ヲ內閣（大宰相）ニ委任ス。

巴威里亞國ニ於テハ王命ノ代リニ「告示」（ベカントマッヒ ユング）ナル語ヲ用ヒ且ツ左ノ書式ニ依ル。

議院ノ召集ニ關スル告示

ルードウヰヒ、、、、、、、、、

朕ハ、、、、、月曜日ヲ以テ議院ヲ召集スルコトノ決ヲ取リタリ。依テ朕ハ朕ノ郡長ニ命ジ凡ソ郡內ニ於テ下院議員ノ職ニ在ル者ニ此告示ノ寫書ヲ送達シ、以テ當日朕ノ首都ニ參會セシム。

議院開場ノ手續及其樣式ハ議員到着ノ上申アルヲ俟チテ之ヲ告示スベシ。

議院ノ閉會、解散、延會、停會ハ孛國ニ於テハ大臣一名若クハ內閣總體ノ副署アル王命ヲ以テ公布ス。但シ議院開會中ナレバ公布式ヲ用ヒズシテ唯內閣中ノ一大臣ヲシテ議場ニ報告セシムルノミ。

巴威里亞ニ於テハ王命ニ代ヘテ勅裁ナル語ヲ用ヒ、之ヲ兩院ニ達スルニ同一ノ書式ヲ以テシ、

且ツ內閣諸大臣ノ副署アルヲ要シ、竝ニ法令全書ニ揭載シテ全國ニ公布ス、例バ左ノ如シ。

議院ノ停會ニ關スル勅裁

ルードウヰヒ、、、、、、、、、

朕ノ忠實ナル代議士ヨ

朕ハ現今開會中ノ議院ヲ憲法第七章第二十三條ニ依リ、、、、、、、、、日マデ停會セント欲ス

朕此ノ停會ヲ命ズルモ誠懇一慈愛ノ君德ヲ守ルニ於テ舊ニ替ハルコトナシ。

記名、、、、、、

貴族院及代議士院ヘ

（第二）議院ノ停會ハ君主ノ主權ヨリ出ル所ノ事件ナレバ、之ヲ單ニ議院ニ通知シテ足レルモノトス。而シテ議院ハ之ヲ議スルノ權モナク又異議ヲ容ルヽノ權モナシトス。

會議ヲ甲ノ日ヨリ乙ノ日ニ遷スコトハ議事規則ニ屬スルモノナレバ、之ヲ決スルハ議長ノ權內ニアリ、斯ノ如キ會議中止ハ國法上ノ意義ナキモノトス。

孛國ノ例ヲ擧ゲテ言ヘバ議長ハ各會議ノ終リニ臨ミ、次會ノ時日ト議題トヲ議員ニ報告ス、議員ハ之ニ對シテ異議ヲ起スコトヲ得、而シテ異議ノ起ル場合ニ於テハ總會議ニ於テ之ヲ議決セザルベカラズ。斯クシテ確定シタル議題ハ之ヲ印刷シテ各議員及各大臣ニ配付ス。

右ニ述ベタル院則ハ豫メ議事規則中ニ定メ置クモノナリ。

巴威里亞ニ於テハ議事及議題ハ院則ニ依リ議長之ヲ決定シ議員ヲシテ異議ヲ起スノ權ヲ有セシメズ。

右二樣ノ場合ハ區別甚ダ明カニシテ之ヲ約言スレバ左ノ如シ。

(一) 停會ノ場合ニ於テハ內閣大臣議場ニ於テ王命ヲ宣讀ス、是ニ於テ議院ノ事務ハ再ビ開會ニ至ルマデ終結スルモノトス。

(二) 單ニ日限ヲ延スノ場合ニ於テハ、議長ガ某日ニ會議ヲ開ク旨ヲ報告スルノミ。然レドモ其會議ヲ開クマデノ間ニ於テ院務ハ依然トシテ其職ヲ執リ之ヲ中止スルコトナシ。

千八百八十七年十二月七日

問

勅令ハ或國ノ憲法ニ從ヘバ專ラ法律ヲ施行スルガ爲ニ發スル者タリ。然ルニ近時獨逸學者ノ說

ハー、ロエスレル記

ニ於テハ此ノ解義ヲ排斥シテ君權ヲ減削スル者トナシタリ。

勅令ハ國ノ安寧秩序ヲ維持スル爲ニ發スル者トシテ解釋スルハ普通ノ定說ナルガ如シ。

今更ニ一步ヲ進メテ國ノ安寧又ハ人民ノ幸福ヲ維持スル爲ニ勅令ヲ發スト迄ニ推擴スルコトヲ得ベキヤ、如此釋義ハ憲法ノ元則ニ反對セザルコトヲ得ルヤ、乞敎。

答

貴問ニ列記スル所ニ依レバ所謂危急ノ場合ニ於ケル勅令卽チ臨時ノ法律ヲ除ク外勅令ヲ分ツテ左ノ三種ト爲スヲ得ベシ。

(一) 法律ノ執行ヲ細定スル勅令卽チ執行令

(二) 國家ノ安全又ハ臣民ノ生命健全若クハ財產ニ關スル危險及公共ノ弊害ヲ除去スル爲メノ勅令卽チ警察令

(三) 國家ノ幸福及公共ノ利益ヲ增進スル爲メノ勅令卽チ行政令是ナリ。

獨逸國ニ於テハ國權ハ上記ノ三事件ニ關シ命令ヲ發スルノ權ヲ有スルコト一般ニ是認セラルヽ所ニシテ、タダ或ル制限及要件ニ服從スベキノミ。

孛國ニ關スル「リヨンネ」氏（孛國々法論第一卷第九十條）ノ說ニ曰ク、孛國憲法ニ依レバ政

府ハ單ニ執行令ヲ發スルヲ得ルノミナリト、然レドモ是レ政府ノ承認スル所ナリ。而シテ政府ハ單ニ執行令ヲ發スルヲ得ルノ外尚ホ國王ノ執行權ヲリ生ズル百種ノ權ヲ施行スル爲メノ命令ヲ發スルヲ得ベシト主張ス。「リヨンネ」氏又曰ク、國權ハ警察令ヲ發スルヲ得ベシト、但新定行政法ニ依レバ行政廳ハ該法ニ定メタル處罰ヲ限トシ、警察令ヲ發スルノ權アルノミ。「リヨンネ」氏又曰ク、國權ハ國民ノ權利ニ干涉セズ又現行ノ法律ヲ變更セズ、及國民ニ對シ負擔ヲ新設セズ、單ニ行政上ノ事件ニ關スル普通ノ命令ヲ發スルノ權ヲ有スト、（同氏孛國々法編第一卷第九十二條）是レ則チ上記ノ行政令ニ外ナラズシテ、法律ヲ以テ別ニ之ヲ制限スルモノノ外法律ニ抵觸スベカラザルハ勿論、又立法權ノ區域ニ屬スル事件ニ干涉スベカラザルノ制限ヲ設クベキノミ。

巴威爾國ニ關シ「ピヨーツル」氏（巴國々法論第百六十三條）ノ論ズル所殆ンド以上ノ論旨ニ異ルコトナシ。

（一）現行ノ法律ヲ執行スル爲メノ勅令ニシテ法律ヲ施行スルニ必要ナル制度ヲ設ケ、或ハ其施行ニ關スル處務方法ヲ定ムルモノ。

（二）國家ノ安全又ハ國民ノ生命健全、若クハ財產ニ關スル切迫ノ危險ヲ除去スルタメノ警察令、但三百「フロン」ノ罰金又ハ三十日ノ拘留ヲ限トシ、而シテ後日國會ノ承認ヲ經ベキノミ。

（三）行政令ニシテ憲法上議院ノ權限ニ屬セザル諸般ノ事件ヲ規定スルモノ是ナリ。

余ハ「グナイスト」氏及「スタイン」氏モ亦法律ヲ以テ規定セザル百般ノ事件ニ關スル命令權ハ國權ニ歸スルノ說ヲ爲ス者ナリト信ズ。

又余ハ斯ノ如キ命令權ハ憲法ヨリ生ズルモノナリト信ズ。何トナレバ國君ハ一切ノ國權ヲ總攬シ、議院ノ承認ニ檢束セラレザル限リハ任意ニテ之ヲ決行スベク、又執行權ニシテ國王ニ歸スルトキニ於テモ國家ノ實際及需求上之ヲ法律ノ執行ニ限定スルコト能ハザレバナリ。

蓋此事ニ關シテ注目スベキハ立法權ノ區域如何ニ在リト雖モ、此亦元來一定不動ノ主義ヲ有スルモノニ非ズシテ、各國立憲制ノ進歩ニ準ジテ異同アルヲ免レズ。而シテ余ハ既ニ他ノ問題ニ於テ數回所見ヲ陳述シタリ。

千八百八十七年十二月八日

リヨースレル 再拜

國民身分法

井上毅 試案

第一章　國民身分ヲ得又ハ失フ事

第一條　左ニ擧グル者ヲ以テ出生ニ因リ日本國民ノ身分ヲ得又ハ失フ事

△一、日本國ノ內外ニ於テ生ジタルニ拘ラズ、日本人ノ子。

△二、外國人ノ子ニシテ日本國內ニ生レタル者滿二十一ノ年內ニ日本國民タルベキノ請願ヲ日本政府ニ告白シ、其住所ヲ日本國內ニ定ムル者又ハ兵役ニ服スルノ義務ヲ充タス者。

△三、其母日本人ナル所ノ私生ノ子其父タル外國人ノ公認ヲ經ザル者。

△四、其母外國人ナル所ノ私生ノ子其父タル日本人ノ公認ヲ經タル者。

第二條　外國人ニシテ日本國民ノ身分ヲ得ル者ハ左ノ如シ。

△一、歸化シタル外國人。

△二、日本人ニ嫁シタル外國ノ婦女。

第三條　左ニ擧グル者ハ日本國民タルノ權利ヲ失フ。

△一、外國ニ歸化シタル者。

△二、日本政府ノ許可ヲ經ズシテ外國ニ仕官シ又ハ恩給ヲ受ケタル者。

△三、日本政府ノ許可ヲ經ズシテ外國ノ兵役ニ從事シ又ハ兵社ニ加入シタル者。

△四、外國ニ滯在スル日本國民ニシテ戰時又ハ戰機急迫ノ時ニ當リ日本政府ヨリ國內ニ公布シタル命令ニ遵ヒ期限內ニ歸國セザル者。

△五、外國人ニ嫁シタル日本ノ婦女。

△六、其母日本人ナルモ其父外國人ナル私生ノ子ニシテ父ノ公認ヲ經タル者。

第二章　歸化大歸化及復籍

第四條　外國人日本國ニ滿五年ノ間住居ヲ定メタル者ハ日本政府ニ歸化ノ願ヲ呈スルコトヲ得。

第五條　日本國ノ爲ニ功勞アル外國人ハ滿三年ノ間住居ノ後、歸化ノ願ヲ呈出スルコトヲ得。

工業又ハ有益ノ發明ヲ日本國ニ傳ヘ又ハ農工技術ニ付著シキ效益ヲ與ヘタル者ハ本條ノ例ニ依ルコトヲ得。

第六條　歸化ノ願書ニハ左ノ各項ヲ記載スベシ。

一歳ノ年。内ト限ルノ必要アランヤ如何

一、身分ノ詳細及職業。

二、住居又ハ功勞ノ證據。

住居ハ繼續スルコトヲ要スル乎將タ絶斷スルモ年限ニ滿レバ許可スルノ意乎

三、日本國ニ住居シ又ハ駐在シタル以來日本國ノ法律ヲ循守シ其安寧ヲ妨害セズ又ハ妨害スルコトヲ希圖セザリシ事。（米二千百六十五條第三款）

四、其生國ノ法律ニ於テ丁年ニ達シ及治産ノ能力ヲ失ハザリシ事。（獨第八條）

五、履歷ニ闕失ナキ事。（同上）

六、獨立ノ生活ヲ有ツノ力アル事。（同上）

七、日本國ノ臣民トシテ憲法及法律ヲ遵守シ義務ニ服從スベキノ情願。（英第九條米二千百六十五條第一第二款）

八、從前所屬ノ國ノ臣民タル關係ヲ絶チ又ハ其國ノ官吏及貴族タル地位ヲ拋棄スル事。（米二千百六十五條瑞千八百四十八年憲四十三條）

第七條　歸化ノ願書ハ之ヲ現住地ノ地方長官ニ當テ呈出スベシ。地方長官ハ意見ヲ附シテ司法大臣ニ進達シ司法大臣ハ願書ヲ審査シタル上公共ノ利害ヲ商量シ更ニ內閣ノ議ヲ經歸化證狀ヲ下附スベシ。

歸化證狀ハ之ヲ官報ニ揭載ス。

第八條　歸化ノ願ヲ許可シ又ハ許可セザル爲ニ理由ヲ附スルヲ要セズ、竝ニ其指令ニ對シ控告スルコトヲ得ズ。

第九條　歸化證狀ヲ得タル者ハ日本國民ニ屬シタル一般ノ民權ト及第十四條ニ揭ゲタル例外ヲ除キ諸般ノ公權トヲ得有シ兵役及其他各般ノ義務ニ服從スベシ。

第十條　歸化證狀ヲ附シタル者ハ從前所屬ノ國ノ除籍證ヲ有セザルモ日本政府ハ總テ其外國ノ關係及位地ヲ二重ニ有スルコトヲ認メズ。

第十一條　滿二十一歳以上ノ男子ノ外國人日本國ノ兵役ニ服シタル者ハ其日本ニ住居ヲ定メタルノ後第四第五條ノ要件ニ依ラズシテ單一ナル情願ニ由リ歸化證狀ヲ下附スルコトヲ得。（米二千百六十六條）

兵戰ノ場合ニ於テ軍部ニ勤務シ、製造運輸看護等ノ事ニ力ヲ盡シタル者ハ現ニ兵役ニ服シタル者ニ准ズルコトヲ得。（佛千八百七十年十一月十九日法第一條）

第十二條　日本政府ノ官吏ニ任用シタル外國人ハ任用狀又ハ認可狀ヲ以テ歸化證狀ニ代ヘ、其任用ノ間歸化ノ臣民ト看做シ第九條ニ依リ權利及義務ヲ有セシムベシ。（獨國民籍法第九條瓦憲十九條）

但領事又ハ公使館領事館ノ書記官翻譯官又ハ稅關官吏及學術教育技術工藝ノ爲ニ任用シタル者ハ誠實ニ勤仕スルノ契約ヲナサシメ、歸化國民タルノ權義ヲ免ルヽコトヲ任用狀ニ記載スルコトヲ得、但其歸化國民タルコトヲ願フ者ハ前項ニ依ル。（和蘭千八百五十八年六月四日勅令）

第十三條　陸海軍ニ任用シタル外國人ハ前條第二項ノ例ニ依ルコトヲ得。

第十四條　歸化證狀ヲ得タル後滿十年ヲ經タル者ハ又ハ日本國ノ爲メニ著明ノ功勞アル者ハ更ニ大歸化證狀ヲ受クルノ願ヲ呈出スルコトヲ得。

大歸化ノ願書ヲ呈出シ及下附スルノ手續ハ第七條ニ同ジ。

大歸化證狀ヲ受ケタル者ニ非ザレバ兩議院ノ議員ニ任命又ハ選擧サレヽ、內閣大臣竝ニ大臣ニ准ズル高等親任官及陸海軍指令官ニ任ゼラルヽコトヲ得ズ。（巴威爾憲法四條、葡憲百六條百八條白憲五條及八十六條）

大歸化證狀ヲ受ケタルノ利益ハ其子孫ニ及ブベシ。（白千八百三十五年九月二十七日法第四條）

第十五條　日本國ノ爲ニ特別ノ武功アル者ハ前條ノ例ニ依ラズ、兩議院ノ認可ヲ經テ特ニ指令官ニ任ゼラルヽコトヲ得。

武功アル者ヲ指令官ニスルハ皇帝ノ權トナシ議院ノ認可ハ刪リタシ

第十六條　第四第五第十四條ニ載セタル期限ノ間、若日本國ヲ離ルヽコト一年以上ニ滿ルトキハ其離レタル間ノ年期ヲ控除シテ通算スベシ。

但日本政府ノ職務ヲ行フ爲ニ外國ニ在ル者ハ日本國ニ住居スルト同ジク看ル。

第十七條　歸化ノ願ヲ呈出シテ許可ヲ得ザリシ外國人ハ其後在留スルコト滿一年ニシテ再ビ其願ヲ呈出スルコトヲ得。

其大歸化ノ願ニ於テモ亦之ニ同ジ。

第十八條　日本國民ニシテ外國ニ歸化シタル者ハ再ビ日本國ニ在留スル年限如何ヲ問ハズ、單ニ其居住ヲ定メタルノミニテ第四條ノ要件ニ從ヒ日本國民タルノ復籍證狀ヲ下附セラルヽコトヲ出願スルコトヲ得、但シ復籍ヲ願フ者ハ其一旦歸化シタル國ノ臣民タル關係ヲ斷絶セシ證憑ヲ具フルコトヲ要ス。（英第八條）

復籍證狀ヲ得タル者ハ其證狀ノ日限ヨリ日本臣民タルノ位地ヲ復スベシ。（同上）

第十九條　第三條ノ第二第三第四項ノ場合ニ因リ日本國民タルノ資格ヲ失ヒタル者ハ正當ナル辯明ヲ爲シ能ヒシ後ニ非ザレバ復籍ヲ與ヘズ。

第二十條　歸化ノ許可ハ其婦及未丁年ノ子ニ及ブ者トス故ニ歸化ノ願書ニハ其婦及子ノ有無竝ニ子ノ丁年又ハ未丁年ナルコトヲ明記スベシ。（獨十一條）

第二十一條　夫ト共ニ歸化ヲ得タル婦女離婚スルコトアルモ又ハ寡婦トナルモ歸化ノ效力ハ消滅セズ。

但書可修正

第十條外國人ニハ除籍ヲ要セズ其關係ヲ絶ツトアリテ本條ニハ其證憑ヲ要ストアリ然レドモ均シク是レ外國人ナリ（假令ヒ日本ノ外ニ歸化セシモノニモセヨ）何ゾ法律上之ノ區別アルノ理由ナランヤ此等ノ區別ヲ設クルト外交上幾分キハ後日カ問題ヲ起スコトナカラン乎

第二十二條　父ト共ニ歸化シタル外國人ノ子ハ日本ノ民法ニ依リテ丁年ニ達シタルノ歳ニ於テ隨意ニ管轄官衙ニ告白シテ其原籍ニ復スルコトヲ得ベシ。

第二十三條　其父ノ歸化シタル後ニ生ジタル子ハ當然日本國民トス。

第二十四條　養子ハ日本國民タルノ身分ヲ得又ハ失フノ效力ヲ有セズ（獨第二條）但本法ニ揭ゲタル歸化ノ要件ヲ具ヘタル者ハ其現住地方長官ニ告白シタル情願ニ由リ歸化ノ手續ヲ經ズシテ日本國民タルノ身分ヲ得ベシ、養子トシテ日本國民タルノ身分ヲ得タル者第十四條ニ依リ大歸化證狀ヲ得ルニ非ザレバ仍完全ナル公權ヲ有セズ。

第三章　除籍

第二十五條　日本國民ニシテ外國ニ歸化シ、又ハ外國ニ居住シ、外國國民タルノ身分ヲ得タルコトヲ證明シ、地方長官ニ由テ除籍證狀ヲ請求スルトキハ司法大臣ヨリ之ヲ下付スベシ。（獨第十五條）

第二十六條　左ノ各項ニ觸ルヽ者ハ除籍ノ請求ヲ許可セズ。

△一、滿十七歳以上滿二十四歳以下常備兵役義務ヲ終ヘザル者但免役者ニシテ地方長官ノ證明ヲ得タルハ此例ニ在ラズ。

二、陸海軍常備隊ニ屬スル現職非職ノ軍人軍屬。

三、陸海軍豫備後備ニ屬スル現役ニ召集サレタル者。（獨十五條）

第二十七條　左ノ各項ニ觸ルヽ者ハ其事由ノ存スル間除籍ノ請求ヲ許可セズ。

一、現ニ負擔スル租稅ヲ完納セザル者。

二、現ニ裁判處分中及裁判執行中ニ在ル者。

第二十八條　除籍證狀ヲ受ケタル者ハ其證狀ヲ受ケタル日ヨリ日本國民タルノ身分ヲ離ルベシ（獨十八條）

第二十九條　戰時ニ當テハ除籍ヲ許サヾルノ閣令ヲ發スルコトヲ得。（獨十七條）

第三十條　除籍證狀ヲ受ケタル者其之ヲ受ケタル日ヨリ六個月以內ニ外國ニ轉住セザル者ハ除籍ノ效ナシ。

第三十一條　除籍ハ第二十六條ノ場合ヲ除ク外其婦及未丁年ノ子ニ及ブ者トス。（獨十九條）

但其子丁年ニ達シタルノ歳ヲ以テ日本ニ住居シタル後日本國民ニ復籍スルノ情願ヲ現住ノ地方長官ニ告白スルコトヲ得。

第三十二條　夫ト共ニ除籍シタル日本ノ婦女離婚スルコトアルカ又ハ寡婦トナリタルトキハ日本ニ住居シタル後日本國民ニ復籍スルノ情願ヲ現住ノ地方長官ニ告白スルコトヲ得。

第四章　附則

此條可修正

第三十三條　從前日本政府ニ直接又ハ間接ニ任用シタル所ノ外國人其契約期限アル者ハ期限ニ滿ル間本法ニ依ラズシテ從前ノ契約ニ依ルコトヲ得。其期限ナキ者ハ日本政府及其外國人トノ間ノ叶議スル所ニ從ヒ仍其契約ニ依ルコトヲ得。但進級加俸又ハ轉用スルトキハ總テ本法ノ定ムル所ニ依ルベシ。

第三十四條　從前竝將來トモ日本政府一時ノ雇ニシテ何時ニテモ解任スルコトヲ得ルノ外國人ハ本法ノ限外トス。

『本法ハ完備簡明敢テ間然スル所ナシ。只二三ノ愚見ヲ記シ、以テ御下問ノ責ニ充ツ、乞フ修正ノ參考ニ供セラレンコトヲ。又本法ハ各國其制ヲ異ニシ、外交上又ハ政治上常ニ紛雜ヲ極メ、歐米立法家ノ尤モ困難スル所ナリ。故ニ本邦ノ如キ國柄ニシテ之ヲ設クルトキニハ寧ロ完備ナランヨリハ外國政府ノ承諾スル事ニ注意スベシ。然ラバ則チ本法ヲ本トシ、各國ノ歸化法ヲ參照シ、可成施行シ能キ法律ヲ制定スルコソ今日ノ急務ナリ。然ラザレバ法律ハ善良ナルモ外國人之ヲ遵守セザルニ至ラン。獨リ遵守セザルノミナラズ、外國人ハ歸化スルモ其權利ノミ法律ニ依テ之ヲ得有シ、其義務ノ如キハ歐米未定ノ事件ト主唱シテ服從セザルニ至ラン。然ラバ則チ是レ條約文中ニアル最愛國（フエバード、ネイション）ノ字句ノ二ノ舞ヒヲ招クニ至ラン。且米國ノ如キ富强ノ大國ニシテ未墾地巨大ナレバ、歐洲各國ニ對シ如何樣ナル歸化法ヲ設クルモ各國ハ忍ンデ之ニ服從スルト雖ドモ本邦ノ如キハ此例ニアラズ。

乞叱正

金子堅太郎　再拜

原案

帝國臣民身分法

第一章　臣民身分ノ得有

第一條　左ニ揭グル者ハ出生ニ因リ日本臣民身分ヲ得有ス。

一、日本人ヲ父母トシ及日本人ヲ父トスル正出子。

二、日本人ヲ母トスル私出子。

三、外國人ヲ母トスル私出子ニシテ其ノ父タル日本人ノ認知ヲ受ケタル者。

四、日本帝國ノ領內ニ生シ父母共ニ知レザル者。

第二條　外國人ハ第二章ノ規定ニ從ヒ歸化ニ因リ日本臣民身分ヲ得有スルコトヲ得。

第三條　外國女ニシテ日本人ノ妻ト爲リタル者ハ當然日本臣民身分ヲ得有ス。

第四條　日本ニ歸化シタル者ノ妻及未成年ノ子ハ日本ニ住居スルニ於テハ日本臣民身分ヲ得有ス、但シ其ノ子ハ成年ノ後一個年內ニ第二十八條ノ申出ヲ爲スニ因リ外國ノ國民身分ヲ撰擇スルコトヲ得。

前項ノ規定ハ外國女ニシテ日本人ノ妻ト爲リタル者ノ子ニモ之ヲ適用ス。

第五條　左ニ揭グル者ハ日本ニ住居スルニ於テハ其ノ本國ノ法律ニ從ヒ成年ニ至リシ時ヨリ一個年內ニ第二十八條ノ申出ヲ爲スニ因リ日本臣民身分ヲ得有ス。

一、第一條ニ揭ゲタル日本人ニシテ其ノ親ノ身分ノ變更ニ因リ日本臣民身分ヲ失ヒタル者。

二、親ノ日本ニ歸化シタル時成年ナリシ外國人。

三、日本帝國ノ領內ニ生レタル外國人ノ子ニシテ又帝國ノ領內ニ生レタル者。

第六條　國民身分ナキ者ト婚姻シタル日本女ノ子及父母共ニ國民身分ナキ者ニシテ日本帝國ノ領內ニ生レタル者ハ日本臣民身分ヲ有ス。

第二章　歸化

第七條　左ノ條件ヲ具ヘタル外國人ハ日本帝國ニ歸化スルノ願書ヲ呈出スルコトヲ得。

一、本國ノ法律ニ依リ成年ニシテ治產ノ能力ヲ有スル事。

二、品行正シキ事。

三、獨立シテ生活スルノ資產又ハ技能アル事。

四、滿五個年日本ニ住居シタル事。

五、願書呈出ヨリ少クトモ二個年前ニ日本帝國ニ歸化セントスルノ意アルコトヲ其ノ住居地ノ身分取扱役場ニ屆出タル事。

第八條　有益ノ發明ヲ日本帝國ニ傳ヘタル者、又ハ農工技術ニ付著シキ效益ヲ日本帝國ニ起シタル者、其ノ他日本ノ爲ニ功勞アル者ハ第七條第四號及第五號ノ條件ヲ特免スルコトヲ得。

第九條　第七條第五號ニ依リ歸化セントスルノ意アルコトヲ屆出タル後未ダ歸化セズシテ死亡シタル者ノ妻子ハ日本帝國ニ住居スルニ於テハ其ノ屆出ヨリ二個年ノ後同條第一號乃至第四號ノ條件ヲ具フルトキハ歸化ノ願書ヲ呈出スルコトヲ得。

第十條　第七條第四號ニ記載セル期限ノ間ニ日本帝國ヲ離ルヽコト引續キ六ケ月以上ニ及ブトキハ其ノ離レタル年月ヲ控除シテ前後ノ年月ヲ通算ス、但シ日本政府ノ官用ノ爲ニ外國ニ在ル年月ハ之ヲ控除セズ。

第十一條　歸化ノ願書ニハ願人ノ國民身分氏名職業年齡住所ヲ記載シ、幷ニ第七條第八條第九條ニ揭ゲタル條件ノ證明ニ必要ナル文書ヲ添フルヲ要ス。

第十二條　歸化ノ願書ハ之ヲ現住地ノ地方長官ニ由リ司法大臣ニ呈出スベシ。司法大臣ハ願人ノ品行及其ノ他必要ナル事項ヲ取調ベ上奏シテ勅裁ヲ請フノ後、地方長官ヲ經テ歸化證ヲ付與スベシ。

第十三條　歸化人ハ歸化證ヲ受領スルノ日ニ於テ日本臣民タルノ義務ニ服從スルコトヲ宣言スベシ。

第十四條　歸化ノ願ヲ許サレザル者ハ願書ヲ却下セラレタル日ヨリ一個年以上日本帝國ニ住居スルニ非ザレバ再ビ歸化ノ願書ヲ呈出スルコトヲ得ズ。

第十五條　歸化證ニハ歸化者ト共ニ日本臣民身分ヲ得有スル者ヲ併記スベシ。

第十六條　外國人ニシテ日本ニ功勞アルニ由リ又ハ必要ニ由リ日本帝國內ニ於テ官吏ニ任用セラレントスル者ハ、樞密院ノ議ヲ經、勅裁ニ依リ前數條ノ規定ニ依ラズシテ特ニ歸化證ヲ付與スベシ。其歸化ヲ願ハザル者ハ官吏ニ任用スルコトヲ得ズ。

第十七條　左ニ揭グル外國人ハ日本ニ住居スルニ於テハ成年ノ後何時ニテモ第二十八條ノ申出ヲ爲スニ因リ日本官民身分ヲ得有ス。

一、日本ノ陸海軍役ニ服シタル者。

二、日本ノ徵兵ニ際シ外國ノ國民身分ヲ申立ザリシ者。

第十八條　第二條第四條第五條第二號第三號第六條第十七條ニ依リ日本臣民身分ヲ得有スル者ハ、其ノ身分ヲ得タル日ヨリ十個年ヲ經タル後特ニ帝國議會ノ承認ヲ得ルニ非ザレバ兩

院ノ議員國務大臣樞密顧問及陸海軍ノ將官ト爲ルコトヲ得ズ。

第三章　臣民身分ノ喪失

第十九條　左ニ揭グル者ハ當然日本臣民身分ヲ失フ。

一、外國人ノ妻ト爲リタル女及其ノ未成年ノ子、但シ當然其ノ夫ノ身分ニ從フトキ。

二、日本人ヲ母トスルノ私生子ニシテ其ノ父タル外國人ノ認知ヲ受ケタル者。

三、外國ニ歸化シタル者。

四、日本政府ノ許可ヲ得ズシテ外國ノ官ニ就キ又ハ恩給ヲ受ケ又ハ兵役ニ服シ又ハ軍隊ニ入リタル者。

五、戰時又ハ開戰セントスル時外國ニ滯在シ日本政府ノ公布シタル歸國ノ命令ニ從ヒ期限內ニ歸國セザル者。

第二十條　外國ニ歸化シタル者ノ妻及未成年ノ子ハ外國ニ住居スルニ於テハ日本臣民身分ヲ失フ。

第二十一條　歸國ノ意ナクシテ十個年間引續キ外國ニ住居スル日本人ハ其ノ臣民身分ヲ失フ、但シ每一年外國寄留ノ屆ヲ日本帝國ニ於ケル身分取扱役場ニ出シタル者ハ仍其ノ身分ヲ失ハズ。

前項ノ期限ハ未成年者ニ付テハ成年ニ達シタル日ヨリ、寄留ノ屆ヲ爲シタル者ニ付テハ役場ニ於テ其ノ屆書ヲ受ケタル日ノ翌年ヨリ之ヲ起算ス。

第二十二條　左ニ揭グル者ハ日本臣民身分ヲ失ハシメズ。

一、滿十七歲以上二十五歲以下ノ男子、但シ現役ヲ免ゼラレタル者ハ此ノ限ニ在ラズ。

二、官吏及陸海軍現役ノ軍人。

第二十三條　第一條ニ依リ日本帝國臣民身分ヲ有セシ者ハ一旦之ヲ失ヒタルモ第二十八條ノ申立ヲ爲シ、申出後一個年內ニ日本ニ歸國シテ住居ヲ定ムルニ因リ其ノ身分ヲ回復ス。

第二十四條　第十九條第四號第五號ニ因リ日本臣民身分ヲ失ヒタル者ハ正當ナル辯明ヲ爲サヾル間ハ身分ヲ回復スルコトヲ許サズ。

第二十五條　第二條第三條第四條第五條第六條第十六條第十七條ニ依リ日本臣民ト爲リタル後其身分ヲ失ヒタル者ハ更ニ歸化ノ手續ヲ爲スニ非ザレバ日本人ト爲ルコトヲ得ズ。

第四章　通則

第二十六條　日本臣民身分ヲ得有シ又ハ回復シタル者ハ外國ノ爵位官職及其他ノ位地ヲ保有セズ。

第二十七條　身分ヲ變更スルノ效力ハ既往ニ溯ラズ。

第二十八條　身分ノ選擇回復又ハ得有ニ關スル申出ハ日本ニ住居スル者ハ其ノ住居地ノ身分取扱役場外國ニ住居シ又ハ寄留スル者ハ日本ノ公使館又ハ領事館ニ之ヲ爲スベシ。

公正ノ法式ニ依リ委任ヲ爲シタル代理人ヲ以テ前項ノ申出ヲ爲スコトヲ得。

修正案

帝國臣民身分法

第一章　臣民身分ノ得有

第一條　左ニ揭グル者ハ出生ニ因リ日本臣民身分ヲ得有ス。

一、日本人ヲ父トスル正出子。

二、日本人ヲ母トスル私出子。

三、外國人ヲ母トスル私出子ニシテ其ノ父タル日本人ノ認知ヲ受ケタル者。

四、日本帝國ノ領內ニ生ジ父母共ニ知レザル者。

第二條　外國人ハ第二章ノ規定ニ從ヒ歸化ニ因リ日本臣民身分ヲ得有ス。

第三條　外國女ニシテ日本人ノ妻ト爲リタル者ハ當然日本臣民身分ヲ得有ス。

第四條　日本ニ歸化シタル者ノ妻及ビ未成年ノ子ハ反對ノ正條ナキ場合ニ於テハ日本臣民身分ヲ得有ス。但シ其ノ子ハ成年ノ後一個年內ニ第三十二條ノ申出ヲ爲スニ因リ外國ノ國民身分ヲ撰

擇スルコトヲ得。

前項ノ規定ハ外國女ニシテ日本人ノ妻ト爲リタル者ノ未成年ノ子ニモ之ヲ適用ス。

第五條　左ニ揭グル者ハ日本ニ住居スルニ於テハ其ノ本國ノ法律ニ從ヒ、成年ニ至リシ時ヨリ一個年內ニ第三十二條ノ申出ヲ爲スニ因リ日本臣民身分ヲ得有ス。

一、第一條ニ揭ゲタル日本人ニシテ其ノ親ノ身分ノ變更ニ因リ日本臣民身分ヲ失ヒタル者。

二、親ノ日本ニ歸化シタル時成年ナリシ外國人。

三、日本帝國ノ領內ニ生ジタル外國人ノ子ニシテ又帝國ノ領內ニ生ジタル者。

第六條　國民身分ナキ者ト婚姻シタル日本女ノ子及父母共ニ國民身分ナキ者ニシテ日本帝國ノ領內ニ生ジタル者ハ日本臣民身分ヲ有ス。

第二章　歸化

第七條　左ノ條件ヲ具ヘタル外國人ハ日本帝國ニ歸化スルノ願書ヲ呈出スルコトヲ得。

一、本國ノ法律ニ依リ成年ニシテ治產ノ能力ヲ有スル事、但シ未成年者ト雖其ノ父又ハ後見人ノ承諾ヲ得タル者ハ願書ヲ呈出スルコトヲ得

二、品行正シキ事。

三、獨立シテ生活スルノ資產又ハ技能アル事。

四、願書呈出前引續キ滿五個年日本ニ住居シ仍引續キ住居セントスル事。

五、願書呈出ヨリ少クトモ二個年前ニ日本帝國ニ歸化セントスルノ意アルコトヲ其ノ住居地ノ身分取扱役場ニ屆出タル事。

第八條　有益ノ發明ヲ日本帝國ニ傳ヘタル者、又ハ農工技術ニ付キ著シキ效益ヲ日本帝國ニ起シタル者、其他日本ノ爲ニ功勞アル者ハ第七條第四號及第五號ノ條件ヲ特免ス。

第九條　第七條第五號ニ依リ歸化セントスルノ意アルコトヲ屆出タル後、未ダ歸化セズシテ死亡シタル者ノ妻子ハ日本帝國ニ住居スルニ於テハ其ノ屆出ヨリ二個年ノ後同條第一號乃至第四號ノ條件ヲ具フルトキハ歸化ノ願書ヲ呈出スルコトヲ得。

第十條　第七條第四號ニ記載セル期限ノ間ニ日本帝國ヲ離ルヽコト引續キ六個月以上ニ及ブトキハ、二個年ヲ經過セザル間ハ其ノ離レタル年月ヲ控除シテ前後ノ年月ヲ通算ス、但シ日本政府ノ官用ノ爲ニ外國ニ在ル年月ハ之ヲ控除セズ。

第十一條　歸化ノ願書ニハ保證人三名連署シ、願人ノ國民身分氏名職業年齡住所仍引續キ日本ニ住居シ又ハ日本政府ニ任用セラルヽノ意アル事ヲ記載シ竝ニ第七條第八條第九條ニ揭ゲタル條件ノ證明ニ必要ナル文書ヲ添フルヲ要ス。

第十二條　歸化ノ願書ハ之ヲ現住地ノ地方長官ニ由リ司法大臣ニ呈出スベシ、司法大臣ハ願人ノ品行及其ノ他必要ナル事項ヲ取調ベ上奏シテ勅裁ヲ請フノ後地方長官ヲ經テ歸化證ヲ付與スベシ。

第十三條　歸化人ハ歸化證ヲ受領スルノ日ニ於テ日本帝國ニ臣從ノ誓ヲ爲スベシ。歸化證ハ此ノ誓ヲ爲シタル後ニ非ザレバ效力ヲ有セズ。

第十四條　歸化ノ願ヲ許サレザル者ハ願書ヲ却下セラレタル日ヨリ一個年以上日本帝國ニ住居スルニ非ザレバ再ビ歸化ノ願書ヲ呈出スルコトヲ得ズ。

第十五條　歸化證ニハ歸化者ト共ニ日本臣民身分ヲ得有スル旨ヲ併記スベシ。

第十六條　凡日本帝國ニ於テ官吏ニ任用セラルベキ外國人ニシテ歸化ノ願ヲ爲シタル者ハ、第十三條ヲ除ク外前數條ノ規定ニ依ラズ、樞密院ノ議ヲ經勅裁ニ依リ歸化證ヲ付與セラルヽコトアルベシ。

第十七條　左ニ揭グル外國人ハ日本ニ住居スルニ於テハ成年ノ後何時ニテモ第三十二條ノ申出ヲ爲スニ因リ日本臣民身分ヲ得有ス。

一、一年以上引續キ日本ノ陸海軍役ニ服シタル者。

二、日本ノ徵兵ニ際シ外國ノ國民身分ヲ申立ザリシ者。

第十八條　歸國ノ意ナク十個年間日本ニ住居スル外國人ハ歸化ノ手續ヲ爲スベシ。

第十九條　第二條第四條第五條第二號第三號第六條第十六條第十七條ニ依リ日本臣民身分ヲ得有スル者ハ、其ノ身分ヲ得タル日ヨリ十個年ヲ經タル後特ニ帝國議會ノ承認ヲ得ルニ非ザレバ兩院ノ議員國務大臣樞密顧問及陸海軍ノ將官ト爲ルコトヲ禁ズ。

第三章　臣民身分ノ喪失

第二十條　左ニ揭グル者ハ當然日本臣民身分ヲ失フ。

一、外國人ノ妻ト爲リタル日本人及其未成年ノ子、但シ當然其ノ夫及父ノ身分ニ從フトキ。

二、外國人ノ養子ト爲リタル者、但當然養親ノ身分ニ從フトキ。

三、日本人ヲ母トスルノ私生子ニシテ其ノ父タル外國人ノ認知ヲ受ケタル者。

四、外國ニ歸化シタル者。

五、日本政府ノ許可ヲ得ズシテ外國ノ官ニ就キ又ハ恩給ヲ受ケ、又ハ兵役ニ服シ又ハ軍隊ニ入リタル者、但シ日本政府ノ命ニ從ヒ外國ノ官職恩給又ハ兵役ヲ辭シタルトキハ此限ニ在ラズ。

六、戰時又ハ開戰セントスル時外國ニ滯在シ、日本政府ノ公布シタル歸國ノ命令ニ從ヒ期限內ニ歸國セザル者。

第二十一條　外國ニ歸化シタル者ノ妻及未成年ノ子ハ反對ノ正條ナキ場合ニ於テハ日本臣民身分ヲ失フ。

第二十二條　日本ノ臣民ニシテ本國ヲ去リタル者ハ出立ノ日ヨリ起算シテ引續キ十年間外國ニ住居スルニ由リ臣民ノ身分ヲ失フ。但シ此ノ年限ハ本人ニ於テ若シ旅券又ハ同樣ノ證書ヲ所持スルトキハ其旅券又ハ證書ノ滿期ノ日ヨリ起算シ、若シ日本ノ公使館又ハ領事館ニ於テ記入ヲ受ケ又ハ本國ノ身分事務取扱役場ニ外國住居ノ屆出ヲ爲シタルトキハ其ノ記入又ハ屆出ノ後一年ノ終ヨリ起算ス。前項ノ期限ハ未成年者ニ付テハ成年ニ達シタル日ヨリ起算ス。

第二十三條　日本人ニシテ外國ニ移住センコトヲ欲シ、租稅其他其公義務ナキ者ハ除籍ノ勅許ヲ願出ルコトヲ得、此ノ場合ニ於テ戰時及第二十六條ニ規定スル場合ヲ除ク外除籍ヲ許可スベシ。

第二十四條　除籍證ハ其ノ交付ノ時ヨリ效力ヲ生ズルモノトス。但シ除籍證ヲ附セラレタル者其ノ交付ノ日ヨリ六個月內ニ外國ニ移住シ又ハ外國ニ歸化セザルトキハ其ノ效力ヲ失フ。

第二十五條　除籍ハ反對ノ正條ナキ場合ニ於テハ本人ノ妻及未成年ノ子ニ及ブモノトス。

第二十六條　左ニ揭グル者ハ除籍ヲ許可シ又ハ日本臣民身分ヲ失ハシメズ。

一、滿十七歲以上二十四歲以下ノ男子、但シ陸海軍現役ヲ免ゼラレタル者ハ此ノ限ニ在ラズ。

二、官吏及陸海軍現役ノ軍人。

第二十七條　第一條ニ依リ日本帝國臣民身分ヲ有セシ者ハ、一旦之ヲ失ヒタルモ第三十二條ノ申出ヲ爲シ申出後一個年內ニ日本ニ歸國シテ住居ヲ定ムルニ因リ其ノ身分ヲ回復ス。

第二十八條　第二十條第五號第六號ニ因リ日本臣民身分ヲ失ヒタル者ハ正當ナル辯明ヲ爲サヾル間ハ身分ヲ回復スルコトヲ許サズ。

第二十九條　第二條第三條第四條第五條第六條第十六條第十七條ニ依リ日本臣民ト爲リタル後其ノ身分ヲ失ヒタル者ハ更ニ歸化ノ手續ヲ爲スニ非ザレバ日本人ト爲ルコトヲ得ズ。

第四章　通則

第三十條　日本臣民身分ヲ得有シ又ハ回復シタル者ハ外國ノ國民身分爵位官職及其他ノ位地ヲ保有セズ。

第三十一條　身分ヲ變更スルノ效力ハ既往ニ遡ラズ。

第三十二條　身分ノ選擇回復又ハ得有ニ關スル申出ハ日本ニ住居スル者ハ其ノ住居地ノ身分取扱場、外國ニ住居シ又ハ寄留スル者ハ日本ノ公使館又ハ領事館ニ之ヲ爲スベシ。

公正ノ法式ニ依リ委任ヲ爲シタル代理人ヲ以テ前項ノ申出ヲ爲スコトヲ得。

帝國臣民身分法參照

帝國臣民身分法草案

第一條　參照

獨逸國民身分法第二條

聯邦中一國ノ國民身分ヲ得ルニハ將來左ノ條件ニ從フベシ。

第一、血統。

第二、私出子ヲ公認スル事。

第三、婚姻。

第四、獨逸人ハ歸順ニ因ル。

第五、外國人ハ歸化ニ因ル。

養子ノミニテハ國民タルノ身分ヲ得有セズ

同第三條……獨逸男子ノ正出子ハ假令外國ニ於テ生レタリトモ其父ノ身分ヲ得有ス。又獨逸女

子ノ私出子ハ其母ノ身分ヲ所有ス。

同第四條……私出子ノ父ガ獨逸男子ニシテ其母ガ父ト同一ノ身分ヲ有セザルトキハ其私出子ハ法律ニ從ヒ公認セラルルニ因リ父ノ身分ヲ得有ス。

第二條　參照

獨逸國民身分法第六條歸順及歸化（第二條第四及第五）ハ高等行政官廳ヨリ發シタル證書ニ由リ成ルモノトス。

第三條　參照

獨逸國民身分法第五條……獨逸男子ト婚姻シタル婦ハ其夫ノ身分ヲ得有ス。

佛國民法第十二條佛蘭西人ニ嫁シタル外國女子ハ其夫ノ分限ニ從フベシ。

第四條　參照

獨逸國民身分法第十一條……國民身分ノ授與ハ別ニ例外ヲ定メザルニ於テハ同時ニ其婦及父權ノ下ニ立ツ未成年ノ子ニ及ブモノトス。

帝國臣民身分法參照

第五條　參照

佛國民法第九條。凡ソ佛蘭西ニ於テ生ジタル外國人ノ子ハ其成年ノ時期ニ至リシ時ヨリ一年內ニ佛蘭西人タルノ分限ヲ得ント求ムルコトヲ得ベシ、但シ之ガ爲メニハ其者ノ佛蘭西ニ居住スル場合ニ於テハ佛蘭西ニ其住所ヲ定ムベキノ意思タルコトヲ申述シ、又其者ノ外國ニ居住スル場合ニ於テハ佛蘭西ニ其住所ヲ定ム可キノ約務ヲ爲シテ、其約務ノ證書ヨリ起算シテ一年內ニ佛蘭西ニ其住所ヲ設定スルコトヲ必要トス。

同第十條凡ソ外國ニ於テ生レタル佛蘭西人ノ子ハ佛蘭西人ナリ。

凡ソ佛蘭西人タルノ分限ヲ失ヒシ佛蘭西人ノ外國ニ於テ生ジタル子ハ、何時ニ限ラズ第九條ニ定メタル法式ヲ履行スルニ於テハ右ノ分限ヲ復スルコトヲ得ベシ。

第七條　參照

獨逸國民身分法第八條……歸化ノ證書ハ左ノ條件ヲ具備スルトキニ限リ外國人ニ之ヲ與フルコトヲ得

第一、外國人其本國ノ法律ニ從ヒ治產能力ヲ有スルトキ、但シ歸化者ニ治產能力缺クルトキハ其父後見人又ハ管財人ノ承認ニ依リ其缺ヲ補フコトヲ得。

第二、從來品行正シクアリタルコト。

第三、居住スベキ地ニ於テ自己ノ住宅ヲ有スルカ或ハ寄留スルコト。

第四、其地ニ於テ其地方ノ狀況ニ從ヒ自己及其家族ヲ養フコトヲ得ルコト。

高等行政官廳ハ歸化證書交付前ニ歸化者ノ居住セント欲スル市町村又ハ貧民區ニ第二第三第四ノ條件ニ付其意見ヲ問フベシ。

第八條　參照

佛國歸化法第二條。外國人ニシテ佛蘭西國ニ功勞アル者又ハ工業上有益ナル發明、若クハ顯著ナル才藝ヲ傳ヘ、又ハ大ナル設立ヲ起シ、又ハ大ナル農業上ノ開拓ヲ爲シタル者ハ前條ニ定メタル三年ノ期限ヲ一年ニ減縮セラルヽコトヲ得。

第十三條　參照

獨逸國民身分法第十條、歸化證書又ハ歸順證書ハ之ヲ交付シタル時ヨリ國民ノ身分ニ附着スル

總テノ利及義務ヲ生ズルモノトス。

第十六條　參照

獨逸國民身分法第九條、一聯邦ノ政府又ハ中央官廳若クハ高等行政官廳ニ於テ外國人若クハ聯邦中ノ國民ヲ直接若クハ間接ノ國家官吏ニ任ジ或ハ其任官ヲ認可シ又ハ之ヲ教會、學校若クハ地方團體ノ職員ニ採用シ或ハ其採用ヲ認可シタルトキハ其任官若クハ採用證書ハ歸化證書若クハ歸順證書ニ代ハルモノトス、但其辭令書ニ反對ノ規定アルトキハ此限ニアラズ。

第十七條　參照

佛國千八百七十年布告第一條、現時佛蘭西國防禦ノ戰爭ニ與リタル外國人ニハ千八百四十九年十二月三日ノ法律第二條（千八百六十七年六月二十九日ノ法律ヲ以テ改正ス）ニ定メタル一年ノ期限ヲ免除ス、故ニ是等ノ外國人ハ住居ノ許可ヲ得。タル後直ニ歸化スルコトヲ得。但シ法律上定メアル身元調ハ從前ノ通リ之ヲ行フベシ。

第十九條　參照

獨逸國民身分法第十三條……國民ノ身分ハ自今左ノ場合ニ限リ之ヲ失フモノトス。

第一、願出ニ由レル除籍。

第二、官廳ノ言渡。

第三、外國ニ十年間滯在スル事。

第四、私出子ハ其父ガ其母ト異ナル國ニ屬スル場合ニ於テ法律上ノ規定ニ從ヒ公認セラレタルトキ。

第五、獨逸女子ハ他ノ聯邦男子又ハ外國男子ト婚姻シタル時。

同第二十條、外國ニ滯在スル獨逸人ニシテ戰時又ハ開戰ノ危險アル場合ニ於テ、獨逸皇帝ヨリ全國ニ向テ發シタル歸國督促令ニ定メタル期限內ニ其督促ニ從ハザルトキハ本國中央官廳ハ其決議ニ依リ其國民身分ヲ失フタルコトヲ宣言スルコトヲ得。

同第二十二條、獨逸人本國政府ノ許可ヲ得ズシテ外國政府ノ官吏トナリタルトキハ本國政府ヨリ一定ノ期限ヲ定メ辭職スベキコトヲ本人ニ命ズルモ、其命ニ從ハザルトキハ本國政府ハ其國民ノ身分ヲ失ヒタルコトヲ宣言スルコトヲ得。

佛國民法第十七條、佛蘭西人タルノ分限ハ左ノ諸件ニ依テ之ヲ失フモノトス。

第一、外國ニ於テ獲得シタル歸化。

第二、國王（共和國大統領）ノ許可ヲ得ズシテ外國政府ヨリ授與セラレタル公ノ職務ヲ受諾

スル事。

第三、總テ歸國ノ意ナク外國ニ於テ爲シタル定業、商業上ノ定業ハ決シテ歸國ノ意ナクシテ爲シタルモノト看做スコトヲ得ズ。

同第十九條外國人ニ嫁シタル佛蘭西ノ女ハ其夫ノ分限ニ從フベシ。

同第二十一條、國王（共和國大統領）ノ許可ヲ得ズシテ外國ニ於テ兵役ニ服シ又ハ外國ノ兵社ニ加ハリタル佛蘭西人ハ其佛蘭西人タルノ分限ヲ失フベシ。

其佛蘭西人ハ國王（共和國大統領）ノ許ヲ得ルニ非ザレバ佛蘭西ニ歸ルコトヲ得ズ、且ツ佛蘭西國士トナル爲メニ外國人ニ負ハシメタル條件ヲ履行スルニ非ザレバ、佛蘭西人タルノ分限ヲ復スルコトヲ得ズ。但シ國ニ叛キテ兵器ヲ携ヘ又ハ携ヘントスル佛蘭西人ニ對シ刑法ニ定メタル刑ト相觸ルヽコトナカル可シ。

第二十條　參照

獨逸國民身分法第十九條除籍ハ別ニ例外ヲ定メザルトキハ同時ニ其妻及父權ノ下ニ立ツ未成年ノ子ニ及ブモノトス。

第二十一條　參照

獨逸國民身分法第二十一條獨逸人獨逸國ヲ去リ十年間引續キ外國ニ滯在スルトキハ之ガ爲メ其身分ヲ失フモノトス。其期限ハ獨逸國ヲ出立シタル日ヨリ起算シ若シ本人旅券若クハ生國證書ヲ所持シタルトキハ、其期限ノ續過シタルトキヨリ起算ス、又其期限ハ獨逸領事館ノ簿冊ニ記入スルコトニ依リ中斷セラレ、其記入ヲ刪除シタルトキハ更ニ其翌日ヨリ期限ノ經過ヲ始ムルモノトス。

前項ノ方法ニ依リ國民ノ身分ヲ失フタルトキハ同時ニ其婦及父權ノ下ニ立ツ未成年ノ子ニ及ブモノトス、但シ是等ノ者其夫又ハ父ノ傍ニ在ルトキニ限ル。

第二十三條　參照

獨逸國民身分法第十五條、何人ニテモ聯邦中一國ニ於テ國民ノ身分ヲ得タルコトヲ證明シタルトキハ除籍證書ヲ交付ス。

其證明書ナキトキハ左ニ揭グル者ニ除籍證書ヲ交付ス。

第一、滿十七歲ヨリ滿二十五歲マデノ徵兵適齡ノ者ハ郡徵兵委員ヨリシテ陸軍又ハ海軍ニ編入セラルコトヲ忌避スルノ目的ニ非ザルコトヲ證シタル證書ヲ差出スニ非ザレバ除籍證書ヲ

交付セズ。

第二、陸軍又ハ海軍常備軍人及休職士官及官吏、是等ノ者ニハ其職務ヲ免ゼザル前ニ除籍證書ヲ交付セズ。

第三、常備軍ノ豫備及後備兵竝海軍ノ豫備兵及其後備ニ屬シ士官ニ非ザル者、是等ノ者現役ニ就キタル後ハ除籍證書ヲ交付セズ。

第二十四條 參照

佛國民法第十八條、佛蘭西人タルノ分限ヲ失ヒシ佛蘭西人ハ國王（共和國大統領）ノ許可ヲ得テ佛蘭西ニ歸リ且ツ佛蘭西ニ其居住ヲ定メント欲スルコトト佛蘭西ノ法律ニ背キタル總テノ榮顯ヲ拋棄スルコトヲ申述スルニ於テハ何時ニ限ラズ佛蘭西人タルノ分限ヲ復スルコトヲ得ベシ。

國民身分法樞密院修正

帝國臣民身分法草案委員會ニ於テ審査ヲ遂ゲ別冊未書之通修正ヲ加ヘタリ依テ茲ニ報告ス

明治二十二年九月十九日

伊藤議長殿

野村顧問官
鳥尾顧問官
吉田顧問官
佐野顧問官
副島顧問官
福岡顧問官
寺島副議長

國民身分法樞密院修正

日本國籍法

第一章　日本國籍ノ得有

第一條　左ニ揭グル者ハ出生ニ因リ日本國籍ヲ得有ス。

第一、日本人ヲ父トスル正出子。

第二、日本人ヲ母トスル私生子。

第三、國籍ナキ者ノ妻ト爲リタル日本人ノ子。

第二條　外國人ヲ母トスル私出子ハ其父タル日本人ノ法律上ノ認知若クハ認正ニ因リ日本國籍ヲ得有ス。

第三條　外國人ハ第二章ノ規程ニ從ヒ歸化ニ因リ日本國籍ヲ得有ズ。

第四條　日本人ノ妻ト爲リタル外國人ハ日本國籍ヲ得有ス。

前項外國人ノ未成年ノ子ハ夫ノ屆出ニ因リ日本國籍ヲ得有ス。

第五條　日本ニ歸化シタル者ノ妻及歸化シタル者ノ未成年ノ子ハ日本國籍ヲ得有ス、但シ未成年

ノ子ニシテ歸化願書ニ取除キタル者ハ此ノ限ニ在ラズ。

第六條　日本人ノ妻ト爲リタルニ因リ、又ハ夫ノ日本ニ歸化シタルニ因リ、日本國籍ヲ得有シタル者ハ離婚シ又ハ寡婦トナルモ日本國籍ヲ喪失セズ。

第七條　日本領內ニ生レ父母共ニ知レザル者及父母共ニ國籍ナキ者ハ日本國籍ヲ得有ス。

第二章　歸化

第八條　日本ノ陸海軍役ニ服シタル外國人ハ日本ニ住居スルニ於テハ屆出ニ因リ日本國籍ヲ得有ス。

第九條　外國人ハ左ノ條件ヲ具フルニ於テハ日本ニ歸化スルノ願書ヲ差出スコトヲ得。

第一、成年ニシテ民法上不能力ニ該ラザルコト。

第二、品行正シキコト。

第三、生計ヲ立ツルノ資產又ハ技能アルコト。

第四、五年以上日本ニ住居シ仍住居セントスルコト。

第五、願書ヲ差出シタル日ヨリ少クトモ二年前ニ日本ニ歸化セントスルノ意アルコトヲ其ノ住居地ノ地方長官ニ屆出タルコト。

第十條　前條第四ニ定メタル期限ノ間日本ニ在ラザルコト、引續キ六月以上二年以下ナルトキハ其ノ不在ノ年月ヲ控除シテ前後ノ年月ヲ通算ス、但シ日本政府ノ官用ノ爲ニ外國ニ在ル年月ハ之ヲ控除セズ。

第十一條　第九條第五ニ依リ歸化セントスルノ意アルコトヲ屆出タル後、未ダ歸化セズシテ死亡シタル者ノ妻ハ、日本ニ住居シ其ノ屆出ヨリ二年ノ後同條第一乃至第四ノ條件ヲ具フルニ於テハ歸化ノ願書ヲ差出スコトヲ得。

第十二條　左ニ揭グル外國人ハ第九條第一第二第三ノ條件ヲ具ヘ日本ニ住居スルニ於テハ歸化ノ願書ヲ差出スコトヲ得。

第一、日本ニ功勞アル者。

第二、日本ニ有益ノ發明ヲ傳ヘ又ハ農工商ノ事業其ノ他學術技藝ニ付效益ヲ起シタル者。

第三、父母又ハ父母ノ一方日本國籍ヲ得有セシ時外國籍ニ在リタル者。

第四、第一條第二條ニ依リ日本國籍ヲ得有セシ者ヲ妻ト爲シタル者。

第十三條　凡官吏ニ任ゼラレントスル外國人ノ歸化ノ願ハ前數條ノ規程ニ依ラザルコトヲ得、此ノ場合ニ於テハ樞密院ノ議ヲ經、勅裁ニ依リ歸化ヲ許可セラルヽコトアルベシ。

但シ名譽領事公使館及領事館ノ附屬官吏及教官技術官ニ任ゼラレントスル者ハ歸化ヲ要セズ。

第十四條　歸化ノ願書ニハ願人ノ國籍氏名職業年齡住居竝ニ願人ト共ニ日本國籍ヲ得有スベキ者ノ氏名年齡及左ノ事項ヲ明記シ願人之ニ署名スベシ。

第一、憲法及法律命令ヲ遵守シ日本臣民タルノ義務ニ服從スベキコト。

第二、從前所屬國ノ國籍爵位官職及其ノ他ノ地位ヲ拋棄スベキコト。

第九條、第十一條、第十二條ノ歸化ノ願書ニハ證人三名連署シ幷ニ各條ニ揭ゲタル條件ノ證明ニ必要ナル文書ヲ添附スベシ。

第十五條　第九條第十一條第十二條ノ歸化ノ願書ハ其ノ住居地ノ地方長官ヲ經テ之ヲ內務大臣ニ差出スベシ、內務大臣ハ願人ノ品行及其他必要ナル事項ヲ取調ベタル後許可スベキモノハ地方長官ヲ經テ歸化證ヲ付與ス。

第十三條ノ歸化ノ願書ハ願人ヲ任用セントスル官廳ヲ經テ之ヲ內閣總理大臣ニ差出スベシ、其ノ裁可セラレタルモノハ內務大臣ヲ經テ歸化證ヲ付與ス。

第十六條　歸化證ニハ歸化者ト共ニ日本國籍ヲ得有スル者ヲ併記ス。

第十七條　歸化ノ願ヲ許可シ又ハ許可セザルノ指令ニハ理由ヲ付セズ。

第十八條　歸化ノ願ヲ許可セラレザル者ハ願書却下ノ日ヨリ一年以上日本ニ住居スルニ非ザレバ再ビ歸化ノ願書ヲ差出スコトヲ得ズ。

第十九條　凡ソ歸化證ヲ付與セラルヽ者ハ別ニ定ムル所ノ式ニ依リ臣從ノ誓ヲ爲スベシ、歸化證ハ此ノ誓ヲ爲シタル後ニ非ザレバ效力ヲ有セズ。

第二十條　歸化證ヲ付與セラレ前條ノ誓ヲ爲シタル者及第四條第五條第七條第八條ニ依リ日本國籍ヲ得有シタル者ハ日本臣民ニ屬スル一切ノ私權ヲ得有シ、及第二十一條ノ特例其ノ他法律ニ反對ノ正條アル場合ヲ除ク外諸般ノ公權ノ公權ヲ得有ス。

第二十一條　第四條第五條第八條第九條第十二條第十三條ニ依リ日本國籍ヲ得有シタル者ハ其ノ得有ノ日ヨリ十年ヲ經タル後ニ非ザレバ國務大臣樞密顧問陸海軍ノ將官及兩院ノ議員ト爲ルコトヲ得ズ。

第三章　日本國籍ノ喪失及回復

第二十二條　外國人ノ妻ト爲リタル日本人ニシテ夫ノ國籍ヲ得有シタルトキハ日本國籍ヲ喪失ス。

前項日本人ノ未成年ノ子ニシテ母ト共ニ外國々籍ヲ得有シタル者ハ日本國籍ヲ喪失ス。

第二十三條　日本人ヲ母トスル私出子ハ其ノ父タル外國人ノ法律上ノ認知若ハ認正ニ因リ日本國籍ヲ喪失ス。

第二十四條　日本政府ノ特許ヲ得ズシテ外國ノ官ニ就キ又ハ恩給ヲ受ケ又ハ陸海軍役ニ服シタル者ハ日本國籍ヲ喪失ス。

第二十五條　戰時又ハ開戰セントスル時外國ニ滯在シ日本政府ノ公布シタル命令ニ從ヒ歸國セザル者ハ日本國籍ヲ喪失ス。

第二十六條　日本人ニシテ本國ヲ去リタル者ハ出立ノ日ヨリ起算シテ引續キ十年間外國ニ住居スルニ因リ日本國籍ヲ喪失ス。但シ此ノ年限ハ本人ニ於テ旅券ヲ所持シ又ハ日本領事館ノ簿籍ニ記入ヲ受ケタルトキハ旅券滿期ノ日又ハ簿籍ノ記入ノ日ヨリ起算ス。

前項ノ期限ハ未成年者ニ付テハ成年ニ達シタル日ヨリ起算ス。

第二十七條　第二十四條第二十五條第二十六條ノ國籍喪失ハ本人ニ隨從スルニ於テハ其ノ妻及未成年ノ子ニ及ブモノトス。

第二十八條　第一條第二條第七條ニ依リ日本國籍ヲ得有セシ者ハ一旦之ヲ喪失シタルモ回復ノ屆出ヲ爲シタル後一年以內ニ日本ニ住居ヲ定ムルニ因リ日本國籍ヲ回復ス。

第二十九條　第二十四條、第二十五條ニ依リ日本國籍ヲ喪失シタル者ハ正當ナル辯明ヲ爲スニ非ザレバ國籍ヲ回復スルコトヲ許サズ。

第三十條　第四條第五條第八條第九條第十一條第十二條第十三條ニ依リ日本國籍ヲ得有シタル後

之ヲ喪失シタル者ハ歸化ノ手續ヲ爲スニ非ザレバ日本國籍ヲ得有スルコトヲ得ズ。

第四章　通則

第三十一條　日本國籍ヲ得有シ又ハ回復シタル者ニ對シテハ日本政府ハ總テ外國ノ國籍爵位官職及其ノ他ノ地位ヲ有スルコトヲ認メズ。

第三十二條　第四條第二項第八條第二十八條ノ屆出ハ其ノ住居地ノ地方長官、外國ニ在ル者ハ日本領事館ニ之ヲ爲スベシ。

前項ノ屆出ハ公正ノ法式ニ依リ委任ヲ爲シタル代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得。

歸化法制度ノ理由

上古ノ夙ニ隣國ト交通ノ途ヲ開キ、外邦人ノ來テ歸化シタルノ例ハ屢々史上ニ散見シ、朝廷或ハ之ニ姓ヲ賜ヒ或ハ土田ヲ賜フテ之ヲ懷柔セラレタリ。大寶令ニ「化外人歸化者所在國郡給ニ衣粮一具狀發ニ飛驛一申奏。化外人於ニ寬國一附貫安置。」トアルヲ以テ之ヲ知ルニ足ル。德川氏ニ至リ鎖國ノ主義ヲ執リ交通ノ途ヲ遮斷シ、外邦人ノ來テ我國ニ歸化スルヲ許サヾリシヲ以テ其法制ノ如キモ亦必要ヲ見ザリシナリ。然ルニ維新ノ後外交一タビ開ケテヨリ各國トノ交際日ニ月ニ親密トナリ、彼國人ノ來テ我國ニ寄寓シ、遂ニ歸化ヲ願フ者アリ、又彼國ノ婦人ニシテ我國人ニ嫁スル者アリテ今日國際法上並ニ國法上及私法上ヨリ歸化ノ規程及效力ヲ定ムルノ必要ヲ生ジタリ。是レ本法ノ制定ヲ必要トナス所以ノ一ナリ。

帝國憲法第十八條ニ曰ク、日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ルト、日本臣民タルノ方法ニアリ、出生ニ因ルノ歸化又ハ其他法律ノ效力ニ依ルコト是也。然リ而シテ日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ公權及私權ヲ享有スベキモノタリ、此レ本法ノ制定ヲ必要トナス所以ノ二ナリ。

本年十月公布セラレタル民法人事篇第二章ハ國民分限ノ取得喪失及回復ヲ定メ、而シテ歸化ノ

條件及方式ハ全ク之ヲ特別法ノ規定ニ任シタリ（第十一條）加之同篇ノ規定ハ私權ニ止マルヲ以テ、更ニ別法ヲ以テ歸化人ノ公權ヲ規定セザルベカラズ、是本法ノ制定ヲ必要トナス所以ノ三ナリ。

歸化ハ各國中或ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定スルモノアリ或ハ民法中ニ之ヲ規定スルモノアリ、又或ハ特ニ條約ヲ以テ換籍ノ方法ヲ規定スルモノアリ、今特別法ノ主義ヲ採リタルハ蓋近世法學ノ一般ニ是認スル所ニ從フナリ。而シテ歸化法ハ半バ國法ニ、半バ民法ニ關渉スルモノナルヲ以テ彼此相照應シテ始メテ其全ヲ得ル者トス。

方今各國ニ行ハルヽ歸化法ニ二大原則ノ同ジカラザルアリ。一ハ屬人法ニシテ、一ハ屬地法ナリ、屬人法ハ血統ニ依リテ身分ヲ定ムルノ主義ニシテ、生子ノ身分ハ其生地如何ヲ問ハズ都テ父母ノ身分ニ依ルヲ謂フ、屬地法ハ之ニ反シテ一ニ生地ニ基キテ身分ヲ決スル者ニシテ、父母ノ國籍如何ヲ論ゼズ、生子ハ生國ノ身分ニ依ルトナスニアリ、或國ノ如キ初メ專ラ屬地法ヲ執リシガ近今各國トノ交通頻繁ナルニ方リ、其ノ不便ヲ感ジタルヲ以テ此ノ主義ニ制限ヲ附スルト同時ニ屬人法ヲ採用スルニ至リタリ、我ガ民法人事篇及本法ハ屬人法ノ主義ニ依レルモノナリ。

各國ノ外國人ヲ待ツ其ノ要件ヲ簡單ニシテ歸化ヲ容易ナラシムルモノアリ、之ニ反シテ嚴ニ條件ヲ設ケ外人ノ來歸ヲ容易ナラザラシムルモノアリ、皆其國ノ狀勢如何ヲ視テ其ノ宜キヲ酌ミタ

ルニ外ナラズ、今本法歸化ノ條件ヲ嚴ニスルノ方針ヲ執レルハ今日ノ時宜ニ照シテ必要ナリト信ズレバナリ。

但各國ノ歸化人ニ於ケル要件方式異同アリト雖、公權私權ノ制限ニ至リテハ漸クニ博愛懷遠ノ主義ヲ取リ、嚴ヨリ寬ニ移リタルノ一事ハ各國同一ニ出デザルハナシ。是亦本法ノ取ル所ナリ。彼ノ中古各國ニ行ハレタル外人種ヲ囚虜視スルノ風ハ已ニ歷史上ノ舊物タルコトヲ遺忘スベカラザルノミ。

ボアソナード氏日本帝國刑法改正ノ草案竝說明書緒言

余ノ三四年前司法卿ヨリ刑法ノ前草案ニ付說明書ヲ起案スベキノ命ヲ受ケタル時、日本政府ハ業已ニ明治十五年以降實施シタル刑法ノ改正ヲ豫期セラレタルモノヽ如シ。蓋シ當初司法省中ニ設ケラレタル調査委員ノ大ニ前草案ニ修正削除ヲ加ヘ、往々不快ヲ感ズベキノ成跡ヲ遺シタルコト當時ニ在テ掩フベカラザルモノアリキ。爾來漸ク人ヲシテ刑法改正ノ必要ヲ確認セシムルニ足ルノ事實ニ遭遇シタルコト一ニシテ足ラズ。其今日ニ及ブヤ、愈々改正ヲ加ルノ時機既ニ目前ニ迫ルモノニ似タリ。

勢ヒ既ニ此ノ如シ、是ヲ以テ余ハ日本政府ニ於テ刑法ノ改正ヲ必要トセラル、傾向アルヲ豫想シ、復タ垂拱命ヲ待タズ、浩瀚ナル本書ニ就テ大ニ增補ヲ試ミ、且ツ其正誤スベキ要點ヲ擧示スルコトヲ努メタリト雖モ、今ニシテ再考スレバ書籍ノ謬ヲ正スハ秋ノ木葉ヲ掃フ如ク、竟ニ盡期アルベカラズト云フノ古諺ヲ免レズ。猶數多ノ修補ヲ加ヘザルベカラザルモノアリ。

今余輩ノ主トシテ準據シタル外國ノ法律ハ、第一佛蘭西ノ法典第二伊太利刑法ノ草案ニシテ、本書中最モ多ク引援シタルモノハ伊太利刑法ノ草案トス。而テ之ニ次グニ白耳義獨逸ノ法律ヲ以テセリ。當時余輩ハ獨逸法律ニ改正アリタルヲ遺忘セリト雖モ、其改正タルヤ本書引援上ニ障害アルコトナシ。唯余ノ最モ遺思トスル所ノモノハ、阿蘭陀ノ新法典ヲ引援シ能ハザリシ一事ナリ。余ノ佛文阿蘭陀新法典ノ印書アルヲ知リタルハ實ニ近日ニ係レリ。

余ハ前ニ記スル調査委員ノ爲ニ削除セラレタル前說明書ノ要點、及同委員ノ政府ニ提供スルコトヲ拒否シタル條項ヲ併セ本書ニ於テ約ネ之ヲ回復スルヲ得タリ。然リト雖モ此改正事業ハ單純ニ前者ニ復スルノ趣旨ニ非ザレバ、準則其軌ヲ同フシ、編纂其體ヲ異ニセザルニ拘ラズ、容易ニ理會シ得ル所ノ數多ノ明條ヲ增補セリ。

本書ハ素ヨリ公然ノ調査ヲ經ベキモノナルガ故ニ、中犯罪ト認ムベキノ事項及罰則ノ性質程度ニ關スル主要ノ論點ニ至テハ逐一其理由ヲ特書シテ大ニ之ヲ主張セルノミナラズ、其計畫ノ理由及之ニ隨伴スル方法ヲモ勉メテ詳論セリ。或者往々條項ノ長文ニ涉ルヲ以テ余ヲ難スルナラント雖モ、非常ニ簡單ナル法律ノ正文ニ比較スルトキハ稍々其長文ヲ覺ユルノミ。余ト雖ドモ豈ニ徒ラニ長文ヲ好ムモノナランヤ、却テ之ヲ削ルハ易々タル事業ナリト雖モ、余ハ唯ダ其條項ニ就テ成ルベク取除法及變則ヲモ分離セザルコトヲ努メタリ。何トナレバ各犯罪ニ關スル數多緊要ノ原素ヲ同一條項ニ併合スルノ必要アレバナリ。而シテ余ノ最モ服スル能ハザル批評ハ主要ナル論點

ニ就キ或ル條ヲ無用ナリト云ヒ、或ハ書式ニ關シテハ其文ヲ一層簡略ニスルコトヲ得ト云フノ二事卽チ是ナリ。

余ハ終始此二重ノ危險ヲ避クルコトニ苦慮セリ。然レドモ或ル場合ニ於テハ本源ノ主義ヲ鞏固ナラシムル爲ニ、法律上ノ適用ヲ示スノ必要アリ、且ツ其書式ニ付余ノ考フル所ハ簡短ニ過ギンヨリハ寧ロ成ルベク詳明ニスルヲ以テ善良ナル方法ト認メタリ。而テ余ハ及ブ丈ケ法律ノ簡易ナランコトヲ欲シテ、爲ニ數多ノ詳說ヲ略シタルハ自ラ己ヲ責ムルモノニ似タリト評セザルヲ得ズ。

凡ソ民事ニ於テ法律ハ其公平ヲ主持スル爲ニ其淵源ニ溯リテ最モ緻密ニ區別ヲ立テ、條件ヲ附シ及詳說ヲ擧グルコトヲ得ルト雖モ、刑事ニ於テハ犯罪者ノ社會ニ與ヘタル害惡及德義上ノ罪惡ニ關スル事實ヲ細大漏サズ之ヲ列擧スルハ洵ニ難事トス。故ニ此場合ニ於テ法律ハ裁判官ノ酌量ニ托スルニ是等ノ事ヲ以テシ、裁判官ヲシテ時ト場所トニ依リ刑ノ適用ヲ斟酌シ、及其輕重ヲ量リ、時トシテハ其罪質及程度ヲモ決定セシムベシ。是レ刑罰ヲ行フテ妍究ヲ載ムルノ權ハ聯對（ドーブル）ノ論據（グラウンド）ニ基キ、開明ノ國ニ於テ性法ノ必スル所ト又風土人情ノ要スル所トニ隨ヒ之ヲ行フコトヲ社會ニ委スルノ理由アルコトヲ偶然ノ間ニ指示スルニ足ルベシ。

余ハ（第八丁第九條ニ於テ）既ニ余ノ酌定法（エクレクチックスシステム）ヲ取リタル理由ヲ示セリ。抑モ此主義ハ處罰ノ權ヲシテ其基礎ヲ單純ナル公道（ジョンテス）ニ倚ラズ、又全ク社會（ソシヤル）ノ便宜（ユチリチー）ニ偏セズ、此二者ヲ併合シテ其中正ヲ得タルモノヲ以テ其基礎トナセリ。此問題タルヤ當時ニ在テハ素ヨリ古來ノ確言ニシテ余モ亦深ク之ヲ信用セシニ因ルト雖モ、其信用タル蓋シ今日ノ如ク鞏固ナラズ。如何トナレバ當初ハ未ダ此主義ノ實施ニ經驗セザリシト雖モ、今日ニ於テハ親驗躬履ノ證跡ニ其詳ヲ極ムルニ至テハ復タ毫モ疑フベカラザルモノナルコトヲ確信スルニ至リタレバナリ。余ハ緊要ナル場合ニ於テハ犯罪ニ關スル社會ノ損害及德義上ノ罪惡ニ付一層ノ注意ヲ加ヘタリ。若シ偶々之ヲ反覆セザルガ如キ迹アラバ、其意唯ダ煩ヲ避クルニ在ルノミ。今余ノ玆ニ明言スル所ノモノハ改正案ニ記載シタル諸種ノ犯罪ハ、此聯對ノ論據ヲ斟酌スルニ於テ萬一ノ誤謬ナキヲ保スルコト是ナリ。蓋此聯對ノ論據トハ第一ニ社會ノ秩序ヲ保持スルコトヲ指シ、第二ニ一般ノ德義ヲ鞏固ニスルコトヲ指スナリ。但シ社會上及德義上ノ秩序ハ常ニ同一ノ損害ヲ受クルモノニアラズ、何トナレバ此二者タル互ニ相似タルモノアリト雖モ、實ニ同一物ニアラザレバナリ。然リト雖モ余ノ最モ緊要ノ點ト認ムルモノハ抑モ刑法ナルモノハ時ト場所トニ依テ變更スル社會ノ便宜ノミニモ依ラズ、又人爲法ヲ以テ到底滿足ナル支配ヲ爲シ難キ純粹ノ公道卽心理學ニノミ基礎スベキモノニアラズト云フ一義ナリ。

此主義ハ余ノ最モ親愛シ且ツ師事シタル彼ノ有名ナル刑法學士ヲルトラン氏ノ深ク信ズル所ニシテ、亦佛國人民ノ腦裡ニ浸染スルモノナリ。而テ初メ余ノ草案ヲ起スノ事業ニ從フニ當リテ、

大ニ余ヲ助ケタルモノハ余ノ初メ招聘ニ應ジテ任ニ本邦ニ來ルニ臨ンデ、大ニ氏ノ奬勵ヲ受ケ、殊ニ氏ハ其平生ノ主義ヲ東洋ニ行フヲ榮譽トシテ重ンジタル事是ナリ。ヲルトラン氏ヲシテ尙ホ今世ニ存セシメバ、氏ノ余ガ草案ヲ贊成スベキハ更ニ疑ヲ容レザル所ニシテ余ハ氏ノ贊成ヲ以テ大ナル褒賞ヲ得タルベシ。

余ハ前ニ述ブル如キ信仰ナクンバ素ヨリ斯ル大事業ヲ成遂スル能ハザルハ勿論ナリト雖モ、其事業ヲ終ラントスルニ當テ、反テ之ニ乖戻スルノ悲境ニ遭遇スルハ何ゾヤ。世間數多ノ著述家モ其酸ヲ嘗メシ如ク、今此悲哀ハ一ニ余ノ事業ノ不完全ニノミ因ルニアラズ、余ハ徒タ未ダ十分信義ヲ盡サヾル一個ノ親友ト訣別スルガ如キ、殆ト名狀シ能ハザル悲哀ノ感情アリ。特ニ本書最終ノ一頁ヲ筆スルニ當テハ宛モ袂ヲ彼親友ニ拂フノ思アリキ。而テ猶是ヨリモ余ノ悄然樂マザルモノハ余ハ固ト一書ヲ著シタルニアラズシテ一ノ法律ヲ起草シタルモノナレバ、余ハ公法家心理學者及法學者ノ鑒識ト相對峙スルノミナラズ、又立法者其人ト對峙スレバ余ノ草案ハ果シテ認可セラルベキ歟、將タ前案ト同一ノ命數ニ陷ル歟ヲ問ハザルヲ得ズ。又余ハ新ニ出スモ同一ノ目的ヲ以テ爲シタル四年前ノ發布ニ係ル治罪法ノ改正草案モ、亦同一ノ運ニ遭遇スルヤ否ヤノ疑ヲ免レザル事ナリ。

余ハ此ノ案ヲ提出スルニ及デ滿腔誠心實意ヲ旨トス。固ヨリ一身上ノ私事ヲ顧ミルニ暇アラズ倘シ余ノ爲ス所ニ踰ヘテ社會ノ秩序ヲ保チ、被告人ノ安全ヲ固フシ、且有罪者ノ刑罰ヲ適宜ナラシムルニ於テ名法妙案ヲ有スルモノアラバ、余ハ直ニ地歩ヲ讓ランコトヲ欲ス。唯ダ余ノ徹頭徹尾希望スル所ノ事ハ、余ノ事業ヲ査覈スルニ當テハ、瞬時モ余ノ放念セザル目的ヲ以テ事ニ從フニ在リ、余ノ刑法及民法ノ草案ヲ起スニ當リ、終始余ノ意底ニ存スル所ノ目的ハ乃チ幼稚ナル日本ハ善良ナル民法及刑法ニ依テ西洋諸國ノ尊敬ヲ受ケシメン一事ナリ。如何トナレバ此方法ニ依ルニアラザレバ決シテ日本ハ其未ダ回復シ能ハザル法權ノ全部ヲ復シ得ザレバナリ。

夫レ善良ナル刑法トハ道理公道及慈愛ノ三者ヲ併合スル所ノモノナリ。此道理ト云フハ卽チ如何ナルモノニシテ社會ニ害ヲ與ヘ道德ノ秩序ヲ紊亂スルノ傾向アルモノナルヤヲ認メテ、而テ之ヲ刑罰スルニ在リ、公道トハ社會全般ノ權利ト刑事被告人ノ權利ヲ同一ニ保護スルニ在リ、又慈愛トハ法律上定メアル所ノ刑罰ヲ其適用上ニ於テ寬宥スルニ在リトス。且之ヲ以テ本邦斯ノ如キ善良ナル法律アルヲ西洋諸國ニ示シ、以テ彼等ヲシテ本邦ノ進歩ニ付テ抱懷スル疑心ヲ氷釋セシメ、其法律ヲ設ケタル精神ヲ以テ利用スルニ相當ナル法官ヲ得ルニ至ラバ、本邦初メテ開明諸國ノ一般ニ有スル權利ヲ要求スルニ於テ大ニ權力ヲ得、以テ彼ノミラボーノ云ヒシ如ク權利ニ反對スル法律ハアラズト疾呼スルヲ得ベシ。

ボアソナード

ロエスレル起稿

日本刑法草案第一篇總則ニ對スル意見

（總理大臣所有）

第一條　本條ノ初ノ二項ハ削除スルヲ可トス、第一項ハ純粹ノ學理的ノモノニシテ、以下第三項ヨリ第五項ニ至ルマデノ文中ニ含蓄セリ。第二項ニ於テ輕重ニ從テ罰セラル可キ行爲ヲ數種ニ區別スルハ實行スベキ事タリ。

第三項ヨリ第五項ニ至ルノ事項ハ本來第十二條ヨリ第十四條中ノ文中ニ含蓄セリ、又直ニ第一項ニ於テ以下數條ヲ單ニ引用シテ意義ヲ明言スルハ不適當トスル所ナリ。

獨逸刑法第一條ニ於テ簡單ニ刑ニ從テ犯罪ヲ三種ニ區別シ、現ニ其刑ヲ揭載スルノ體裁ハ最モ贊成スベキニ似タリ。

第二條　「デイスポシシヨーン。エキスプレス。ド。ラ。ロハ。」（法律ノ正條）ノ語ハ固ヨリ精密ヲ缺キ、其意義廣漠ニ過ルモノトス。何トナレバ其語ハ刑法ノ各種ノ解釋ヲ妨グルモノナレバナリ。但一般ニ適用スベキ刑法ナキ行爲ノ處罰ヲ禁ズベキノミ、故ニ「法律上ノ規程ニ準據シテ」ト揭載スルヲ以テ足レリトス。明確ナル法律上ノ規程ニ準據スルモノトスルハ誤テルモノトス。

第三條　「プロムユルガシヨーン」。（頒布）ナル語ハ精密ナルモノニ非ズ。法律ノ效力ヲ始ムルノ期日前ト云フヲ可トス、此ノ期日ハ通常頒布ノ期日ニ後ルヽモノトス。第二項ノ「直ニ之ヲ適用ス」ノ語ハ明瞭ナラズ、又精密ナラズ、獨逸刑法第二條ノ體裁ヲ採ルノ愈レルニ如カズ。或ハ又簡單ニ新法ノ犯罪ノ現時行レタル法律ヨリ寬和ナル場合ヲ除クトスルモ亦可ナランカ。

第四條　本條ハ日本人ガ外國ニ於テ犯シタル罪ノ處刑ヲ揭グズ、但第七條ニ「日本ニ於テ」云々ノ規程アレドモ、是レ只々外國人ニ限レリ。獨逸刑法ノ第三條ニ於ケル如ク、內國人ト外國人トヲ問ハズ、刑法ノ「境界上ノ主義」（テリトリアーレス。プリンチープ」ヲ通則トシテ明カニ揭載スベシ。否ラザレバ第四條第五條ノ如キハ人皆通則ヲ知ラズ、又ハ人々各々通則ヲ附會セザルベカラザル規則ヨリ例外トス。酷ニ之ヲ論ズレバ、右ノ通則ヲ揭グザルハ第二條ニ於テ「法律ニ正條アルニ非ザレバ罰スルコトヲ得ズ」

トノ明文ニ矛盾スルモノトス。其他左ノ點ニ就キ注意スベキ事アリ。

一、日本國ノ安寧ナル語ハ只々內國ノ安寧ヲ指スカ、又ハ外國ニ關係アル安寧ヲモ指スカハ甚ダ明確ナラズ

二、帝室ノ家族ニ對スル罪ハ外國ニ在テ犯シタル時ト雖之ヲ罰スベキモノトス（獨逸刑法第四條第二項）

三、親和國又ハ其君主ニ對シテ犯シタル罪モ亦均ク罰スベキモノトス（獨逸刑法第百二條）

四、獨逸國ニテハ外國ニ對シテ犯シタル貨幣ニ關スル重罪ヲモ罰スルモノトス（獨逸刑法第四條第一項）

五、貨幣及印ニ關スル各個ノ犯罪ヲ一々列擧セズシテ其事件ヲ總提スルヲ便宜ナリトス、若シ之ヲ列擧スルトキハ他ノ場合特ニ未遂罪ノ如キハ遺漏スル所アルヲ免レズ。

六、外國ニ於テ既ニ無罪ノ宣告ヲ受ケ、又ハ全ク刑ノ執行ヲ終リタル時ニ於テ始メテ處刑ノ糺罪ヲ止ムベキモノニシテ、只々確實裁決終リタル時直ニ止ムベキモノニアラズ、又此制限ハ獨逸刑法ニハ之ヲ揭ゲズ、且事理ニ合フタルモノニ非ラズ、何トナレバ處刑ハ主ラ日本ヲ基トシテ行フベキモノナレバナリ。若シ外國ニ於テ犯罪ニ就キ處刑ヲ終ヘタル時ハ日本ニ於テ執行スベキ刑ヲ減除スルヲ得ベシ（獨逸刑法第七條）

第五條　第一項確定判決ノ事ニ就テハ第四條第六ニ述ベタル意見ヲ見ルベシ（獨逸刑法第五條第一項）

第三項、日本ニ於テ重罪トシテ罰セラルベキ行爲ハ又外國ニ於テモ重罪トシテ罰セラルベキモノナルヤ、又日本ノ輕罪ヲ又外國ニ於テモ輕罪トシテ罰セラルベキモノナルヤハ明瞭ナラズ。之ニ反シテ外國ニ於テ輕罪ナル行爲ヲ、日本ニ於テハ重罪トシテ罰スルヲ得ルヤモ亦明瞭ナラズ。獨逸刑法第四條第三項ニ於テハ此要件ヲ如斯詳細ニ之ヲ定メズ、其行爲ハ外國ニ於テ一般ニ罰セラルベキモノナルヲ以テ足レリトス。

第四項、被害者ノ告訴ハ外國ノ法律ニ從ヒ糺罪ノ要件ナル時ニ限リ必要ナルモノノ如シ、何トナレバ若シ否ラザルニ於テハ此告訴ナキコトアルモ知ルベカラザレバナリ。

第六條　處罰ノ爲メ臣民ヲ外國ニ交附セザルハ凡ソ是認ヲ經タルモノトス。然レドモ必ズ然セザルベカラザルモノトスルニアラズ、例ヘバ英國ニ於ケルガ如シ。余ハ左ノ例ヲ擧グ、嘗テ一英人ノ墺國旅行中ニ於テ、其妻ヲ謀殺シタルコトアリ、其後英國ヨリ墺國裁判所ニ其者ヲ交附シタルコト是レナリ。然レドモ此場合ニ於テ普通ノ犯罪ニ就テノミ交附スルヲ得、而シテ英國ニ於テ判決ヲ下スコト能ハザリシ爲メノミ、余ノ意見ニ據レバ假令內國人ト雖、普通ノ犯罪ヲナシタル場合ニシテ之ヲ罰スルコト能ハザルトキハ之ヲ交附ス可キモノナリ。此ニ根據シテ公義（ヂレヒチーヒカ）

直正ノ主義ハ族國主義ノ上ニ位スルモノナリ。

第七條　第四項ニ就テ意見ニ據レバ、內國人ト外國人トヲ問ハズ、此「境界土主義」ハ內外ニ通ジテ行フベキモノトス。獨リ外國人ニ就テ之ヲ行フハ至當ナラザルガ如シ。

第八條　第四條ヨリ第八條ニ至ル此諸條ニ通ジテ注意スベキモノ左ノ如シ。

一、外國ニ於テ犯シタル罪ヲ日本ニ於テ罰スベキノ主意ナルヤ、又ハ罰スルヲ得ルノ主意ナルヤ分明ナラズ獨逸刑法第四條ニハ罰スルヲ得ルノ主意ナリ、故ニ之ヲ罰スルト否トハ檢事ガ之ヲ告訴スルト否トニ依ル。

二、外國ニ於テ既ニ判決ヲ經ルト云ヘル要件ハ附加榮譽刑ニモ及ブヤ否ヤ分明ナラズ、獨逸國ニ於テハ獨逸裁判所ヨリ別ニ榮譽刑ヲ附加スルヲ得。(獨逸刑法第三十七條)

三、罪ヲ犯シタルノ後、族籍ヲ移轉シタル時、如何ニ之ヲ處分スルヤヲ明載セズ。(獨逸刑法第四條)

四、第五條第四項ニ於テ處刑ノ告訴ヲナスモノハ外國ノ政府ナルヤ、又ハ裁判所ナルヤ、又ハ其他ノ官廳ナルヤハ疑フベキ所アリ。故ニ「ヲートリテー。ジユ。ペイ。エタランゼー」(外國ノ權力)ナル語ハ甚ダ不明確ナリトス。獨逸法律ニ從ヘバ處刑ノ告訴ハ外國ノ外務省ヨリナスベキモノトス。

五、外國ニ於テ犯シタル違警罪ノ處刑ニ就テ別ニ明文ナシ、獨逸國(刑法第六條)ニ於テハ特別ノ法律又ハ國際條約ヲ以テ其處刑ノ事ヲ定ムルモノトセリ。

第九條　本條ハ軍人軍屬ニ關シテ獨逸刑法第十條ニ於テモ之ヲ設ケタリ。其理由ハ該刑法ノ成ルヤ自由主義ヲ採用シタルニ依ル、然レドモ茲ニ此條件ヲ置クハ適當ノ場所ト謂フベカラズ。故ニ之ヲ削除スルヲ可トス、何トナレバ普通刑法ヲ軍人軍屬ニ適用スルノ程度ヲ定ムルハ寧ロ軍律ノ關スル所ナレバナリ。

第十條　本條モ亦削除スルヲ可トス、何トナレバ其意義廣漠ナレバナリ。元來刑法ノ總則ヲ其他ノ法律勅令及懲戒令ニ適用スルト云フヲ得ズ。特ニ理財法、關稅法、警察法ノ如キニ至テハ反對ノ場合アルコト多シ。此諸法ニ在テハ只外形上ノ事實ノミヲ罰スルモノニシテ、無形上ノ思想及目的竝結果補助等ヲ斟酌スルコトナシ。

本條第一項ハ無論ノ事ニシテ固ヨリ無用ニ屬ス。

第十一條　ヨリ第十六條ニ至ル、此諸條ニ於テハ刑ノ種類ヲ列記スルヨリハ外ニ意義ナキモノナルガ故ニ之ヲ揭ゲザルモ妨ゲナシ。獨逸刑法ノ如キハ則チ之ヲ揭ゲズ、若シモ已ニ陳ベタル如ク第一項ニ於テハ罪ノ種類ト刑ノ種類ヲ合記スル方實際適當ナルガ如シ。

第十六條モ無論明白ナル理由ナルガ故ニ均ク無用ニ屬ス。又其以下刑ノ執行ニ關スル諸條ニ於

テハ細則ニ屬スベキ事項多シ、例ヘバ第十七條第二項第十八條ヨリ第二十條ニ至ルガ如キ是レナリ。

本案ノ刑例ハ已ニ實際ニ行ハレ、之ヲ變更スルハ甚ダ困難ナルガ故ニ、余ハ之ニ就テ深ク論及セズ、左ノ諸項ヲ注意スルヲ以テ足レリトス。

一、死刑ヲ除ク外重罪刑ハ甚ダ錯雜ニシテ互ニ異ナル所ハ僅ニ刑期ノ長短ナルノミ。其刑ノ種類ヲ分テ八種トス、獨逸ニ於テハ懲役及五年ヲ越ユル城塞禁錮ノ二ヲ出サズ。有期懲役ノ期限ハ獨逸ニ於テハ一年以上十五年以下ニシテ、必ズ苦役ニ服セシムルモノトス。日本刑例ニ從フモ到底徒刑ト苦役ナキ禁錮ノ二種ニ止マル、苦役ヲ島地或ハ監獄ニ於テナサシムルニ依テ刑ノ種類ニ影響ヲ及ボサズ、又流刑ト禁獄ノ間ニ顯著ナル區別ナシ、只々刑期ノ長短異ナルノミ。何故ニ島地ニアル苦役ハ十六年以上二十年以下ニシテ、監獄ニ於ケル苦役ハ六年以上十五年繼續スベキヤ、其理由更ニ分明ナラズ、又何故ニ島地及監獄ニ於ケル苦役ハ一年ヨリ始ムベカラザルヤニ至テハ尤モ不明瞭ナリトス。左ノ如ク刑例ヲ定ムル時ハ實ニ簡便ナルベシ。

（イ）死刑

（ロ）徒刑（終身又ハ有期、島地又ハ監獄）

（ハ）苦役ニ服セザル六年以上十五年以下ノ禁錮

二、輕罪刑ハ獨逸國ニ於テハ五年以下ノ城塞禁錮又ハ禁錮又ハ百五十マルクヲ越ユル罰金トス日本草案ニ從ヘバ苦役ノ有無ニ拘ハラズ、五年以下ノ禁錮及二圓以上最上限ナキ罰金ナリトス。

苦役ニ服セシムル禁錮ハ單一ナル輕罪ニ對シテハ苛酷ニ過グルモノトス。只期限ノ長短ニ依テ懲役ト區別スルノミ。固ヨリ獨逸ニ於テモ禁錮ノ囚人ヲ一定ノ役ニ服セシムルノ法アリト雖、其各人ノ才能身分ニ相當スル方法ヲ以テ服セシムルモノトス。懲役ノ囚人ニ在テハ身分職業ノ如何ニ拘ハラズ、懲役所ニ設ケアル役ニ服セザルベカラズ。禁錮囚人ノ役ニ服スルハ之ヲ苦役ト見做サズ、故ニ獨逸國ニ於テハ服從ノ有無ヲ以テ刑ニ區別ヲ立ルコトナシ。

三、違警罪ノ拘留ノ刑ハ一日以上十日以下トス、獨逸國ニ於テハ一日以上六週以下トス。十日ノ最上限ハ低キニ失シ違警罪ニ對シテ畏戒セシムルノ效力アラシムルニハ不十分ナリトス。是ヲ以テ之ヲ觀レバ、刑ノ種類ヲ唯リ期限ノ長短ニ依テノミ區別スルハ誤レルニ似タリ。即チ違警罪ニ在テハ一日以上十日以下、輕罪ニ在テハ十一日以上五年以下、重罪ニ在テハ六年以上二十年以下若クハ終身ナルコト是レナリ。獨逸國ニ於テハ違警罪ニ在テハ一日以上六週以下、輕罪ニ在テハ一日以上五年以下、重罪ニ在テハ一年以上十五年以下若クハ終身トス。

獨逸ノ刑例ニ從ヘバ刑期ヨリモ寧ロ刑ノ性質及輕重ニ準據スルモノトス。違警罪ニ科スル罰金（五錢以上一圓九十五錢以下）モ亦甚ダ低下ニ過グ、獨逸國ニ於テハ百五十マルクニ至ルヲ得。

第三十九條　勳章ヲ佩ル等ノ權ヲ失フハ內國ノ勳章ニ限ラズ外國ノ勳章ニモ及ブベキナリ。

第四十條　重罪ノ刑ニ依リ第三十九條ニ揭ゲタル諸權利ヲ終身失フハ酷ニ過グル樣思ハル。例ヘバ玆ニ一人ノ六年ノ禁獄ニ處セラレタルモノアリ、其者タル第三十九條第六項ヨリ第九項ニ至ルノ單ニ私權利ニ係ル諸權ヲ終身間行フヲ得ザルノ理由アルコトナシ、只々判決中ニ定ムベキ期限間此諸權利ヲ停止スレバ已ニ十分ナルベシ（獨逸刑法第三十四條）

第四十一條　輕罪刑ノ爲メ現在ノ官職ヲ失フハ論ナシ、其他刑期間公權ヲ行フヲ停止スルヲ以テ足レリトスルガ如シ。獨逸刑法第三十二條及三十五條ニ於テハ輕罪刑ノ爲メ一定ノ要件アレバ定期公權ヲ失ハシムルヲ得。

第四十四條　重刑罪ノ爲メ私權執行ノ禁止ヲ生ズルハ酷ニ過グルモノトス。獨逸刑法ニ於テハ此ノ法ナク又刑ノ性質ニ依テ然ルベキモノニアラズ。勿論囚人ハ監獄規則等ノ抗抵アリテ自己ノ財產ヲ使用管理スル能ハザルニモセヨ、一般ニ其財產ノ管理ヲ禁ズルノ理由アルコトナシ。其管理ヲ禁ズルニ於テハ他日放免ノ日自己ハ勿論家族ニ至ルマデ大ナル損失ヲ被ルニ至ル、必竟

私權執行ノ禁ハ不平等ニ行ハル、刑ノ加重ニ外ナラズ、何トナレバ禁止ハ只々富人ニ及デ貧人ニ及バザルヲ以テナリ。且實際何レノ場合ニ於テモ間接ニハ財產ヲ續テ收用スルコトヲ妨ゲザルモノナリ。

又「ドロワ。プリウエー」（私權）ナル語ハ何レノ點ヨリ之ヲ見ルモ其義廣漠ニ失ス、何トナレバ執行禁止ハ單ニ財產ニ關スルモノニシテ、婚姻、父親ノ關係及他ノ身上ノ權利ノ如キ私權ニハ及ボサヾレバナリ。白耳義國及佛國ニ於テハ有罪判決ヲ受ケタルモノハ只々自己ノ財產ヲ管理及處分スルノ權ヲ失フノミ「シュスパンシヨーン」又ハ「エンテルジクシヨーン」（停止又ハ禁止）ナル語ハ不明瞭ナリ。

第四十七條　ヨリ第五十三條ニ至ル、監視ノ期限ハ法律ニ於テ其最上限ヲ平等ニ定ムベキモノナリ。第四十七條ニ於ケル十五年ハ長キニ過グルモノ、如シ。又第四十八條ニ於ケル刑期ノ法律上ノ最上限（刑期ノ法律上最上限ナル語ハ不明瞭ニシテ各重罪ニ關スル法律上最上限トモ解スルヲ得ベシ）ニ依テ定マル期限ハ勝手隨意ナルモノニシテ、監視ノ目的上ニ一モ注意スル所ナシ。獨逸國ニ於テハ監視ノ期限ヲ長キモ五年トス、警察廳ハ其場合ニ臨ミ此期限內ニ於テ實際監視ヲ行ハントスル期限ヲ定ムルモノナリ。

監視ノ效力ハ法律上ニ於テハ警察官隨意ニ處分スルヲ得レバナリ。之ヲ定メザルニ於テ

リ（獨逸刑法第三十九條）若シ監視ノ效力ヲ細則ヲ以テ定ムル時ハ、外國人ニ關スル特別ノ效力ヲモ除カザルベカラズ。何トナレバ若シ否セザルニ於テハ（放逐權ハ他國人ニ對スル唯一ノ效力ナリト信ズルニ至ルヤモ料リ難ケレバナリ。然ノミナラズ逐放ノ權利ハ監視以外ノ場合ニ於テモ之ヲ用ユルコトアリ。

第五十條ニ　於ケル「ウー。ラ。ペーン。プレンシバル。ア。チエセー」（主刑ノ終リ）ナル語ハ精密ナラズ、凡ソ監視ハ主刑ヲ執行セザル時、卽チ主刑ノ期滿免除トナリ又ハ免刑トナリタル時ニモ亦始マルモノナリ。

又監視ハ單ニ羈絆刑ノ場合ニ限ルヤ、又ハ他ノ場合ニモ科スルヲ得ルヤ不明瞭ナリ。例ヘバ茲ニ死刑ノ宣告ヲ受ケタル者アリ、特赦ニ依リテ十六年ノ苦役ニ減等セラレタル時ノ如キ是レナリ。

第五十四條　何故ニ罰金ヲ輕罪刑ニ附加セザルヤノ理由モ亦解スベカラズ。

罰金ヲ完納セザル場合ニ於テハ輕禁錮ニ換フベキハ便宜ニアラザルノミナラズ、刑ノ合算ニ關スル元則ニ抵觸ス、獨逸國ニ於テハ罰金ヲ懲役ニ換フベキ場合ニアリテハ斯クノ如キ規程アルヲ要ス。（獨逸刑法第二十一條及第二十八條）

第五十五條　第一項本項ノ規程ハ廣義ニ過グ、例ヘバ罰ヲ受クベキ書類又ハ僞造ノ貨幣ト雖、罪ナクシテ所有スル物ナレバ之ヲ沒收スルコトヲ得ズ。

第二項、本項ノ規程ハ狹義ニ失ス、犯罪ヲ行フ爲メ準備シタル物件モ亦沒收スベシ、例ヘバ未遂犯罪ノ場合ニ於ケルガ如シ。

第三項、本項ノ規程ハ不明瞭ニシテ其文字正當ナラズ、余ノ知ル所ニ依レバ何レノ國ニ於テモ斯クノ如キ規程アルコトナシ、例ヘバ僞證ニ誘惑セラレタル金錢又ハ僞造ノ金錢ヲ以テ買求メタル物件ヲ沒收スベキコトヲ信ゼズ、重罪ヲ犯スノ用ニ供シタル物件ト記載スルヲ可トス。獨逸國（刑法第四十條）ニ於テハ（特別ノ規程ヲ除キ）正犯又ハ共犯ニ屬スル物件ニシテ重罪若クハ輕罪ニ依テ得有シ又ハ犯罪ノ用ニ供シ或ハ準備シタリシ物ニ限リ之ヲ沒收スルヲ得、且故意ノ重罪又ハ輕罪ノ場合ニ限レリ。罰ヲ受クベキ書類ニ就テハ第四十一條ニ特別ノ規程ヲ設ケタリ。又第四十二條ニ從ヘバ有罪ノ宣告ヲ受ケタルモノナキ時ト雖亦沒收ヲ宣告スルコトヲ得。

第五十七條　ヨリ第六十條ニ至ル。此諸條ハ裁判手續法ニ屬スベキモノニシテ、此手續法ヲ以テ完全ニ定ムベキモノトス（獨逸治罪法第四百九十六條第五百六條迄）

第六十三條　未決拘留ヲ判決ニ揭ゲタル刑ヨリ減算スルニ當リ、本條ニ於ケル如ク其範圍廣大ニ

シテ普通ニ行フハ再考スベキコトナリトス。獨逸刑法第六十條ニ於テハ未決拘留ノ減算ヲ各場合ニ於テ裁判官ノ意見ニ任セタリ。是レ何レノ點ヨリ見ルモ正當ナリ。何トナレバ此未決拘留ニシテ之ヲ爲スベキ場合ハ刑自己ノ執行ニ於ケル如ク均ク必要ナルモノナレバナリ。勿論減算ヲナスベキ場合ニ於テハ例ヘバ被告ノ罪アルニアラズシテ、審問ヲ永ク續ケタル時、又ハ最初重罪ニ就テノ告訴ヲ受ケ、終リニ輕罪刑ノ宣告ヲ受ケタル時、又ハ一モ拘留スベキ十分ノ理由ナカリシ時、又ハ被告悔悟シタルニ依リ、又ハ其經歷若クハ家族等ニ注意シテ寬典ノ處置ヲ行フ時等是レナリ。然レドモ一般ニ未決拘留ヲ減算スルハ誤リニシテ刑例全體ヲ動カスモノナリ。

其他未決拘留ノ減算ヲ罰金ニ及ボスヲ得ルヤ否ヤニ至テハ更ニ明言ナシ。是レ爲スヲ得ベキナリ。何トナレバ罰金ヲ羈絆刑ニ減ズルヲ得ルモノナレバナリ。而シテ獨逸國ニ於テ之ヲ許可シタリ。

「ウー、ル、コンダムネー。エー、ミー。アン、エター。ド、アレスタショーン。」（犯人拿捕セラレ又ハ自カラ捕ニ就キタル日）ナル語ハ精密ナラズ。刑期ヲ起算スベキ日ハ卽チ刑ヲ執行スル爲メ當該監獄ニ引渡サレ、又ハ自ラ監獄ニ就キシ日ナリトスルヲ常則トス。

第六十五條　假出獄ハ何レノ場合ニ於テモ刑期四分ノ三ヲ經過シタル後許スコトヲ得ベシトスル

點ヨリ論ズレバ、本條ノ規程ハ亦廣漠ニ過グ。獨逸國（刑法第二十三條）ニ於テハ長期羈絆刑ノ場合ニ限リ假出獄ヲ許スコトヲ得、而シテ少クモ「一年ヲ經過シタル後ニシテ犯人ノ承諾アルヲ要ス。悛改ノ證アルヲ要セズ、何トナレバ其證ヲ擧グルコト甚ダ難ケレバナリ。只々行狀ノ方正ナルヲ要スルノミ。短期ノ羈絆刑ニ在テハ尙ホ一層之ヲ減縮スルノ理由ナカルベシ。終身羈絆刑ノ場合ニ於テ假出獄ヲ許スハ亦タ再考スベキコトナリ。此場合ニ於テハ只ダ特赦ヲ以テ減等スベキモノトス。

假出獄ヲ許スノ決定ハ司法大臣之ヲ司ルベキモノナリ。

第六十七條　假出獄ヲ取消スベキ場合ハ再ビ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタル時ニ限ルヤ、又ハ當人ノ行狀正シカラズ、若クハ其者ノ負フタル義務ヲ盡サヾル時ニモ及ボスヤ否ヤ明瞭ナラズ。獨逸刑法第二十四條ニ於テハ行狀正シカラズ、若クハ義務ヲ盡サヾル場合ヲ定メタリ。是レ採用スベキコトナリ。何トナレバ若シ然カセザルニ於テハ、其得タル恩典ヲ濫用スルモ罰セザルニ至レバナリ。例ヘバ勞役ヲナサズシテ遊逸及乞丐スルガ如キ是レナリ。

更ニ刑ヲ執行スル爲メ監獄ニ入レタル場合ニ於テ、其間ノ期限ヲ判決ニ定メタル刑期ニ算入スベキヤ否ヤニ關スル規程モ亦之ナシ。獨逸國ニ於テハ此期限ヲ刑期ニ算入スルヲ許サズ（獨逸刑法第二十四條）